

第3節 Q調査区

Q調査区の遺構・遺物については、炉状遺構のみを低地部の範囲で取り扱った。13基の炉状遺構が検出された。

1. 中世の調査

炉状遺構1（第174図）

K-31区において検出された。円形の燃焼部のみ残るもの、北北西方向に掻き出し部があったものと見られる。床面の中央付近に青磁の椀と土師器が出土した。また黒曜石も出土したが、これは外部から入り込んだものと考えられる。床面は熱によって変色したと考えられ、極暗赤褐色である。焚き口より約40cm奥の炉壁の断面はフラスコ状を呈しているのが明瞭に観察され、内部には炭、灰、焼け土の混ざる灰褐色土および崩落した炉壁と考えられる赤褐色のブロック等が堆積するが分層できなかった。また、炉壁には礫が使用されており、焚き口の左側には袖石が残る。

炉状遺構2（第174図）

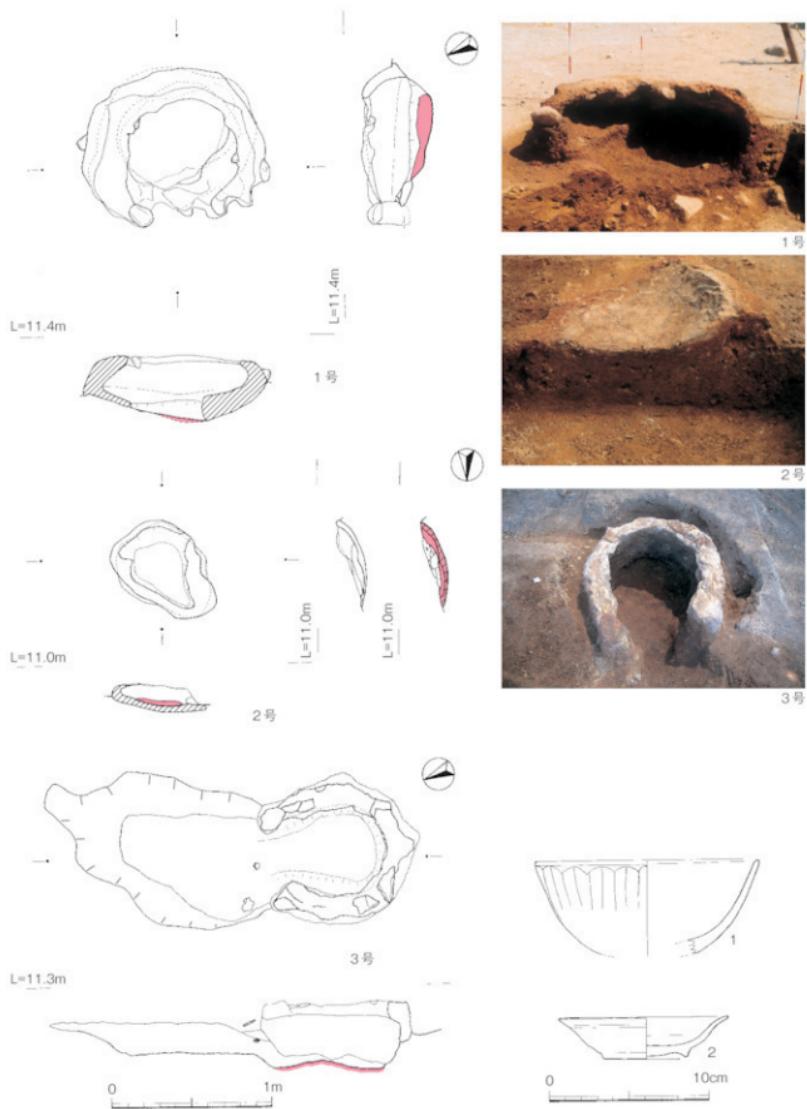
J・K-32区において検出された。円形の燃焼部のみ残るもの、残存している燃焼部の形状から北北西方向に掻き出し部があったものと見られる。東側炉壁の断面はフラスコ状に抉られ、オーバーハンギングしている。床面は被熱により堅く縮まっているが、簡単に剥がれることから、熱を逃がさないために、粘土による貼床を行っていた可能性も考えられる。埋土は概ねレンズ状の堆積を見る。

炉状遺構3（第174図）

J-32区において検出された。長軸は約210cmを測る。焚き口の左右に袖石を使い、燃焼部は94cm×100cmのC字形プランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られており、残り具合も良好である。炉壁の断面はフラスコ状に抉られ、オーバーハンギングしている。検出面より約35cm下に被熱痕のある床面がある。掻き出し部は南南東方向にひろがる。粘土、炭、灰の混ざった埋土内には白磁と青磁片が含まれる。燃焼部の約30cm東隣に炭化物の拡がりがみられる。直径は約30cm～40cm、厚さは約2～3cm程度である。



第173図 炉状遺構配置図



第174図 炉状遺構 1～3

炉状遺構4（第175図）

J-32区において検出された。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度である。焚き口は炭化物および遺構の残り具合が東側にあったものと推測できる。炉壁はとても堅く、焼き締まっている。埋土は明褐色土で炭化物や炉壁に破片を多く含む。

炉状遺構5（第175図）

I-33区において検出された。長軸は約290cmを測る。焚き口の右に袖石が残る。燃焼部は96cm×115cmのC字形プランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られており、残り具合も良好である。炉壁の断面をみると床面からほぼ垂直に立ち上がっている。燃焼部の検出面より約40cm下に被熱で堅く締まった灰色の層がある。その直下の床面は炉壁とつながっており被熱で赤レンガ色を呈している。埋土は焼土、炭化物、灰を多く含む。掻き出し部は北東方向に拡がっており、いくつかのピットを有するものの、本遺構との関連は不明である。

炉状遺構6（第176図）

I-32区において検出された。検出時に掻き出し部の殆どが削平されている。燃焼部は赤褐色の炉壁を持ち、一部消失しているものの形状はC字形であると考えられる。燃焼部の検出面より約30cm下に被熱で赤レンガ色を呈する床面が見られる。埋土には大量の炭化物が含まれる。

炉状遺構7（第176図）

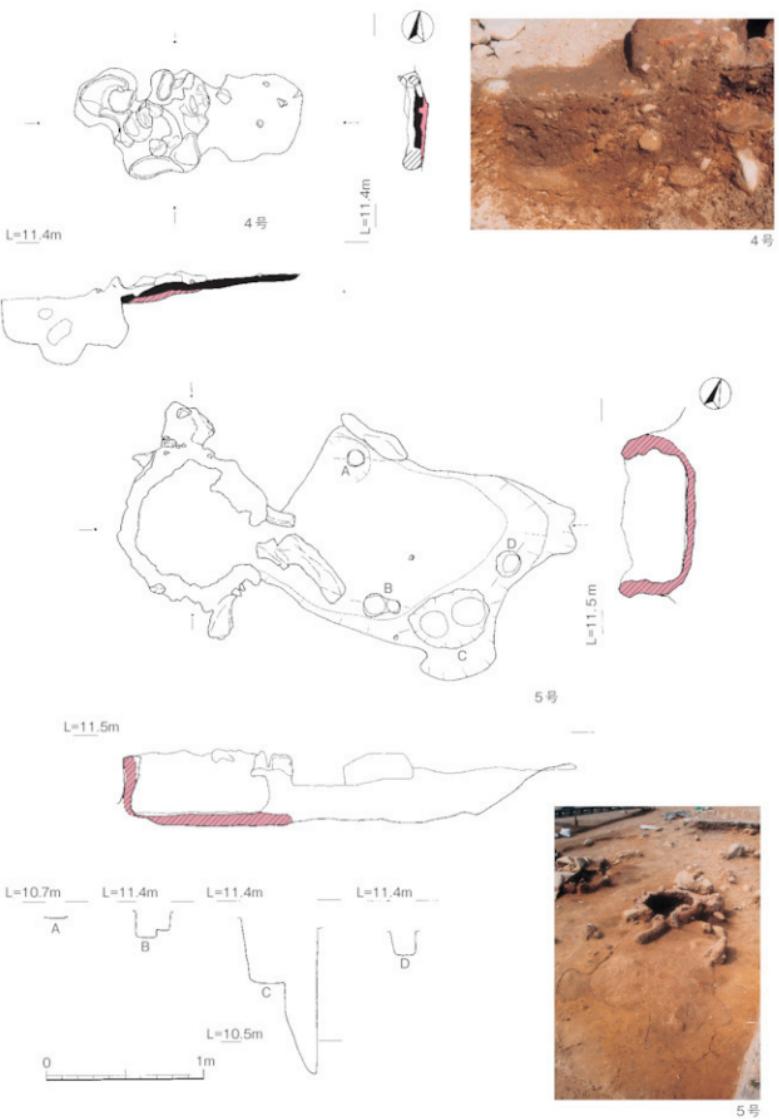
I-32区において検出された。長軸は約235cmを測る。焚き口の右に袖石が残る。燃焼部は90cm×93cmのC字形のプランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られており、残り具合も良好である。炉壁は厚さが8cm～13cmあり、断面をみると床面から垂直に近い角度で立ち上がっている。燃焼部内の埋土は炭化物と崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊も混ざる黒褐色土である。掻き出し部の埋土は焚き口付近は極暗褐色土であり後半部分は暗褐色土とに分かれ。しっかりと掘り込みや燃焼部を構成する粘土がⅢ層にしっかりと張り付いていることから、地面を掘り込んだ後、粘土を貼り付けながら本遺構を築いていったものと考えられる。11号と切り合う形で検出されたが、検出状況から11号が先に作られていると推察される。埋土中に青花の碗を含む。

炉状遺構8（第177図）

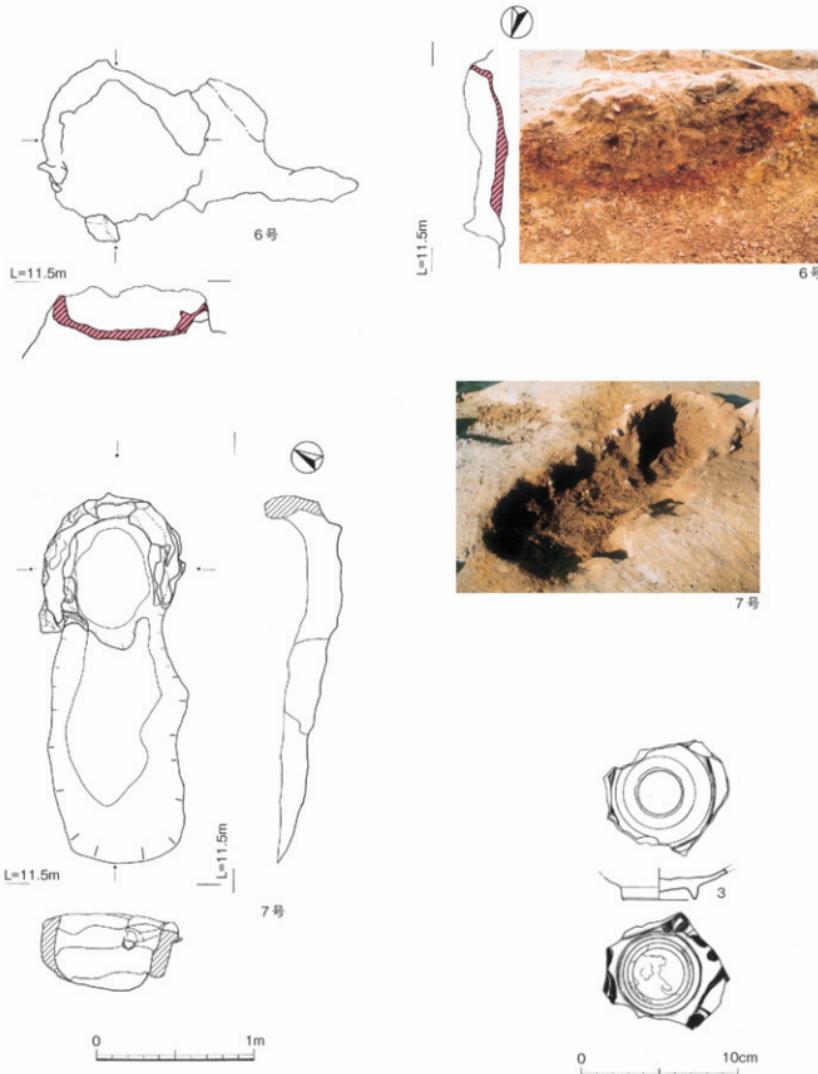
J-31区において検出された。長軸は約225cmを測る。焚き口の左に袖石が残る。この袖石は長さが約30cmある直方体でこれを立てて据えてあり、本遺構の長期にわたる使用を意図したものではないかと推察される。燃焼部は100cm×120cmのC字形を呈している。炉壁は20cm～40cmぐらいの大きさの礫と混ぜて作られており、残り具合も良好である。炉壁は厚さが10cm～15cmある。断面はフラスコ状を呈し、上部がオーバーハングしており、床面は被熱で堅く焼き締まっている。燃焼部から掻き出し部にかけての埋土は粘土、炭化物、灰を多く含み、分層はできなかつたため短時間のうちに埋まったものと考えられる。

炉状遺構9（第177図）

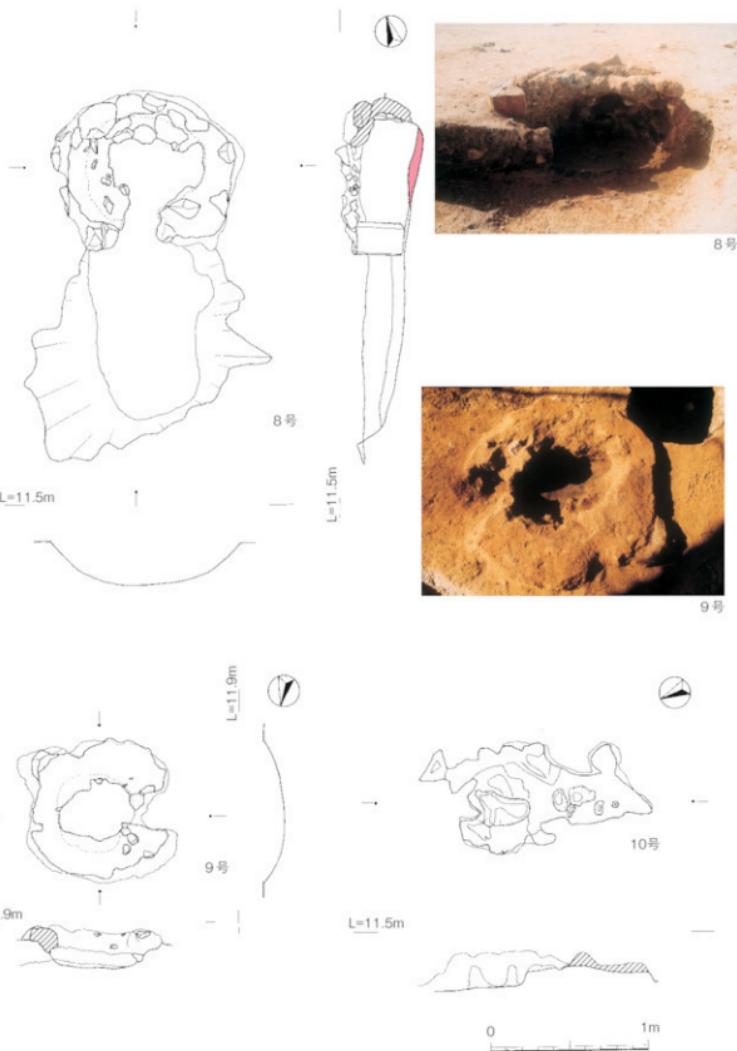
I-31区において検出された。赤ホヤ火山灰層上に位置する。円形の燃焼部のみ残るもの、西南西方向に掻き出し部があったものと見られる。85cm×90cmのC字形プランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られてある。炉壁の断面はフラスコ状を呈しており上部はオーバーハングしている。内部には炭、灰、焼け土の混ざる灰褐色土および崩落した炉壁と考えられる赤褐色のブ



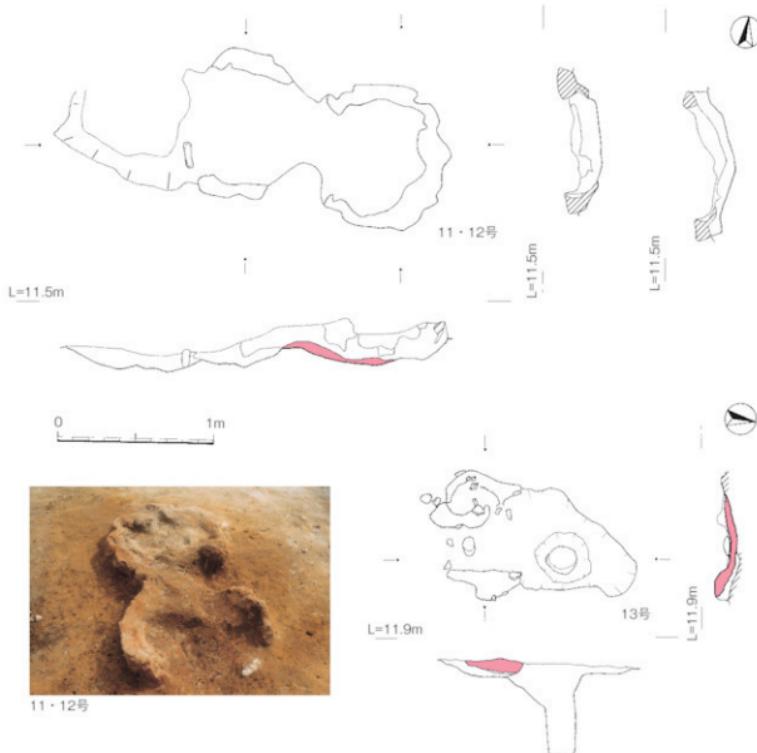
第175図 炉状遺構4・5



第176図 炉状遺構 6・7



第177図 炉状遺構 8~10



第178図 炉状遺構11~13

ロック等が堆積するが分層できなかった。炉壁の中に釘とみられる鉄製品が1点あったが、本遺構の構築時に入り込んだものであろう。

炉状遺構10（第177図）

I-31区において検出された。赤ホヤ火山灰層上に位置する。
検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度で全体の形状は不明であるがC字状あるいは円形の燃焼部（炉壁）と灰の掻き出し部を有し上面観で鍵穴状を呈するものであると考えられる。焚き口は炭化物および遺構の残り具合から南南西側にあったものと推測できる。

炉状遺構11（第178図）

I-32区において検出された。7・12号炉状遺構と切り合うかたちで検出された。検出状況から11号が最初に作られ、次に12号が作られ、最後に7号が作られたものと考えられる。炉壁は赤褐色を呈し、埋土に炭化物や崩落した炉壁の一部と考えられる赤褐色のブロック等を含む。

炉状遺構12（第178図）

I-32区において検出された。11号と切り合うかたちで検出された。検出状況から11号を破棄した後に12号が作られている。焚き口は炭化物および炉壁の形状から西側にあったものと推測できる。炉壁は赤褐色を呈し、床面や側面が被熱で堅く焼き縮まっている。7・11・12の各遺構は時期的に極めて同時期に稼働していたのではないかと考えられる。

炉状遺構13（第178図）

G-32区において検出された。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度で全体形状は不明であるがC字状あるいは円形の燃焼部（炉壁）と灰の掻き出し部を有し上面観で鍵穴状を呈するものであると考えられる。北側に炉壁が、南側に焚き口や掻き出し部があったのではないかだろうか。深さ約50cmを有するものの、本遺構との関係は不明である。

炉状遺構観察表

現場遺構名	区	主軸	燃焼部 (cm)	掻き出し部 (cm)	遺構内遺物	備考	形態
1号	K-3-2	N62' W	115×120	不明	青磁、土器	袖石	鍵穴形
2号	K-3-2	S48' E	55×60	不明	—	—	鍵穴形
3号	I-3-2	S20' W	94×100	94×135	白磁、青磁、陶器	燃焼部堆積じりの粘土	鍵穴形
4号	I-3-2	S83' W	—	不明	—	—	鍵穴形
5号	I-3-2	S74' W	96×115	140×190	土器	袖石	鍵穴形
6号	I-3-2	N70' E	100×115	不明	—	—	鍵穴形
7号	I-3-2	N64' E	90×93	90×150	青花	11号と切り合	鍵穴形
8号	I-3-1	N20' E	100×123	135×160	—	袖石	鍵穴形
9号	I-3-1	N73' E	85×90	不明	—	—	鍵穴形
10号	I-3-1	N23' W	—	不明	—	—	不明
11号	I-3-2	S85' E	—	不明	—	7号12号と切り合	鍵穴形
12号	I-3-2	S85' E	85×92	不明	—	11号と切り合	鍵穴形
13号	H-3-2	N10' W	—	不明	—	—	鍵穴形

炉状遺構内出土遺物観察表

件 番号	掻取 番号	種別	器種	出土区	取り上げ番号	層位	法量 (cm)			地土の 色・調	釉薬の 色・調	備 考
							口径	底径	器高			
第178図	1	青磁	板	K-31	3 4	1号	14.0	—	—	灰白色	青磁釉	—
	2	白磁	皿	J-32	6	3号	10.2	5.2	2.6	灰白色	透明釉	—
第176図	3	青花	碗	I-32	32	7号	—	4.6	—	灰白色	透明釉	—

第4節 G調査区

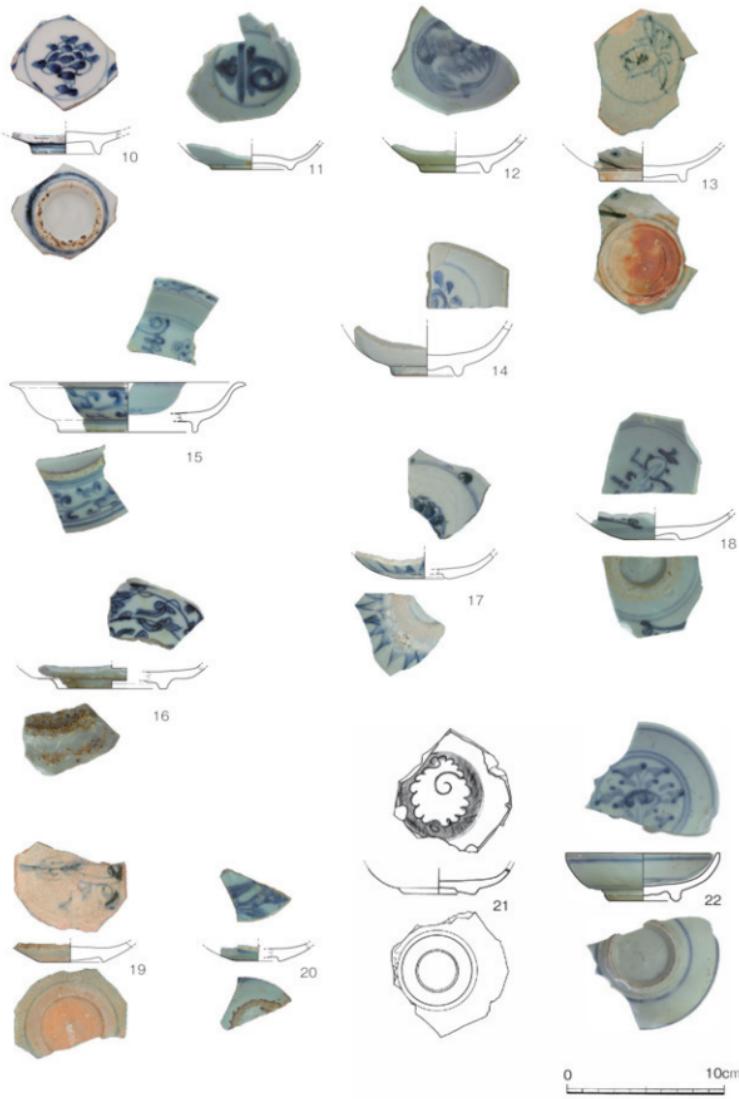
ここではG調査区から検出された遺構・遺物について報告する。低地部内での位置関係は第1図を参照にされたい。

1 中世の調査

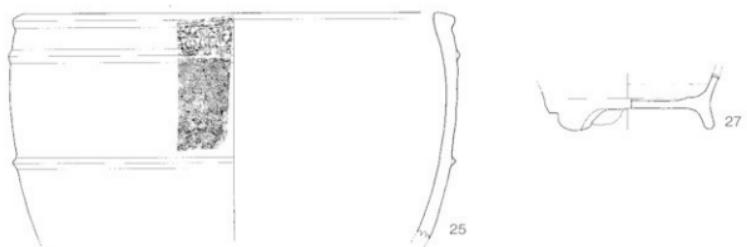
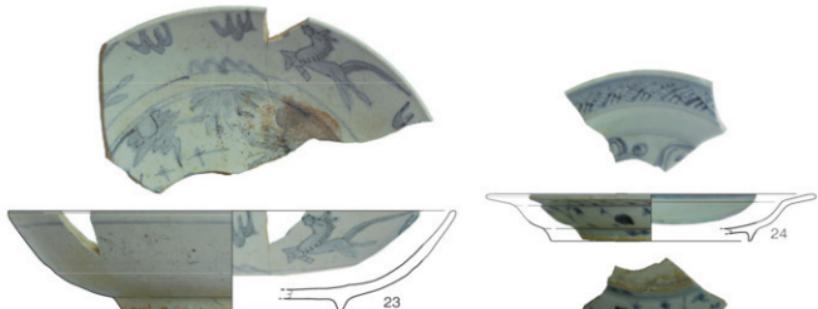
G調査区では、中世の遺構は検出されなかったが、中国青花の碗・皿等の遺物が出土した。



第179図 青花 1



第180図 青花2



第181図 青花3及び瓦質土器

青花（第179～181図）

1～3は景德鎮窯系の蓮子碗である。4～14は見込みがゆるやかに盛り上がる饅頭心の形状の碗に分類されるものである。4は深さが深いもので、見込みに花文、外面は草花文が描かれる。疊付には砂が付着する。5～8は饅頭心の碗の口縁部である。やや深さが浅いものである。9は漳洲窯系のものである。10～14は底部である。12～14は見込みが盛り上がらないタイプのものである。11～13は高台内面は露胎するもので、13は漳洲窯系のものである。また13は赤色の顔料が高台内面の半面に塗布されている。

15～24は皿である。15は口縁部が端反になるものである。16は外面腰部から高台、疊付にかけて、砂粒が溶着する。17～20は底部が甚筒底になるものである。19は漳洲窯系のもので、他は景德鎮系のものである。21が景德鎮窯系のもので、見込みに法螺貝が描かれる。22は福建省付近の窯で焼かれたものである。23は漳洲窯系のもので、焼成不良で呉須の発色も悪い。24は景德鎮窯系のもので、折れ縁の皿である。

瓦質土器（第181図）

3点のみであった。25は口縁部外面に花文のスタンプが施される。26は底部である。足は1足しか残存してなかったが、3足になるものと思われる。27は瓦質としたが土師質のようなもので、底部に3足の足を有するものである。

青花・瓦質土器観察表

種類 番号	規範 番号	種別	基準	產地	出土区	取上りげ番号	層位	重量(g)		胎土の 色調	釉薬の 色調	施釉	備考	
								口径	底径	高さ				
第179図	1	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	5.2	淡黄色	透明釉	疊付以外全施釉	C	
	2	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	4.6	—	灰白色	透明釉	疊付以外全施釉	C	
	3	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	7.0	—	灰白色	透明釉	疊付以外全施釉	C	
	4	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	11.1	4.6	5.2	灰白色	透明釉	疊付以外全施釉	
	5	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	14.0	—	灰白色	透明釉	現存底全面施釉	E	
	6	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	13.2	—	灰白色	透明釉	現存底全面施釉	E	
	7	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	12.8	—	灰白色	透明釉	現存底全面施釉	E	
	8	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	11.5	—	灰白色	透明釉	現存底全面施釉	E	
	9	青花	碗	漳洲窯系	G 地点	—	—	12.4	—	灰白色	透明釉	疊付から 高台内面施釉	小野崎 E 傳源心	
第180図	10	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	4.2	—	灰白色	透明釉	疊付以外全面施釉	明治 E 疊付に砂粒付着
	11	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	5.0	—	灰白色	透明釉	疊付から 高台内面施釉	明 E 傳源心 疊付に砂粒付着
	12	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	4.0	—	灰白色	透明釉	高台底から 高台内面施釉	
	13	青花	碗	漳洲窯系	G 地点	—	—	—	5.0	—	淡黄色	透明釉	高台底から 高台内面施釉	大阪 F・G
	14	青花	碗	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	4.0	—	灰白色	透明釉	疊付以外全面施釉	
	15	青花	皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	15.0	8.6	3.2	灰白色	透明釉	疊付以外全面施釉	景德鎮 瓢 B
	16	青花	皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	6.9	—	灰白色	透明釉	疊付以外全面施釉	疊付周辺に砂粒付着
	17	青花	皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	3.7	—	灰白色	透明釉	底面無釉	皿 C 基筒底
	18	青花	皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	3.7	—	灰白色	透明釉	底面無釉	皿 C 基筒底
第181図	19	青花	皿	漳洲窯系	G 地点	—	—	—	4.1	—	淡黄色	透明釉	底面の一部無釉	皿 C 基筒底
	20	青花	皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	2.8	—	灰白色	透明釉	底面無釉	基筒底
	21	青花	皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	—	4.6	—	灰白色	透明釉	高台底から 高台内面施釉	原子高台
	22	青花	皿	福建か?	G 地点	—	—	9.8	4.4	3.1	灰白色	透明釉	疊付以外全施釉	漳州窯
	23	青花	大皿	漳州窯系	G 地点	—	—	28.6	14.0	6.4	淡黄色	透明釉	疊付以外全施釉	
	24	青花	大皿	景德鎮窯系	G 地点	—	—	21.0	12.7	3.0	灰白色	透明釉	疊付以外全施釉	景德鎮 皿 F
	25	瓦質土器	火鉢	—	—	—	—	—	35.0	—	灰白色	—	—	—
	26	瓦質土器	火鉢	—	—	—	—	—	25.5	—	淡黄色	—	—	—
	27	瓦質土器	火鉢	—	—	—	—	—	14.6	—	灰白色	—	—	—

2 近世以降の調査

G調査区では、地方郷土年寄の屋形跡と、それに付帯する施設として石垣、石組み造構、暗渠（排水施設）、池等が検出された。また、郷土年寄屋形で使用されたと思われる。薩摩焼をはじめとする陶磁器等の遺物が大量に出土している。

（1）遺構

石垣（第182～188図）

石垣は郷土年寄屋形を囲む状態で検出されたもの（石垣1～5）と、それ以外の施設に付帯すると考えられる石垣（石垣6～8）が検出されている。石材はすべてN調査区（n=3・6・9）で検出された石切場と同じ弱性溶結凝灰岩である。

石垣1（第182図）

L～N-13～15区で検出された。築石は方形ないしは長方形に整形した切込接である。石垣下部は、地表面をわずかに整地した程度で根石が置かれているものと思われ、地表面の凹凸や傾斜に合わせて根石が積まれている。天端石は高さをそろえるため加工が施されている。

石垣2（第182・183図）

L～O-10～13区で検出された。石垣1と同様に築石は接着面に加工を施した切込接である。石垣下部は、やや凹凸が見られるもののほぼ平坦に根石が積まれている。上部は一部欠損している箇所がみられる。

石垣3（第183図）

Q～R-12・14区から検出された。築石は切込接である。築石の2か所に「矢穴」と呼ばれる長方形の小穴が見られる。矢穴とは、岩石を大きく割る際、工具で穴を穿ち、そこに穴の大きさに合う木製の楔を打ち込み、水を描けて膨張させ、その力で割ったもしくは削ろうとした痕跡である。

石垣4（第183図）

N・O-13・14区で検出された。暗渠及び隠居への通路と、一段高い庭部分の境を分ける石組みである。薄い長方形に整形された石を2～3段積み上げている。

石垣5（第186図）

N・O-17・18区で検出された。石垣上部と下部で積み方が異なっており、古い石垣の上に新たに石垣を積み直したものと考えられる。石垣下部は野面乱積で、上部は一部布積で、表面加工石を再利用した箇所も見られる。

石垣6（第187図）

N・O-18～22区で検出された。長方形に加工された切込接の築石が布積で積まれる。石垣の高さは一定ではなく、ある部分から倍程度高く積まれる。石垣自体は凝灰岩の上に積まれ、凝灰岩にもノミ痕や石を剥ぎ取った痕が見られることから、N調査区にあった近世の石切場が採石をしなくなった後に築かれたものと思われる。石垣出隅は算木積で、裏込めにも凝灰岩が使用され、石と石の間にはバラス状になった凝灰岩や土が詰められる。

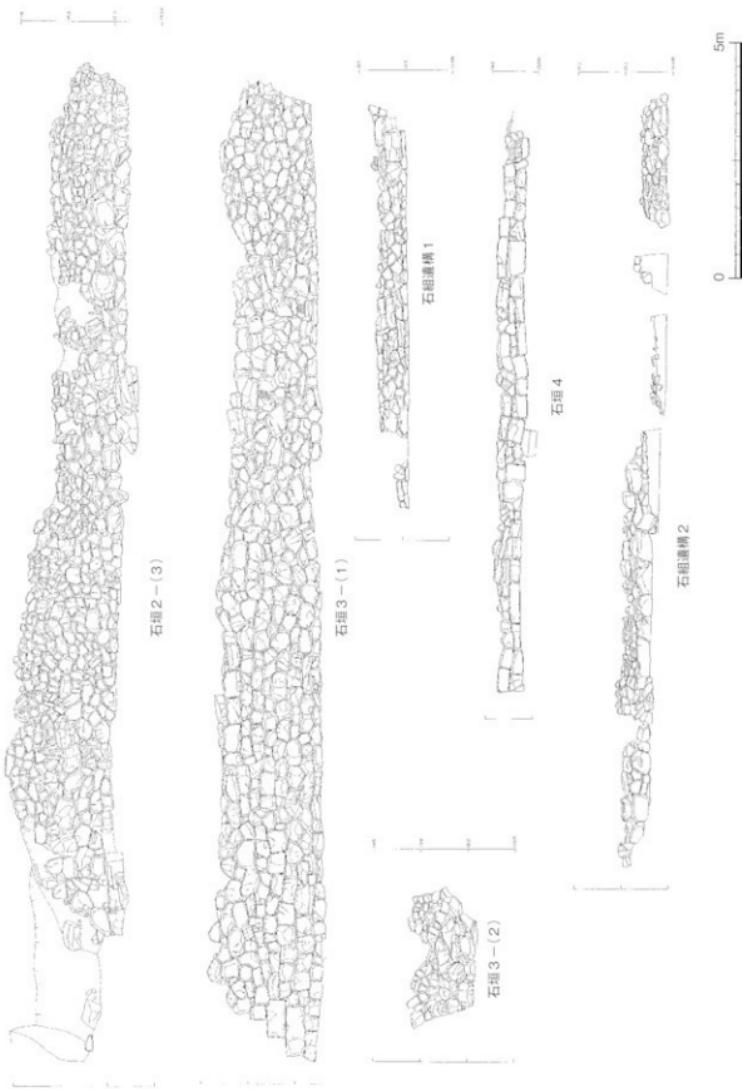
石垣7（第188図）

K～O-17～19区で検出された。石垣5から南東方向に延びる石垣で、やや奥まった部分に積まれたものであるため、正面にあたる石垣5に比べて築石の積み方が雑で、切込接の乱積みである。

第182図 石垣1・2



第183図 石垣2～4及び石組み遺構1・2





石垣 1 左端部



石垣 1 右端部



石垣 2 (3) 左端部



石垣 2 (3) 中央部



石垣 2 (3) 右端部



石垣 2 (2) 右端部



石垣3 左端部



石垣3 中央部



石垣3 右端部



石垣3 右端～折れ部



石垣遺構1と池跡

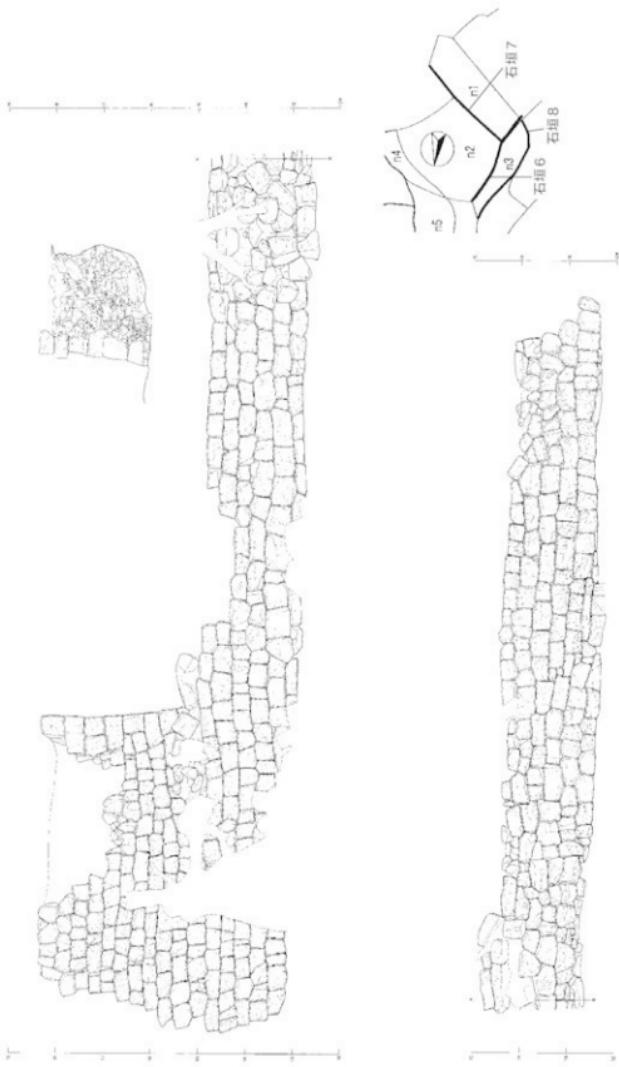


石垣遺構2と池跡

第186図 石垣5



第187図 石垣6





石垣6断面拡大図



石垣7



石垣8



石垣8

第188図 石垣6断面拡大図及び石垣7・8

石垣8（第188図）

O・P-18～23区で検出された。1～2段の低い石垣である。

石組み遺構（第183図）

Q・R-12～15区で検出された。薄い長方形の角礫や円礫を積み上げ、池の縁に使用している。後方は裏込として粘土を使用して固め、土手の崩壊を防いでいる。

建物跡（第189～192図）

O-16区で建物跡1、O・P-13区で建物跡2の2棟が検出された。他にも周辺に柱穴と思われるピットが存在したが、建物跡として並ばなかった。

建物跡1（第189図）

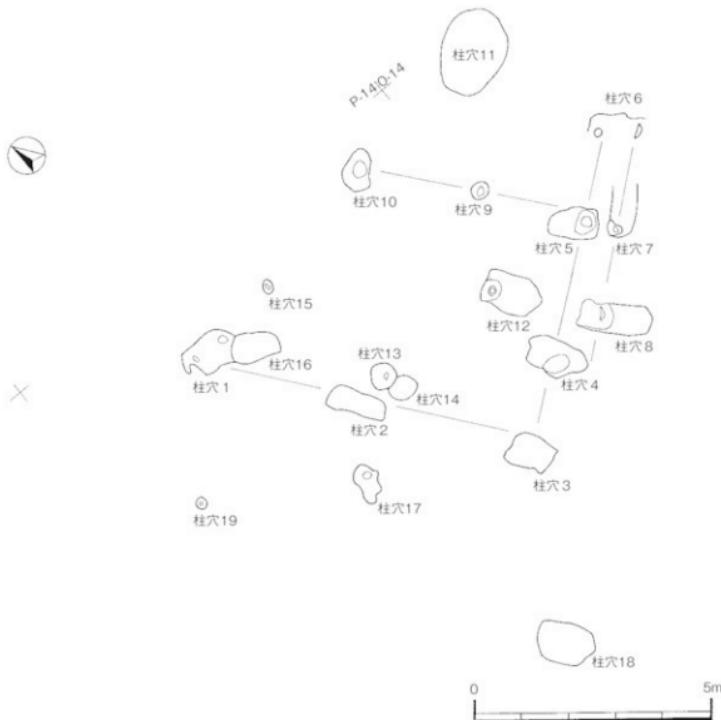
O-16区で検出された。柱穴内には礎石ではなく、礎石を置くための坪地業に用いた碎石等が検出されている。各柱穴の埋土について表にまとめた。

	(1)	(2)	(3)
P1	柱穴直徑20cm Hue10Y 6/1～5/1(灰色)シラスと糞便した土が混じっている。	シラスと(1)と糞便した黄鉄石が混ざっている。	円礫や石片(小礫～中礫)が廻反とシラスの直った土に入る。Hue5Y 4/1
P2	柱穴裏あり。直徑22cm 色P1と同じ	シラスとバッチャ状に入った灰色の土と混ざり土。	円礫や角のとれた石(中礫が多い) 番號廻反有や石英の新石が多い、円状に布石してある。(マトリックスはシラスと黒灰色の土との混ざり土)
P3	直徑28cm シラスが中に入っていて面白い。	(1)をとりまくように中礫から巨礫が入っている。	シラスと黒灰色の土との混ざり。
P4	全くP3と同じ。ただし少し複数ある。		
P5	柱穴裏。よしわからない。P2に類似、別のpitに切られていいく。		
P6	柱穴裏がある。直徑18cm、灰色 Hue10Y 6/1～5/1 P2と同じ		
P7	柱穴裏があり。直徑22cm ややうすい	シラスと灰色土との混ざり土。	(1)(2)を混むように小礫が混じるが入っている。
P8	紅褐色(7.5YR 4/2)の土が下のpitを切っている。	黒灰色(Hue10Y 6/1～5/1)	シラス P1の(2)円(pit)の外側にこぶし大のシラス、柱穴裏(1)すらとある。
P9	柱穴裏がほつきりしている。直徑22cm	シラス(混ざり土)	pitの外側に円状に小礫が分布。マトリックスは砂粒。
P10	柱穴裏はほつきりしない。中心はシラスが入っているが円状に灰褐色の土の中心が見える。	マトリックスはシラス。小礫がpitの最外側を円状にこぶし。	
P11	シラス。柱穴裏うすらとある。	シラス、pitの最外側を円礫(小礫)が円状にこぶし。P1に似ている。	
P12	シラス。柱穴裏? 外ラインだけうすらとある?	砂粒の中から小礫が混じっている。	シラス
P13	P12の(3)と同じ。	P12の(3)と同じ。	シラス
P14	柱穴裏よくわからない。柱穴の中に少し中礫がある。	シラス	
P15	シラスに粘土がブロックで入る。固い(植物)の殻の底)出た。		
P16	P13を切っている。石英の塊、腐灰岩などが数個たまっている。	シラス。P13の(3)に続く	
P17	角礫と円礫に入る。スマが入っている。全体的にうすい、底が見えている。		
P18	pit埋土どうなくそな底がみえている。陶器蓋、角礫が数個散らばっている。		
P19	陶器蓋が全体に入っている。	pit最外側を混むように中礫が分布。	
P20	陶器蓋あり。全体的に底、軽石が散っている。		
P21	陶器蓋(4リットル)片出た。中段2コ(中心) pit外側に1コ分布。		
P22	陶器蓋、軽石が全体的に分布。		
P23	瓦、石、灰物混入、全体的にpitの形が不鮮明、植物の根が多くあることから、樹根によって攪乱を受けている? P11が切られている。		
P24	底のうすく見えている。Hue4Y 4/1(灰色) 種分がにじみ出している。		
P25	種分(じみ)がうすく見えている。		
P26	鉄浮出土、pitの直徑が65cmほど。石がpitの外側の方に数個ある。		
P26	中心部を固くしまっている。中心部シラス、(灰色)外側スミ(黄じり) P27の土に類似。石が数個(5コ)ほど pit外側に分布。		
P29	二枚貝片出土。中心部P27の土に類似。外側シラス黄じり土。巨礫2コ分布(外側)		

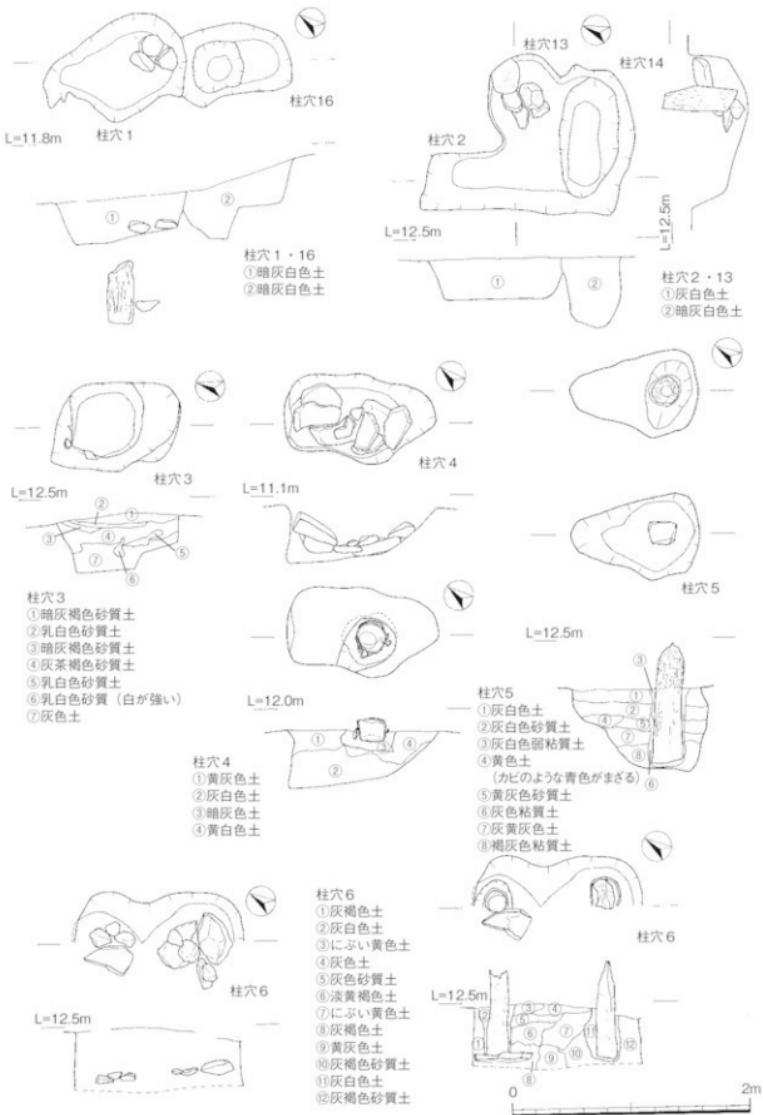
P17～P29 (205のぞく)
Hue10Y 0/1～5/1 (灰色)

建物跡2（第190～192図）

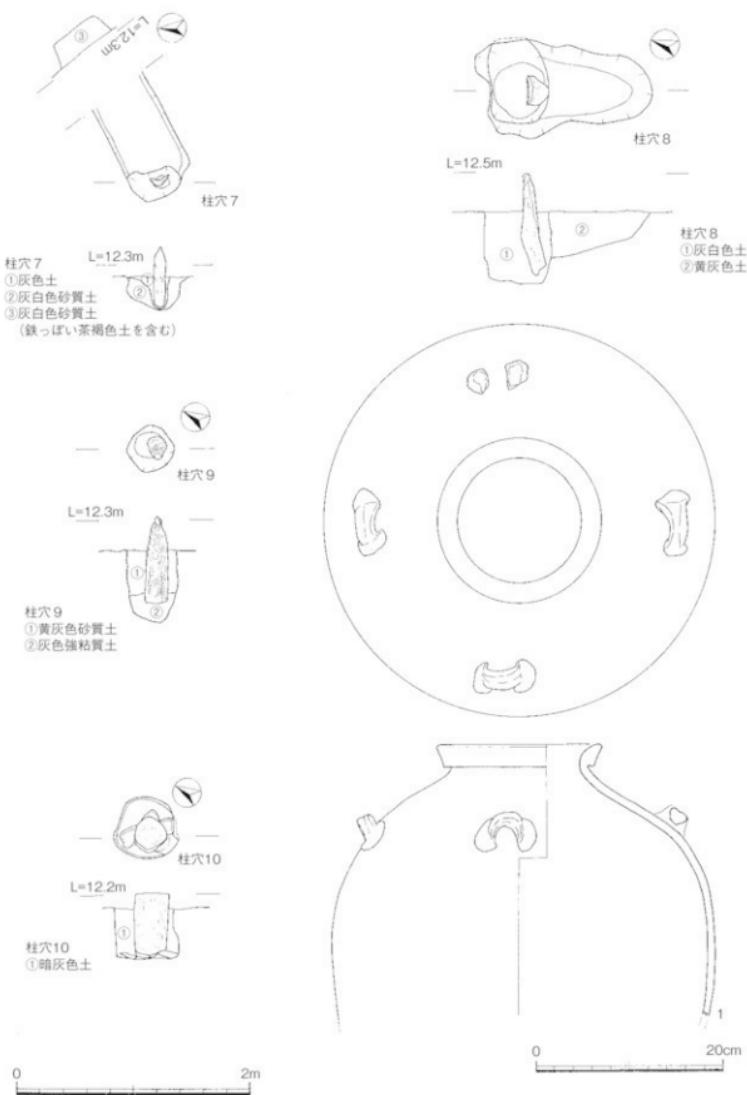
O・P-13区で検出された。完全な建物跡には復元できなかったが、柱穴が並んだ一部を掲載した。柱穴1は柱が残存しており、2個の根石で支えられていた。柱穴2については、検出時は近接する柱穴13・14と埋土も異なり分かれていたが、最終的に一つにつながり切り合い関係はつかめなかった。柱穴3は埋土から苗代川系薩摩焼の小片が検出された。柱穴4は、柱穴下位から平たい碟が敷き詰められるように検出された。柱が沈まないようにしかれた根石と考えられる。また上部からは、苗代川系の薩摩の壺が出土しており、口縁部から胴部までの半分の形状のものが、口縁部を下にして出土した。柱を固定するために利用したものか、または地鎮のためか、詳細は不明である。柱穴5は柱が残存していた。柱穴6には根石が2か所確認され、柱が2本建っていた。根石の回りは粘土が詰められている。柱穴7・8・9は柱が残存していた。柱穴10は下部に平たい石が敷き詰められ、やや太めの柱が建てられていた。



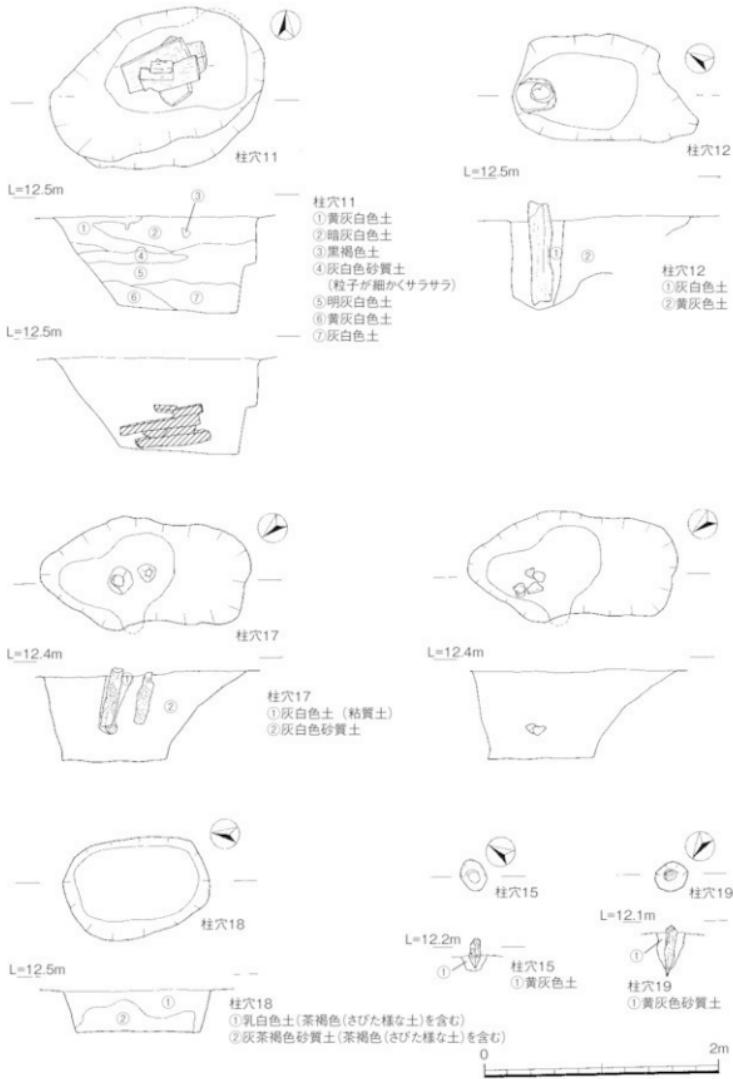
第190図 建物跡2



第191図 柱穴 1



第192図 柱穴2及び出土遺物



第193図 柱穴 3

建物跡 1 觀察表

柱穴番号	柱間(cm)	柱穴番号	柱間(cm)	柱穴番号	柱間(cm)
P35-P34	108.0	P34-P33	128.0	P33-P30	100.0
P35-P8	118.0	P8-P44	127.0	P44-P45	116.0
P30-P25	122.0	P25-P24	108.0	P24-P11	72.0
P23-P22	83.0	P22-P17	122.0	P17-P45	125.0

柱穴番号	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
P35	20.0	80.0	66.0	円
P34	14.0	104.0	98.0	円
P33	12.0	80.0	77.0	円
P30	40.0	96.0	90.0	円
P8	24.0	80.0	72.0	円
P44	24.0	86.0	71.0	円
P45	24.0	83.0	76.0	円
P25	41.0	65.0	62.0	円
P24	41.0	100.0	97.0	円
P11	35.0	74.0	(52.0)	横円
P17	8.0	68.0	54.0	横円
P22	12.0	80.0	76.0	円
P23	(24.0)	118.0	48.0	横円

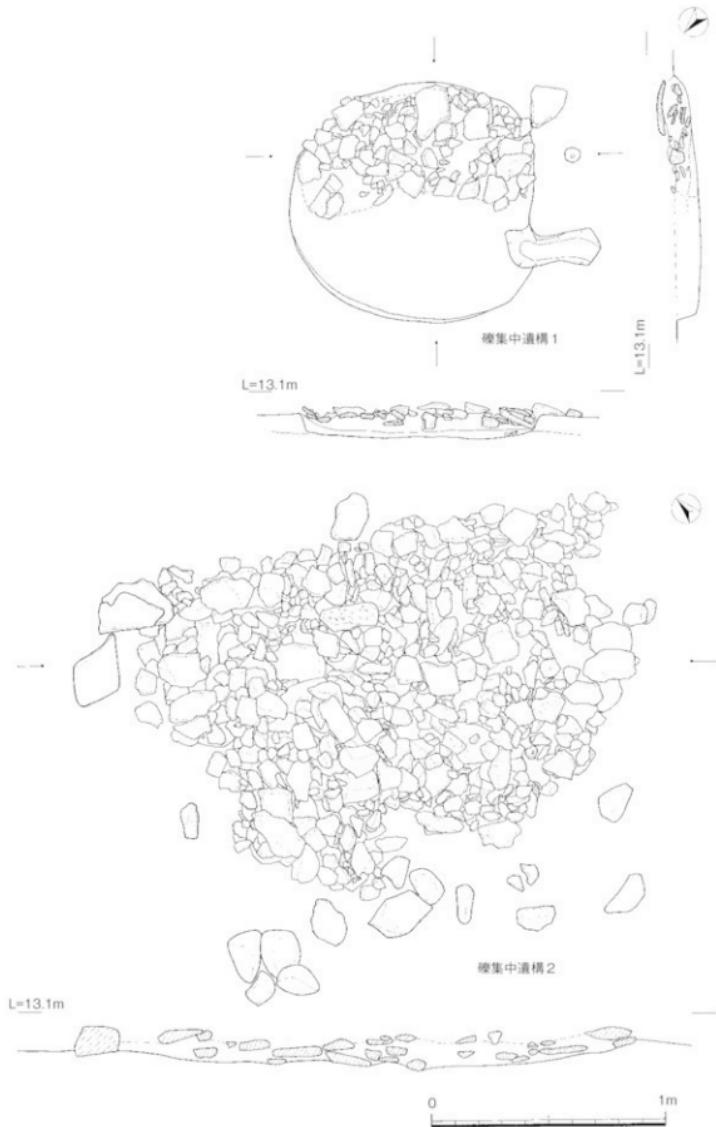
柱穴番号	柱間(cm)								
P52-P53	40.0	P53-P54	136.0	P54-P55	23.0	P55-P56	104.0	P56-P32	40.0
P51-P46	70.0	P46-P43	81.0	P43-P42	136.0	P42-P41	107.0	P41-P40	121.0
P39-P38	145.0	P26-P27	81.0	P27-P28	118.0	P28-P29	72.0		
P4-P3	57.0	P3-P2	150.0	P2-P1	122.0				

柱穴番号	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
P52	13.0	73.0	70.0	円
P53	18.0	58.0	54.0	円
P54	10.0	80.0	75.0	円
P55	44.0	76.0	64.0	円
P56	10.0	134.0	104.0	横円
P32	35.0	94.0	86.0	横円
P51	19.0	98.0	95.0	円
P46	17.0	60.0	50.0	横円
P43	10.0	92.0	76.0	横円
P42	6.0	69.0	57.0	横円
P41	(6.0)	90.0	76.0	横円
P40	5.1	82.0	65.0	横円
P39	23.0	63.0	62.0	円
P38	27.0	58.0	46.0	横円
P26	(5.0)	56.0	50.0	円
P27	10.0	70.0	64.0	円
P28	10.0	78.0	70.0	円
P29	10.0	74.0	20.0	横円
P4	20.0	85.0	66.0	横円
P3	23.0	60.0	55.0	円
P2	22.0	60.0	56.0	円
P1	20.0	63.0	53.0	円

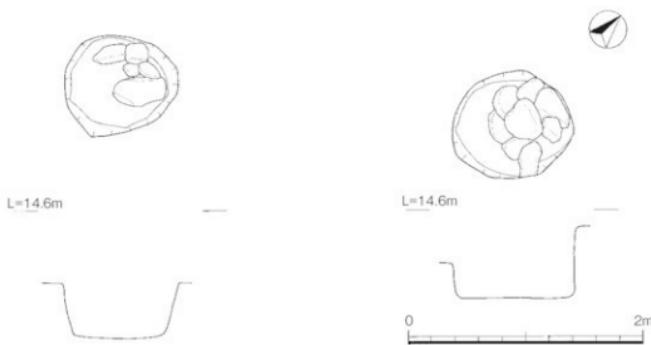
建物跡 2 觀察表

柱穴番号	柱間(cm)	柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
P1-P2	350.0	P1	(110.0)	100.0	横円
P2-P3	380.0	P2	125.0	45.0	横円
P3-P4	200.0	P3	109.0	70.0	横円
P4-P5	320.0	P4	129.0	70.0	横円
P5-P6	190.0	P5	115.0	80.0	横円
P6-P7	210.0	P6	150.0	—	横円
P7-P8	190.0	P7	(95.0)	50.0	横円
P5-P9	240.0	P8	145.0	90.0	横円
P9-P10	270.0	P9	40.0	40.0	円
		P10	95.0	55.0	横円

件名	規範番号	種別	分類	器種	復地	出土区	取り上げ番号	層位	法量(cm)	口径	直徑	器高	胎土の色	釉薬の色	施釉	時期	備考
第19回	1	陶器	壺	壺	自摩留代川系	G地点	—	4	17.4	—	—	唯赤褐色	鉄輪	残存部全面施釉	18世紀後半		



第194図 碓集中遺構 1・2



第195図 不明遺構

その他の柱穴（第191・193図）

柱穴11～柱穴19は建物跡2の周辺に検出された柱穴である。柱穴11は土坑内からは板状の木片が7枚積み重ねられた状態で出土した。木片は加工されたものや、今から加工しようとした線を引いたもの等が見られた。また、5枚目の木片と最下位の6・7枚目の木片の間には石が挟まっていた。柱穴12は柱が残存していた。柱穴13は柱が残存し、その柱を支えるように寝石が4個詰められていた。柱穴14は柱や寝石は検出されなかった。柱穴15はやや細い柱が残存していた。柱穴16は柱や寝石は検出されなかった。柱穴17は二本の柱が残存しており、斜めに刺さっていた。下部からは寝石が検出された。柱穴18は柱や寝石は検出されなかった。柱穴19はやや細い柱が残存していた。柱穴15と柱穴19の柱については、建物用の柱というより杭の可能性が考えられる。

礫溜まり（第194図）

N・O-15区で2基検出されたが、用途等の詳細は不明である。

礫溜まり1（第194図）

N・O-15区で検出された。礫溜まりの部分は長径100cm、短径50cmを計り、直径約100cm、深さ約10cmの浅い掘り込みの一方に片寄っている。石材は軟質凝灰岩で、扁平なものが多く見られる。風化のためか脆くなった石も見られる。遺物は出土しなかった。

礫溜まり2（第194図）

O-15区で検出された。長径約240cm、短径約150cmを計り、石材は周辺の石垣と同様の軟質凝灰岩である。礫とともに瓦や薩摩焼の小片も出土しているが、詳細な時期は判断できず、図化も不可能であった。

不明遺構（第195図）

N調査区、n-1で検出された。鶴嘴等で凝灰岩の地山を平らに整地し、凝灰岩を削り抜いてピットをつくる。ピット内には根石の様な石がはいっており、柱穴の可能性も考えられるが、ピットは2基のみで周辺に柱穴らしきものはなく、詳細が不明な遺構である。

(2) 遺物

郷土年寄屋敷跡からは大量の陶磁器が出土した。そのほとんどは肥前系陶磁器と在地の薩摩焼であるが、京焼や関西系、瀬戸・美濃系の陶磁器も多くはないが見られる。

陶磁器の分類については、まず磁器、陶器等の材質別に大分類し、さらに器種ごとに細分化を行った。紙面構成の都合上、産地や生産年代等については前後することがあるが、それらの詳細については観察表にまとめた。以下、特徴的な所見が見られる遺物についてのみ述べることとした。

磁器（第196～220図）

碗類（第196～201図）

1～22は丸碗である。薄手の丸碗から「くらわんか碗」と呼ばれる大量生産された厚手のものまで見られる。1は一重編み目文の描かれたやや深めのものである。4は外面にコンニャク印判で四方櫛文が押される。5は厚手で小振りのものである。11は見込みに幅広の蛇の目釉剥ぎが見られる。13は高台が低く、線書きによるタコ唐草文が描かれる。14は外面に花唐草が描かれる。嬉野地方の窯産の可能性が考えられる。17は波佐見焼で、外面腰部から高台内面にかけて露胎する。見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。18は見込みに手書き五弁花が描かれる。20は外面青磁釉の碗である。22は波佐見焼の碗で、丸文が描かれる。

23は朝顔形の碗で、白磁である。

24は望料形の碗である。見込みに虫文が見られる。

25・26は腰部が張るタイプの湯飲み碗である。見込みにはコンニャク印判五弁花が見られる。

27・28は小広東碗である。外面は梵字が簡略化された文様が描かれ、見込みには小さな虫文が描かれる。また、見込みの素地には削りの痕跡が観察される。28は在地系のものである可能性が高い。

29～38は広東碗である。29は肥前系のもので、高台が細く垂直に削り出される。31は見込みに「しらさぎ」の文様が描かれる。32・34・37は外面に山水文が描かれたものである。透明釉が青みがかっており、37のように呉須が滲んでいることから、在地系のものと思われる。36は小形のものである。

38は平形の碗である。呉須の発色が悪く、灰色がかっており、在地系のものと思われる。

39～53は端反碗である。透明釉が青みがかり、呉須の発色が悪いものが多く見られ、それらについては在地系の可能性が高い。42は波佐見焼である。見込みに「寿」の末字が描かれる。43は見込みに釜道具4足の足つきハマを使用した目跡が残る。44は見込みに窯道具3足の足つきハマを使用した目跡が残る。45は大振りの端反碗で、胎土は灰色を呈する。背面には鳳凰文が描かれ、見込みには滲んでいるがコンニャク印判が見られる。49は清朝磁器の影響を受けた文様が描かれるもので、呉須が滲み在地系のものと思われる。54は清朝磁器で、景德鎮窯系のものである。

55・56は統制食器である。「65」の数字が窓に入る。

57～65は筒形碗である。57は大振りのもので、外面に菊花散らし文が描かれる。58は見込みにコンニャク印判五弁花が見られる。59は外面が青磁釉のもので、見込みにコンニャク印判五弁花が観



第196図 磁器 1 碗類



18



19



20



21



22



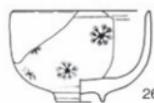
23



24



25

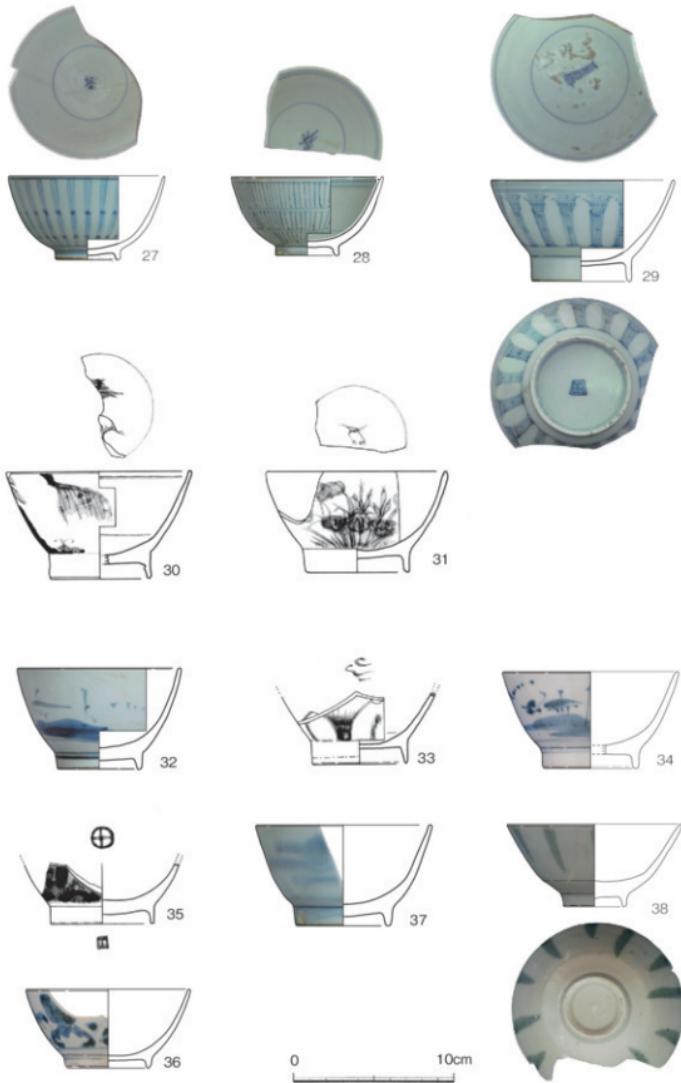


26



0 10cm

第197図 磁器2 碗類



第198図 磁器3 碗類



39



40



41



42



43



44



45



46



47



0 10cm

第199図 磁器4 碗類

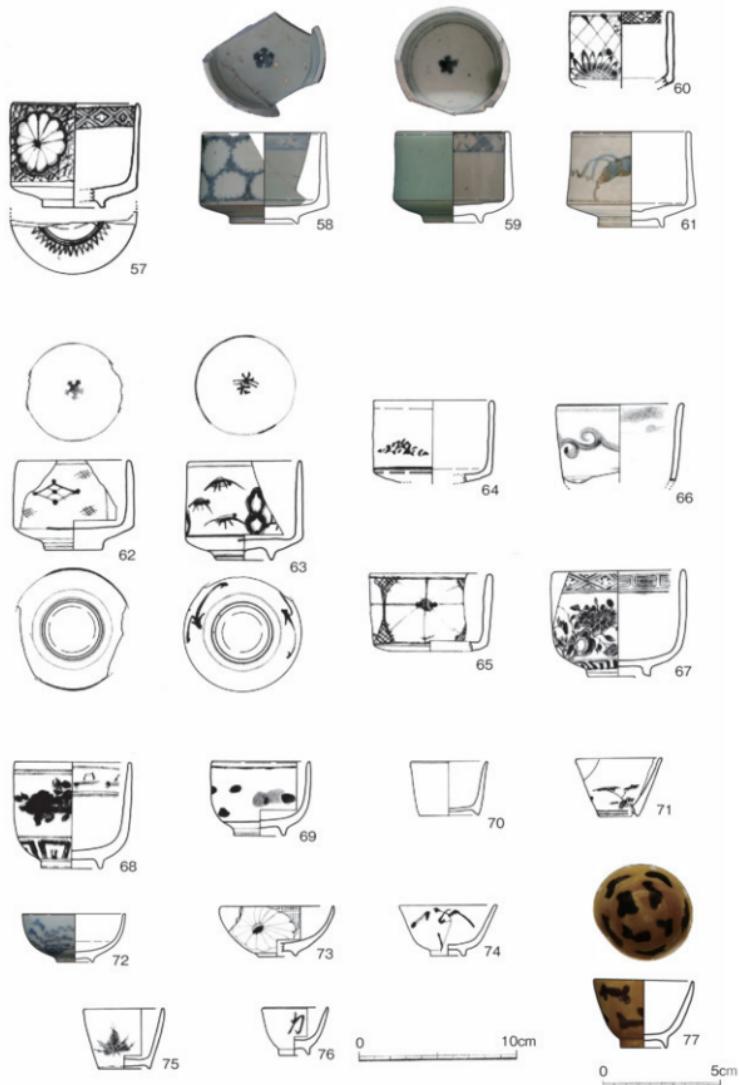
察される。60はやや小振りのものである。61は胎土が灰白色を呈する。62は見込みにコンニャク印判五弁花が見られる。63是在地系と思われるものである。外面は雪持筆文、内面は虫文が描かれる。64・65は呉須の発色が悪く灰色氣味である。

66～69は丸形の湯飲み碗である。66は腰部は欠損しているが、丸形になるものである。67・68はやや大振りのものである。69は小振りのもので、在地系のものと思われる。

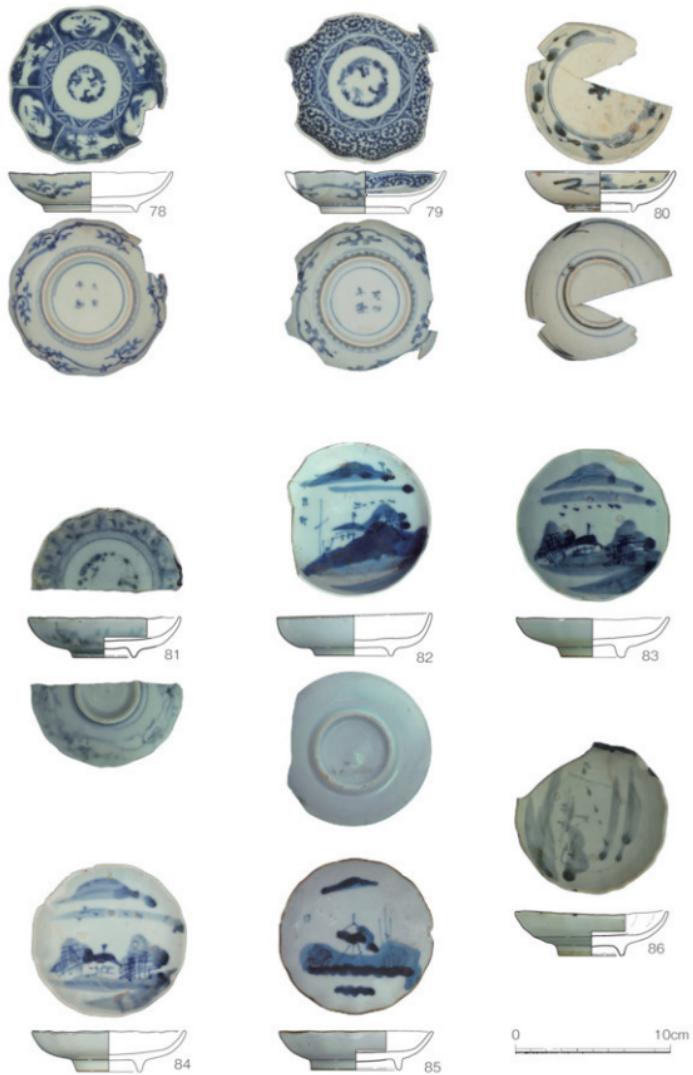
70～77は小杯である。70・71・75は、高台と胴部との境が明瞭でなく、一続きになるもので、先端は細く尖る。72・73は高台径が小さく、口径は大きいものである。74は外面に筆文が描かれるものである。76は「カ」の文字が描かれたもので、特注品と思われる。77は長崎県長与窯産または在地の平佐焼と思われる三彩の小杯である。



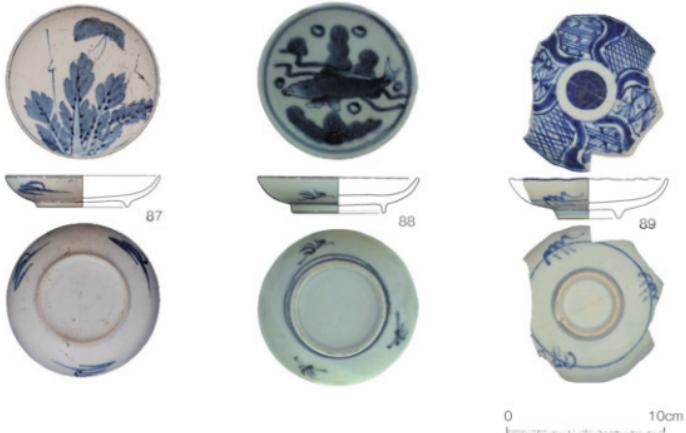
第200図 磁器5 碗類



第201図 磁器6 碗類



第202図 磁器7 血類



第203図 磁器8 盤類

皿類（第202～211図）

78～119は皿である。口径2～3寸のものを小皿、一般に五寸皿と呼ばれる口径5寸前後のものと、6寸～8寸前後のものを中皿、9寸以上のものを大皿とした。

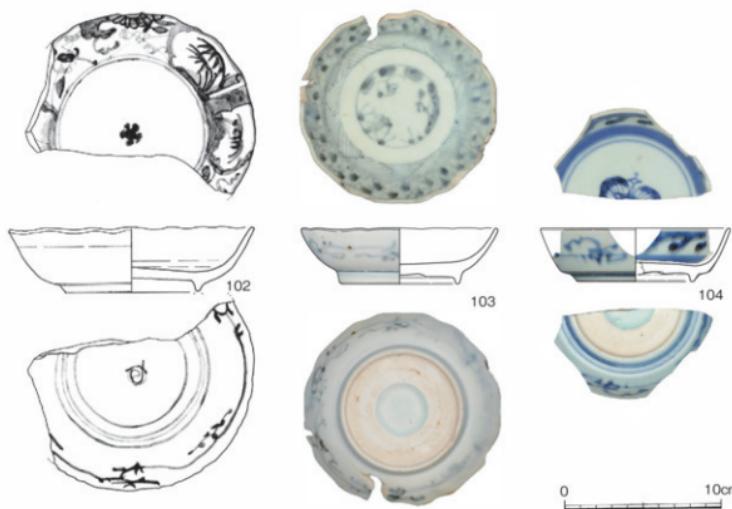
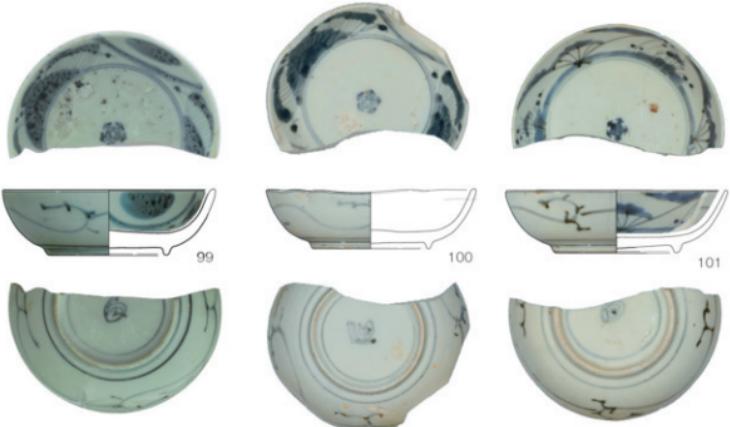
78～89は小皿に分類されるものである。78・79は稜花皿である。78は裏銘に「大明年製」、79は「成化年製」が見られる。81～86は在地系の皿である。81は稜花皿で、青みがかった透明釉に呉須が添んでいる。82～86は見込みに山水文が描かれており、82を除き稜花皿である。85は口唇部が口紅となる。86は灯明皿として使用されたのか、口縁部の一部に煤が付着する。87は焼成不良のため透明釉が熔けず、表面が白濁している。88・89は銅板転写のコバルトを使用した近代以降のものである。

90～107は中皿である。90～95は深さの浅いものである。90は「大明年製」の裏銘が入る。91は見込みに手書き五弁花が見られる。92は墨書きで文様が描かれる。93が在地系のもので、見込みには幅広い蛇の目釉剥ぎが施され、アルミナが塗布される。高台は太く、端部は平らに削り出される。94は波佐見焼である。見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。96～107は深さの深いものである。96は裏銘に「渦福」が見られる。98は裏銘に「年製」の二文字が観察されるが、欠損のためそれ以前は不明である。また、ハリ支えの痕跡も残る。99～102は見込みにコンニャク印判の五弁花が押され、裏銘に「渦福」が入るものである。99は波佐見焼である。103～107は蛇の目凹型高台のものである。103は在地系のものである。105は白化粧土をかけた後、呉須で文様を描いており、志田焼と思われる。

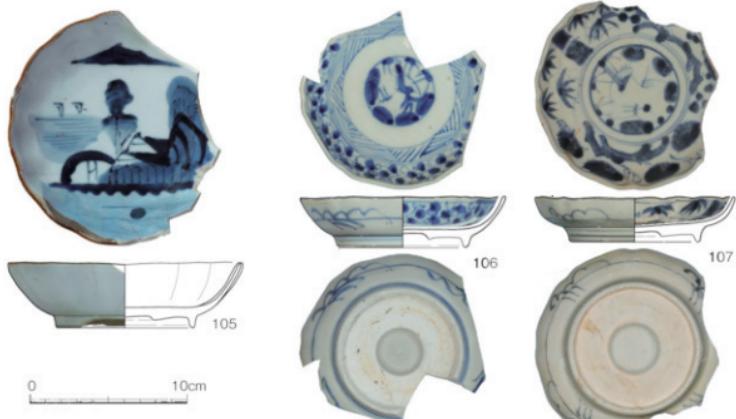
108～117は大皿に分類されるものである。108は波佐見焼である。高台内底にハリ支えの目跡が残る。109は高台内底に3か所以上のハリ支えの目跡が見られる。114は志田焼と思われるもので、高台内底にハリ支えの目跡が観察できる。また、文字を略した裏銘が書かれる。115は波佐見焼で



第204図 磁器9 血類



第205図 磁器10 血類



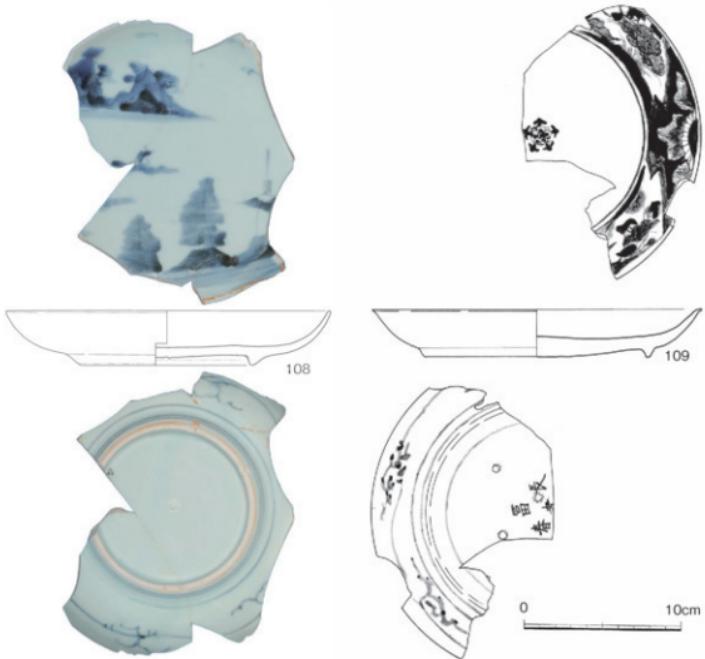
第206図 磁器11皿類

ある。見込みに手書き五弁花、裏銘に「満福」が見られる。116・117は口縁部が折れ縁になるものである。どちらも高台は蛇の目凹型高台で、アルミナが塗布されている。

118・119はその他の器形を呈する皿である。118は外面青磁釉のものである。119は角皿で、やや青みがかかった透明釉がかかる。高台内底にはアルミナが付着している。

磁器観察表1

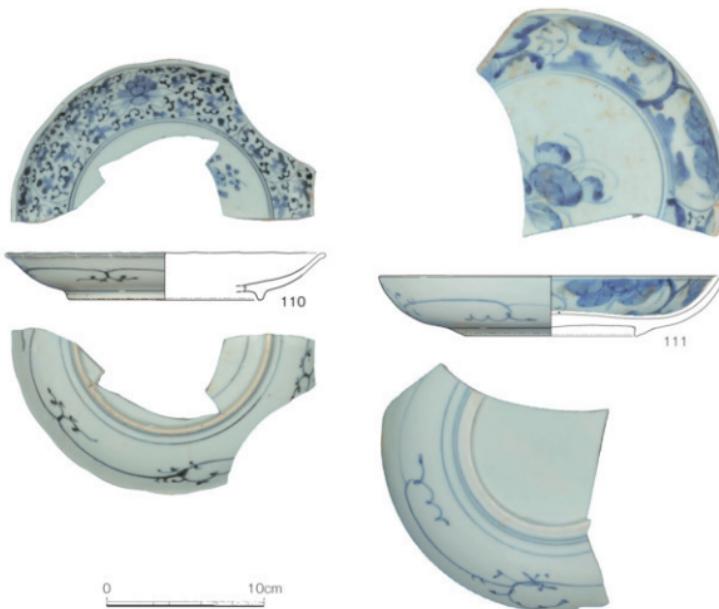
検証番号	規範番号	種別	分類	器種	度地	出土区	法面 (cm)	施土の種類	被覆の種類	色調	施釉部位	時期	備考
1	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.1	4.5	7.4	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	1650~60年代	一葉纏み波文
2	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.8	4.2	5.5	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	梅文花
3	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.6	3.9	5.9	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	露の輪梅波文
4	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.3	4.1	5.5	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	コンニャク印刷
5	染付	碗	丸底	肥前	G地底	9.6	3.9	5.1	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	露の輪梅波文
6	染付	碗	丸底	肥前系	G地底	10.8	4.7	5.1	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	花文
7	染付	碗	丸底	肥前	G地底	11.4	4.8	5.9	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	17世紀後4四半期~18世紀中	見込みに蛇の目高台剥落
8	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.0	2.4	5.2	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後2~3四半期	花文
9	染付	碗	丸底	肥前系	G地底	9.7	4.0	5.1	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	二葉纏み波文
10	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.2	—	—	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	花文
11	染付	碗	丸底	肥前系	G地底	13.4	4.6	4.5	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後4四半期	見込みに蛇の目高台剥落
12	染付	碗	丸底	肥前系	G地底	11.2	—	—	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	花文
13	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.0	—	4.7	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	網唐草文
14	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.0	4.6	5.6	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	花文
15	染付	碗	丸底	肥前	G地底	12.0	4.6	4.8	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	見込みに蛇の目高台剥落 アルミニナオキナ
16	染付	碗	丸底	肥前系	G地底	11.4	4.4	6.1	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後2~3四半期	花文
17	染付	碗	丸底	肥前	(波足)	G地底	—	2.6	—	波白色	外面部部~高台内底 は無釉	17世紀後半	見込みに蛇の目高台剥落
18	染付	碗	丸底	肥前	G地底	10.9	4.6	5.6	波白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後4四半期	見込みに蛇の目高台 波白文
19	染付	碗	丸底	肥前	G地底	13.0	5.3	6.7	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後2~3四半期	花文?
20	染付	碗	丸底	肥前	G地底	11.2	4.4	6.5	白色	(波)高脚輪	蓋付口縁剥落	18世紀後半	手書き五弁花 波白文
21	染付	碗	丸底	肥前	G地底	11.6	4.4	5.8	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀中~後半	コンニャク印刷五弁花
22	染付	碗	丸底	肥前 (波足)	G地底	12.4	4.6	5.6	白色	透明釉	蓋付口縁剥落	18世紀後半	花文 コンニャク印刷五弁花 見込みに蛇の目高台剥落



第207図 磁器12 盆類

磁器観察表2

検証 番号	機種	種別	分類	器種	產地	出土区	重量(g)	胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備考	
第 107 回	23	白磁	碗	刷毛目	G地底	11.2	4.0	6.0	白色	透明釉	晩付は輪削き	18世紀前半	
	24	染付	碗	五徳(1.5)	G地底	11.3	4.5	6.0	白色	透明釉	晩付は輪削き	1770~90年代	
	25	染付	碗	茶點小瓶	肥前系	G地底	8.7	3.5	5.6	白色	透明釉	晩付は輪削き	1770~90年代
	26	染付	碗	茶點小瓶	肥前	G地底	3.1	5.8	白色	透明釉	晩付は輪削き	1770~90年代	
第 108 回	27	染付	碗	小広葉緋	肥前系	G地底	9.8	3.8	5.4	白色	透明釉	晩付は輪削き	1770~1810年代
	28	染付	碗	小広葉緋	肥前系	G地底	9.5	3.9	5.1	白色	透明釉	晩付は輪削き	1770~1810年代
	29	染付	碗	広葉緋	肥前系	G地底	11.3	6.1	6.4	白色	透明釉	晩付は輪削き	1770~1810年代
	30	染付	碗	広葉緋	肥前系	G地底	11.6	6.2	6.8	白色	透明釉	晩付は輪削き	19世紀前半
第 109 回	31	染付	碗	広葉緋	(有田)	G地底	11.4	—	6.4	白色	透明釉	晩付は輪削き	1780~1810年代
	32	染付	碗	広葉緋	肥前系	G地底	10.2	5.0	6.4	白色	透明釉	晩付は輪削き	18世紀後半~19世紀前半
	33	染付	碗	広葉緋	肥前系	G地底	10.0	5.0	6.4	白色	透明釉	晩付は輪削き	1780~19世紀前半
	34	染付	碗	広葉緋	肥前系	G地底	11.0	6.2	6.2	白色	透明釉	晩付は輪削き	1780~19世紀前半
第 110 回	35	染付	碗	広葉緋	在来系	G地底	6.6	—	白色	透明釉	晩付は輪削き	1780~19世紀前半	
	36	染付	碗	広葉緋	肥前系	G地底	10.2	5.0	5.0	白色	透明釉	晩付は輪削き	1780~19世紀初頭
	37	染付	碗	小広葉緋	在来系	G地底	11.0	5.7	6.4	白色	透明釉	晩付は輪削き	1780~嘉慶
	38	染付	碗	在来系	G地底	11.0	4.3	5.3	白色	透明釉	晩付は輪削き	嘉慶	
第 111 回	39	染付	碗	刷毛目	G地底	10.0	3.8	6.0	白色	透明釉	晩付は輪削き	18世紀後半~19世紀前半	
	40	染付	碗	刷毛目	肥前系	G地底	10.0	4.1	6.0	白色	透明釉	晩付は輪削き	1820~60年代
	41	染付	碗	刷毛目	(波佐見)	G地底	11.0	3.8	5.5	白色	透明釉	晩付は輪削き	1820~61年代
	42	染付	碗	刷毛目	肥前系	G地底	10.1	3.7	5.9	白色	透明釉	晩付は輪削き	1820~62年代
第 112 回	43	染付	碗	刷毛目	肥前系	G地底	10.0	3.7	6.2	白色	透明釉	晩付は輪削き	1820~63年代
											見込み無		
											見込み有り	波佐見	
											見込み有り	四ヶ所	



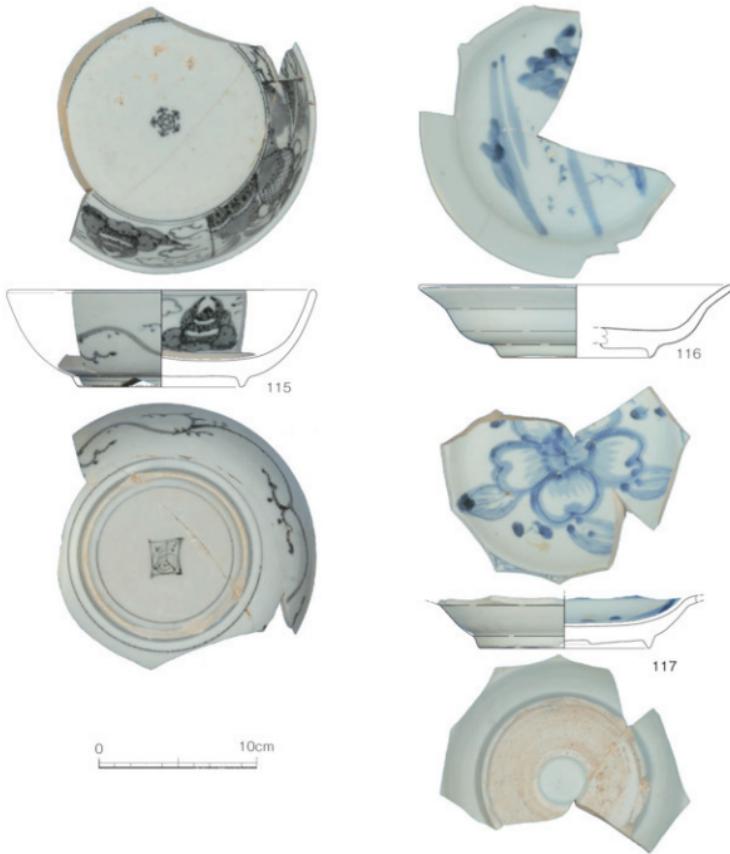
第208図 磁器13 血類

磁器觀察表3

器 番 号	規 格 番 号	種 別	分 類	器種	產 地	出土 所	法 量 (cm)			胎 子の 色 調	施 華の 模様 色 調	施 華部位	時 期	備 考
							口 徑	底 径	高 さ					
第 199 回	44	染 付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	10.1	3.9	5.8	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	見込みに足つきハマの目跡 有り 三所
	45	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	15.3	7.6	5.1	灰色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半	見込みにコニャック印刷風
	46	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	10.0	3.8	6.0	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	見込みに青花の目跡 有り 三所
	47	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	10.6	3.6	5.8	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	見込みに青花の目跡 有り 三所
第 200 回	48	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	10.0	3.7	5.8	白色	透明釉	晩付山輪削り	19世紀	見込みに青花の目跡 有り 三所
	49	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	8.4	3.4	4.7	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	山本文
	50	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	9.4	3.7	6.3	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	中西文
	51	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	8.0	3.2	4.9	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	見込みに青花の目跡 有り 三所
	52	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	10.0	4.6	6.0	白色	透明釉	晩付山輪削り	19世紀後半	見込みに青花の目跡 有り 三所
	53	染付	絵	絵 型 碗	在地系	G地底	10.0	4.1	4.9	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半	山本文
	54	染付	絵	絵 型 碗	中國通	G地底	9.6	3.7	5.1	白色	透明釉	晩付山輪削り	18世紀後半～19世紀初半	中西文
	55	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	—	—	—	白色	透明釉	晩付山輪削り	近代	陶製食器
	56	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	—	—	—	白色	透明釉	晩付山輪削り	近代	陶製食器
	57	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	8.2	4.0	6.6	白色	透明釉	晩付山輪削り	1760～80年代	中西文
第 201 回	58	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.7	4.2	5.8	白色	透明釉	晩付山輪削り	1770～90年代	コンニャック印刷五瓣花 目跡あり 見込み文
	59	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.0	3.6	5.8	白色	(美) 青花繪	晩付山輪削り	1760～80年代	コンニャック印刷五瓣花 目跡あり 見込み文
	60	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	6.4	—	—	白色	透明釉	晩付山輪削り	1770～90年代	橘子に花文
	61	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.2	4.1	6.1	灰色	透明釉	晩付山輪削り	1780～19世紀初頭	橘子に花文
	62	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.0	3.6	5.7	灰色	透明釉	晩付山輪削り	1780～1810年代	コンニャック印刷五瓣花 目跡あり 見込み文
	63	染付	絵	絵 型 碗	在地系か?	G地底	7.2	3.6	6.3	灰色	透明釉	晩付山輪削り	1780～19世紀初頭	中西文
	64	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.6	—	—	白色	透明釉	晩付山輪削り	1780～19世紀初頭	中西文
	65	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.8	—	—	白色	透明釉	晩付山輪削り	1780～19世紀初頭	中西文
	66	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	8.0	4.0	6.7	白色	透明釉	晩付山輪削り	1820～40年代	中西文
	67	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.8	3.6	6.7	白色	透明釉	晩付山輪削り	1820～40年代	中西文
	68	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	7.2	3.6	6.7	白色	透明釉	晩付山輪削り	1820～40年代	中西文
	69	染付	絵	絵 型 碗	肥前系	G地底	6.2	3.2	4.7	白色	透明釉	晩付山輪削り	19世紀前半～中葉	中西文

第209圖 磁器14 皿類





第210図 磁器15 血類

磁器観察表4

項目	被認 査番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)	出土の 位置	施釉部位	時期	備考		
第201 回	70	染付	絵	小鉢	肥前	G地底	5.0	3.6	3.4	白色	透明釉	寛村山輪削片	16世紀後半～19世
	71	染付	絵	小鉢	肥前	G地底	6.4	2.4	3.7	白色	透明釉	寛村山輪削片	17世紀後半
	72	染付	絵	小鉢	肥前系	G地底	6.5	4.2	3.1	白色	透明釉	寛村山輪削片	19世紀後半～一葉
	73	染付	絵	小鉢	肥前系	G地底	7.2	2.4	3.2	白色	透明釉	寛村山輪削片	17世紀後半～19世紀初頭
	74	染付	絵	小鉢	各地系か?	G地底	5.8	2.2	3.2	白色	透明釉	寛村山輪削片	19世紀後半～一葉
	75	染付	絵	小鉢	肥前系	G地底	5.0	3.2	3.8	白色	透明釉	寛村山輪削片	18世紀後半～19世紀後半
	76	染付	絵	小鉢	肥前系か?	G地底	4.2	1.9	3.1	白色	透明釉	寛村山輪削片	19世紀
	77	染付	絵	小鉢	肥前系か?	G地底	4.2	1.9	2.9	白色	透明釉	寛村山輪削片	19世紀
第202 回	78	染付	皿	小皿	肥前 (有田)	G地底	10.4	5.6	2.7	白色	透明釉	寛村山輪削片	1760～80年代
	79	染付	皿	小皿	肥前 (有田)	G地底	10.2	5.6	2.8	白色	透明釉	寛村山輪削片	1760～80年代
	80	染付	皿	小皿	肥前	G地底	9.6	4.2	2.7	白色	透明釉	寛村山輪削片	18世紀後半
	81	染付	皿	小皿	肥前系	G地底	9.8	3.9	2.7	白色	透明釉	寛村山輪削片	18世紀後半

磁器觀察表5

施設 番号	開拓 番号	種別	分類	西暦	產地	出土区	法量 (cm)			施土の 色 調	施葉の種類 色 調	施種仕 事	時期	備考
							口徑	直徑	高さ					
第 202 回	82	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.9	5.0	2.7	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀前葉～中葉	山本文
	83	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.7	3.7	2.7	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀前葉～中葉	山本文 模写品
	84	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.9	4.0	2.7	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀前葉～中葉	山本文 模写品
	85	染付	皿	小皿	肥前系 (志田)	G地点	9.8	5.6	2.5	白色	透明釉	豪付口輪剥き	1820～60年代	山本文 模写品 口輪削に紅
	86	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.8	3.8	3.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	1820～60年代	山本文 模写品 足つきハマの目録三ヶ所あり
	87	染付	皿	小皿	肥前	G地点	10.0	5.7	2.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀	白と野草
第 203 回	88	染付	皿	小皿	肥前系	G地点	10.2	5.6	2.3	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀	魚文
	89	染付	皿	小皿	肥前	G地点	10.0	4.0	2.6	白色	透明釉	豪付口輪剥き	近代以前	
	90	染付	皿	中皿	肥前	G地点	12.4	7.2	3.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀前半	コニック印伝五五花 文花
第 204 回	91	染付	皿	中皿	肥前	G地点	13.0	8.0	3.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	1690～18世紀第1四半葉	手書き五五花 文の輸入
	92	染付	皿	中皿	肥前有田	G地点	13.0	8.2	2.8	白色	透明釉	豪付口輪剥き	17世紀末～18世紀初頭	墨書き
	93	染付	皿	中皿	在地系	G地点	11.2	4.4	3.7	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀前半	見込みに白の目録剥き アリ
	94	染付	皿	中皿	肥前波佐吳	G地点	14.1	7.2	3.0	灰白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	手書き五五花 文見込みに白の目録剥き 花葉文
	95	染付	皿	中皿	肥前系	G地点	14.4	8.0	3.0	灰白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	見込みに白の目録剥き
	96	染付	皿	中皿	肥前	G地点	13.4	7.6	4.1	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀前半	變光文 裏絵(油墨)
第 205 回	97	染付	皿	中皿	肥前有田	G地点	13.8	9.0	4.1	白色	透明釉	豪付口輪剥き	1740～70年代	櫻花紋
	98	染付	皿	中皿	肥前	G地点	14.3	8.0	3.8	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半～19世紀	手書き五五花 文花葉文
	99	染付	皿	中皿	肥前波佐吳	G地点	13.4	7.4	4.2	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀中葉～後葉	手書き五五花 文(油墨)
	100	染付	皿	中皿	肥前波佐吳	G地点	13.2	7.4	3.8	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀中葉～後葉	手書き五五花 文(油墨)
	101	染付	皿	中皿	肥前波佐吳	G地点	12.0	7.6	4.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀中葉～後葉	コニック印伝五五花 文裏絵(油墨)
	102	染付	皿	中皿	肥前波佐吳	G地点	15.5	8.4	4.1	灰白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀前半～中葉	コニック印伝 肥前 模写品 裏絵(油墨)
第 206 回	103	染付	皿	中皿	在地系	G地点	12.4	7.3	3.6	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半～19世紀初頭	在庫文 模写品 模写品(型花台)
	104	染付	皿	中皿	肥前系	G地点	12.0	7.2	3.4	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半～19世紀初頭	模写品(型花台)
	105	染付	皿	中皿	肥前 (志田燒)	G地点	15.0	8.5	4.2	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀前葉～中葉	手書き五五花 文(油墨)
	106	染付	皿	中皿	在地系	G地点	13.0	8.0	3.3	白色	透明釉	豪付口輪剥き	近代以前	模写品 模写品(型花台)
	107	染付	皿	中皿	肥前系	G地点	12.6	8.0	2.9	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀	模写品(型花台)
	108	染付	皿	大皿	肥前	G地点	20.8	11.0	3.5	灰白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	高台内にリバヌスあり 山本文
第 208 回	109	染付	皿	大皿	肥前	M	21.0	14.4	3.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀第2～第3四半期	手書き五五花 文高台内にリバヌスあり
	110	染付	皿	大皿	肥前	G地点	20.2	12.2	3.1	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	在庫文
第 209 回	111	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	21.8	10.9	3.9	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	18世紀後半
	112	染付	皿	大皿	肥前	G地点	23.2	14.0	4.2	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	18世紀後半
	113	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	23.5	14.6	4.1	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀末～19世紀前半	模写品 花文
第 210 回	114	染付	皿	大皿	肥前有田	G地点	24.3	14.6	3.4	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀～19世紀前半	高台内にリバヌスあり 手書き五五花文
	115	染付	皿	大皿	肥前波佐吳	G地点	19.4	10.4	6.2	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀第2～第3四半期	手書き五五花 文(油墨)
	116	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	20.2	9.3	4.7	白色	透明釉	豪付口輪剥き	19世紀	山本文 模写品(型花台)
	117	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	—	10.8	3.4	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半～19世紀前半	花文 模写品(型花台)
	118	染付	皿	大皿	肥前	G地点	14.8	—	—	白色	(内)透明釉 露胎釉	豪付口輪剥き	1750～80年代	
	119	染付	皿	角皿	肥前系	G地点	—	—	3.4	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀末～19世紀前半	花邊文に葉か？ アルミドリ葉
第 211 回	120	染付	皿	碟	肥前有田	G地点	8.5	6.2	6.7	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀後半	模写品(型花台)
	121	染付	皿	碟	肥前系	G地点	7.1	5.0	6.0	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀末～19世紀前半	花文 模写品(型花台)
	122	染付	皿	碟	肥前	G地点	7.6	4.5	5.9	白色	透明釉	豪付口輪剥き	18世紀前葉～中葉	花文

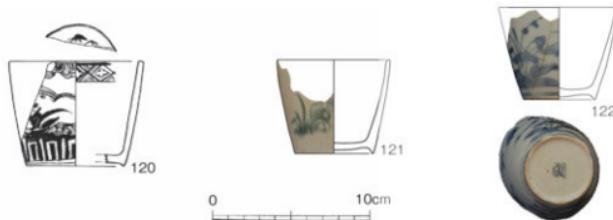


鉢類（第211～213図）

鉢は小形のものから大形のものまで見られる。そば猪口は鉢として分類した。

120～122はそば猪口である。120は蛇の目門型高台になるものである。122は裏銘に「渕福」が入る。

123はやや青みがかった透明釉に、呉須が滲んでいる。124は波佐見焼である。125は見込みに荒磯文が描かれる。126は口縁部が折れ縁になるものである。127は見込みに手書きのコンニャク印判、裏銘に「渕福」が見られる。129は青みがかった透明釉に呉須が滲む。131は白渕した透明釉に、貫



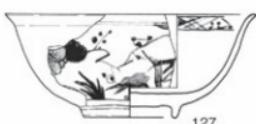
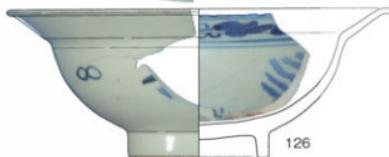
第211図 磁器16 盆・鉢類

磁器観察表6

検出番号	年代	種別	分類	起源	产地	出土区	口径	底径	高さ	壁厚	釉色	地質	施釉部位	時間	備考
第212 図	123	宋村	鉢	各地系か?	G地底	10.6	4.8	5.9	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	19世紀後葉～一葉	康雍乾文
	124	宋村	鉢	肥前波佐見	G地底	—	—	5.2	薄白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	18世紀後半	龍の輪文
	125	宋村	鉢	肥前系	G地底	13.7	5.8	8.0	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	18世紀後半	荒磯文
	126	宋村	鉢	肥前系	G地底	24.6	8.6	9.6	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	19世紀後葉～一葉	蟹文
第213 図	127	宋村	鉢	肥前系	G地底	19.0	6.5	6.6	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	19世紀後葉～一葉	手書きコンニャク
	128	宋村	鉢	肥前系	G地底	19.2	6.5	6.6	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	19世紀後葉～19世紀初半	手書きコンニャク
	129	宋村	鉢	肥前系	G地底	15.1	7.4	6.4	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	幕末	山本文
	130	宋村	鉢	肥前系	G地底	16.1	—	—	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	19世紀後半	八角鉢
第214 図	131	宋村	鉢	肥前系	G地底	14.4	8.4	4.4	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	19世紀後半	山本文
	132	宋村	鉢	肥前系	G地底	17.2	6.5	6.8	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	1780～1820年代	肥の目型高台
	133	宋村	鉢	肥前系	G地底	13.0	—	—	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	1780～1820年代	山本文
	134	宋村	鉢	肥前有田	G地底	13.0	8.2	5.5	白色	呉須	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	1840～60年代（蓬莱）	山本文
	135	宋村	鉢	肥前系	G地底	16.9	11.6	6.9	白色	透明釉	青白釉	青白釉	青付山梅剥き	近代以前	一葉高台



図
125

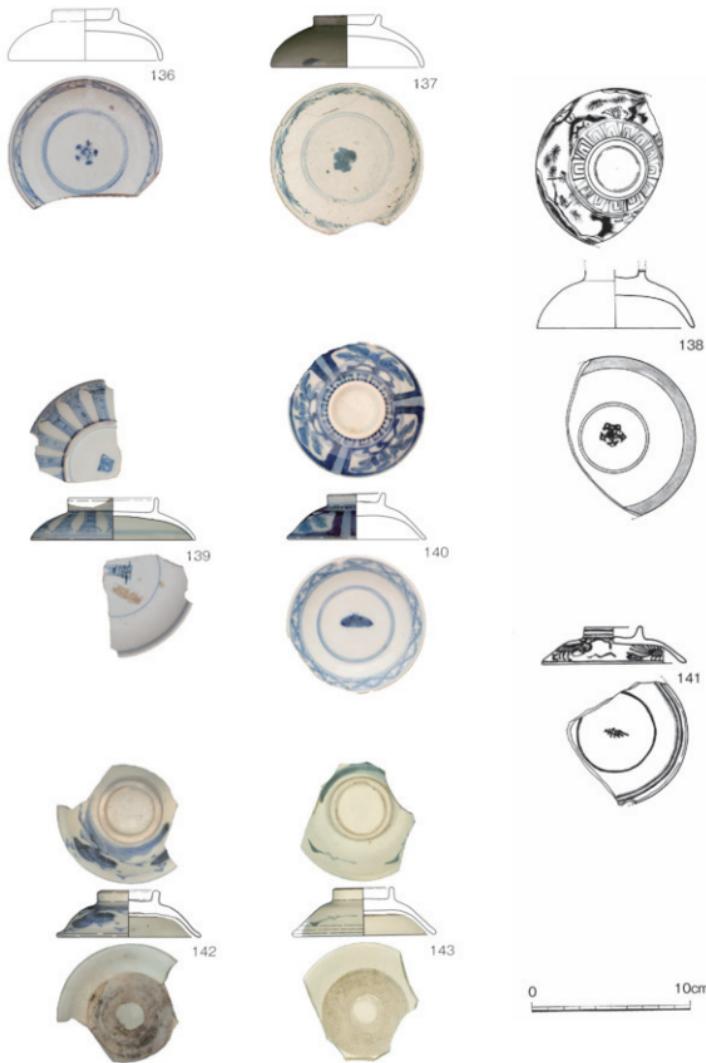


0 10cm

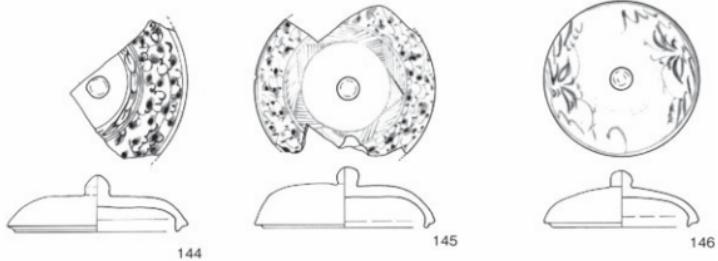
第212図 磁器17 鉢類



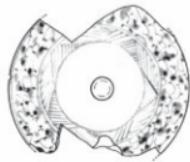
第213図 磁器18 鉢類



第214図 磁器19 蓋類



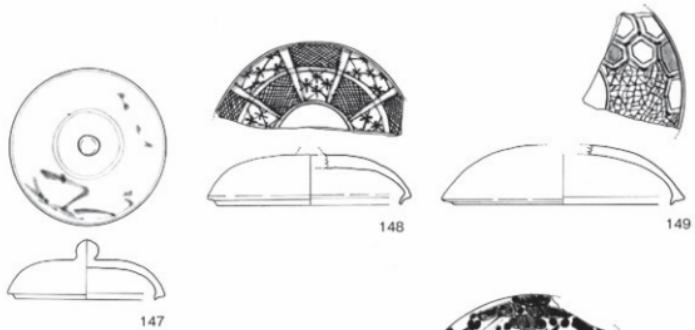
144



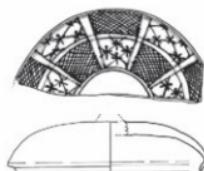
145



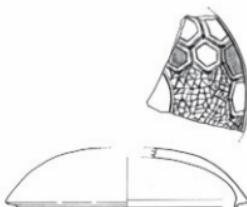
146



147



148



149



150



151

0 10cm

第215図 磁器20 蓋類

入が入る。132は八角の鉢である。釉は青みがあり、在地系のものと思われる。134は厚手のもので、口唇部まで文様が描かれる。高台は短く幅広である。135は高台が二重高台を呈するもので、近代以降のものである。

蓋類（第214・215図）

碗蓋、蓋物の蓋等をまとめて掲載した。

136～143は碗蓋である。136～138は丸碗の蓋である。136・137はつまみ内部には「渦福」が観察できる。外面は青磁釉である。見込みに滲んでいるが、コンニャク印判の五弁花が押される。139は広東碗の蓋である。140～143は端反碗の蓋である。142・143は見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。144～151は蓋物の蓋である。144～147は丸形のつまみが付く。148・149は欠損しているが、つまみがつくものと思われる。150・151はアーチ状のつまみがつくものである。151は近代以降のものである。

色絵（第216・217図）

数量的には多くはないが、様様な器種で色絵が見られる。

152は中国福建省付近で生産されたと思われる小壺である。黄緑と朱色の2色で文様が描かれる。153は小壺である。見込みの蛇の目釉剥ぎを隠すために、青色の顔料が塗られる。154は小碗である。155は湯飲み碗である。在地系の色絵と思われる。156は瀬戸・美濃産の小碗である。朱色の他、青、黄緑、黄色の顔料で文様が描かれる。157は小碗であるが、近代以降のものである。158は肥前針田の金欄手で、鉢である。外面は赤玉と瓔珞文が描かれる。高級品である。159は蓋物の蓋である。朱色と黄緑で文様が描かれる。160は高台が幅広の小碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎが施されることはある。161は八角の鉢である。朱色の顔料で文様が描かれる。見込みの蛇の目釉剥ぎは黒く塗られ、黄緑のしみも見られる。162は近代以降の皿である。163は皿である。朱と黄緑で文様が描かれる。蛇の目釉剥ぎの部分にも文様が描かれる。164は幕末の有田焼で、金魚が描かれる。165・166は段重である。165は少なくとも3段はあったものと思われる。167は油壺である。頸部下位に朱色の線が幅広に描かれる。168は蓋物の蓋と身である。169は御神酒瓶である。底面に墨書が観察される。170は近代以降の仏花瓶である。171～174は仏供器である。172は瀬戸・美濃産である。脚部が充実せず、バチ状である。173は菊の花びらの文様が描かれる。174は近代以降の瀬戸・美濃焼である。

水注類（第218図）

土瓶・酒器等の液体を入れて注ぐものを水注として分類した。

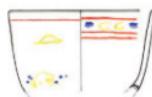
175・176は土瓶である。在地系のものと思われる。175は茶止め穴が2穴で、176は3穴である。177・178は酒器である。底部は平底で、無釉である。アーチ状の磁器製の取っ手がつく。在地系のものである。179は薩摩で一般的に「からから」と呼ばれる酒器である。在地系のものである。180は近代以降の酒器である。透明釉はやや黄色みを帯びる。文様は型押しで、青色の顔料で着色される。三河内焼の可能性も考えられる。



152



154



155



156



157



158



159



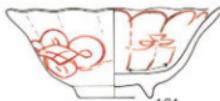
161



162



163



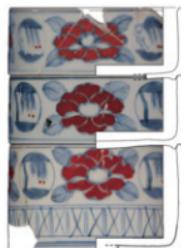
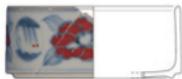
164



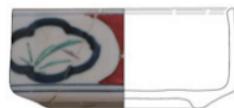
0

10cm

第216図 磁器21 色絵



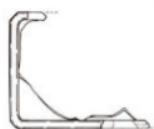
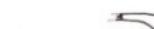
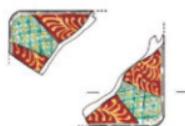
165



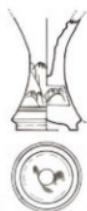
166



167



168



169



170



171



172



173



174



第217図 磁器22 色絵

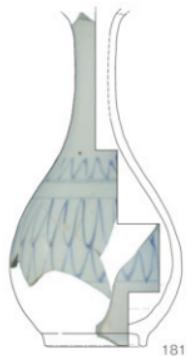


0 10cm

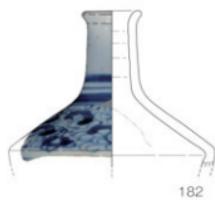
第218図 磁器23 水注類

瓶類（第219図）

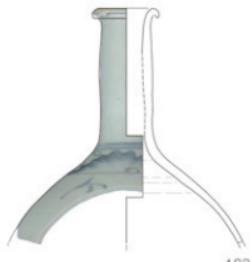
181は一重編目文の瓶である。182は瓶としたが、欠損している部分に注口部がつく可能性も考えられる。184は近代以降のものである。185～187は油壺である。



181



182



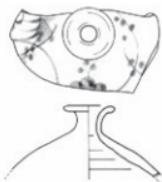
183



184



185



186



187



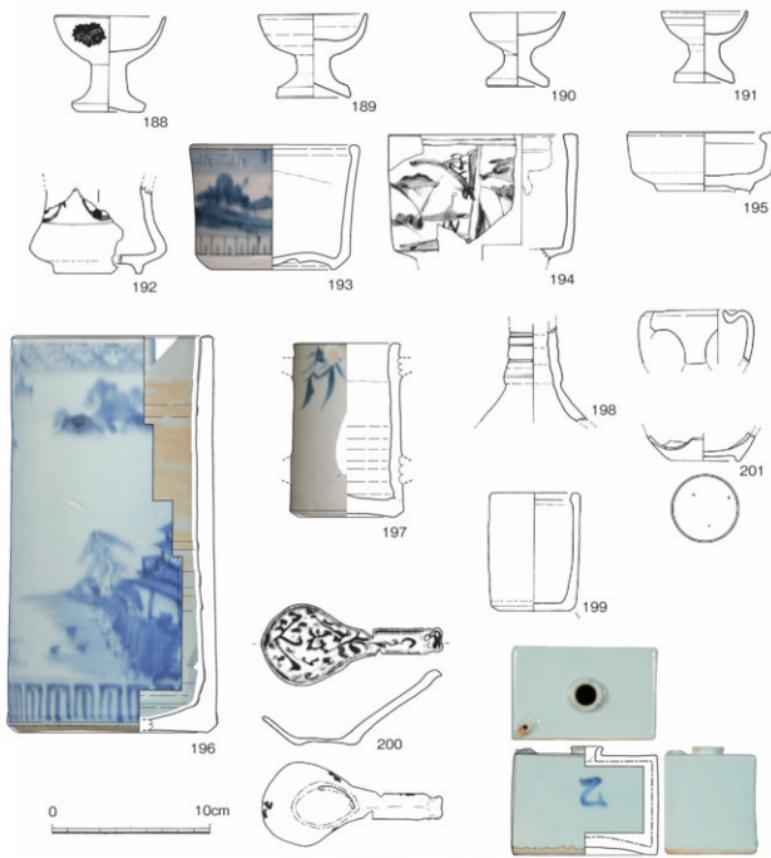
第219図 磁器24 瓶類他

磁器觀察表 7

備註 番号	開拓 番号	種類	器種	分類	產地	出土区	法量 (cm)			施主の 姓 色	施業の種類 色 図	施設部位	時期	備 考
							口径	底径	高さ					
214 回	136	染付	蓋	丸頭蓋	肥前系	G 地点	9.6	3.9	3.3	白色	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	手書き五瓣花
	137	染付	蓋	丸頭蓋	肥前系	G 地点	9.5	4.1	3.4	白色	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	コンニャク印刷五瓣花
	138	染付	蓋	丸頭蓋	肥前系	G 地点	10.0	—	3.6	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	手書き五瓣花
	139	染付	蓋	広葉形蓋	肥前系	G 地点	10.4	5.5	2.7	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	1780~1810年代	手書き五瓣花
	140	染付	蓋	双反形蓋	肥前系	G 地点	8.7	3.4	3.0	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	1820~60年代	
	141	染付	蓋	双反形蓋	肥前系	G 地点	9.2	3.9	2.3	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半~19世紀初頭	花瓶草
	142	染付	蓋	双反形蓋	肥前系	G 地点	9.0	3.4	3.0	灰色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半~19世紀初頭	山水文 她的日輪割ぎ
215 回	143	染付	蓋	双反形蓋	肥前系	G 地点	9.0	3.6	3.1	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	1820~60年代	
	144	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	11.6	—	3.6	淡灰色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19前葉~中葉	花瓶草
	145	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	10.3	—	3.8	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19前葉~中葉	花瓶草
	146	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	8.7	—	3.6	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀中期~19世紀初頭	紅葉文
	147	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	8.8	—	3.8	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀中期~一葉	帆船文
	148	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	13.0	—	3.2	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀中期~19世紀初頭	
	149	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	13.8	—	—	原灰色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	
216 回	150	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	14.4	—	2.5	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	鶴唐草に花文
	151	染付	蓋	物置蓋	肥前系	G 地点	16.4	—	5.3	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	近代以降	
備註 番号	開拓 番号	種類	分類	器種	產地	出土区	法量 (cm)			施主の 姓 色	施業の種類 色 図	施設部位	時期	備 考
							口径	底径	高さ					
217 回	152	色絵	碗	小鉢	中国	G 地点	4.0	1.9	2.0	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀	羅馬 笠置し 口吹き 達化文
	153	色絵	碗	小鉢	肥前系	G 地点	6.2	2.4	2.9	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	1820~70年代	她的日輪割ぎ
	154	色絵	碗	小鉢	肥前系	G 地点	7.8	2.8	4.1	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	
	155	色絵	碗	深筋小鉢 (半升か?)	肥前系	G 地点	9.2	—	—	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀	
	156	色絵	碗	小鉢	美濃	G 地点	9.5	2.9	4.0	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀	
	157	色絵	碗	小鉢	肥前	G 地点	8.5	3.0	3.5	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	近代以降	
	158	色絵	鉢	鉢	肥前有田	G 地点	4.4	—	—	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半~第4四半期	赤玉の桜文
218 回	159	色絵	碗	物置蓋	肥前系	G 地点	8.8	—	—	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半~19世紀初頭	
	160	色絵	碗	小鉢	肥前系	G 地点	10.4	—	3.1	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀	見込みに她的日輪割ぎ 洗文
	161	色絵	鉢	鉢	肥前系 (半升か?)	G 地点	13.6	4.8	5.6	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀後葉~中葉	她的日輪割ぎ
	162	色絵	皿	中皿	肥前	G 地点	15.6	—	3.4	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	近代以降	
	163	色絵	皿	大皿	肥前	G 地点	20.0	10.6	3.5	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀	
	164	色絵	鉢	鉢	肥前有田	G 地点	8.6	4.4	6.2	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	1820~60年代 (萬葉)	一葉纏み日文 金文
219 回	165	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	10.9	10.0	4.6	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀第4~19世紀第 1四半期	上段 花文
	166	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	10.9	10.0	4.7	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀第4~19世紀第 2四半期	中段
	167	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	10.9	10.7	7.0	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後半	
	168	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	9.8	9.4	7.3	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	1820~60年代 (萬葉)	
	169	色絵	鉢	段垂	肥前系	G 地点	—	3.9	—	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	19世紀後葉~萬葉	駄文
	170	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	5.2	5.4	10.5	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	近代以降	
	171	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	6.2	3.8	5.5	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後葉~中葉	蟹文
220 回	172	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	5.2	4.4	5.3	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後葉~19世紀初頭	花文
	173	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	5.5	3.5	4.6	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	18世紀後葉~中葉	樂の花文
	174	色絵	鉢	段垂	肥前	G 地点	5.2	—	—	白色	透明釉	蓋付に輪割ぎ	近代以降	花文
	175	白磁	木汪	在鉢	肥前系	G 地点	5.2	4.6	7.9	白色	透明釉	内面、底面は無釉	19世紀後半	
	176	染付	木汪	土瓶	在鉢	G 地点	5.4	—	—	白色	透明釉	内面は無釉	19世紀後半	墨止め 八三
	177	染付	木汪	酒器	肥前系 (半升)	G 地点	5.8	8.7	—	白色	透明釉	内面、底面は無釉	18世紀後半	花文
	178	染付	木汪	酒器	肥前系 (半升)	G 地点	5.8	8.3	7.6	白色	透明釉	内面、底面は無釉	18世紀後半	山水文
221 回	179	染付	木汪	からから	肥前系 (三河内か?)	G 地点	2.8	4.7	11.7	白色	透明釉	底面無釉	19世紀	
	180	染付	木汪	からから	肥前系 (三河内か?)	G 地点	—	4.0	—	白色	透明釉	底面無釉	近代以降	
	181	染付	瓶	徳利	肥前	G 地点	—	6.0	—	原灰色	透明釉	内面無釉	1650~70年代	一葉纏み日文
	182	染付	瓶	徳利	肥前	G 地点	3.3	—	—	白色	透明釉	内面無釉	18世紀後半~19世紀初頭	花瓶草文
	183	染付	瓶	徳利	肥前系	G 地点	3.5	—	—	灰色	透明釉	内面無釉	19世紀	蟹の輪文
	184	染付	瓶	徳利	肥前系	G 地点	6.6	2.31	—	白色	透明釉	内面無釉	近代以降	山水文
	185	染付	瓶	徳利	肥前	G 地点	2.5	—	—	原灰色	透明釉	内面無釉	18世紀	花文
222 回	186	染付	瓶	徳利	肥前	G 地点	3.2	—	—	原灰色	透明釉	内面無釉	18世紀	花文
	187	染付	瓶	徳利	肥前	G 地点	2.1	3.7	7.2	白色	透明釉	内面無釉	18世紀後半~19世紀初頭	

その他（第220図）

188～191は仏飯器である。188はコンニヤク印判で文様がスタンプされている。189～191は在地系のものである。192は陶胎染付の仏花瓶である。193～195は火入れである。193は青みがかった透明釉に呉須が滲む。在地系のものである。194は陶胎染付である。195は外面青磁釉の灰吹きであるが、口縁部には敲打痕が見られない。196・197は花瓶である。在地系のものと思われる。197は吊り下げに使用する取っ手部が欠損している。200は中国産のレンゲである。景德鎮窯系のものである。201は杯台である。側面に円形の穴が4か所あけられる。黄白色の緻密な胎土に上から黄色の釉薬がかかる。202は水滴としたが、やや大形のため酒瓶の可能性も考えられる。片面に「〇」に「カ」の字と反対側に「乙」の字が入れられている。特注品と思われる。



第220図 磁器25 その他

磁器観察表8

検出 番号	規範 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法面 (cm)			胎土の 色	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備考
							口縁	底径	高さ					
188	染付	仏具	仏壇器	肥前系	G 地点	7.0	4.0	6.1	灰色	透明釉	底面無釉	18世紀後半	コンニャク田村	
189	白磁	仏具	仏壇器	肥前系 (平底)	G 地点	6.9	4.7	5.3	灰白色	透明釉	底面無釉	19世紀		
190	白磁	仏具	仏壇器	肥前系 (平底)	G 地点	5.9	4	4.7	灰白色	透明釉	底面無釉	19世紀		
191	白磁	仏具	仏壇器	肥前系 (平底)	G 地点	7.6	3.8	4.5	灰白色	透明釉	底面無釉	19世紀		
192	陶胎染付	仏具	仏壇器	肥前	G 地点	—	5.7	—	灰褐色	灰釉	高台から高台内面・ 内面無釉	18世紀後半		
193	染付	仏具	香炉	肥前系 (平底)	G 地点	10.2	7.8	8	白色	透明釉	内面無釉	19世紀	山水文 院の白目型高台	
194	陶胎染付	仏具	香炉	肥前	M 地点	12.0	—	—	灰褐色	透明釉	内面無釉	18世紀後半		
195	染付	仏具	火入れ	肥前	G 地点	9.2	6.0	3.7	褐色	青磁釉	底面無釉	18世紀後半		
196	染付	瓶	瓶詰	花器	在肥系 (平底)	G 地点	12.4	12.0	25.4	白色	透明釉	底面	19世紀	山水文
197	染付	瓶	花瓶	花瓶	G 地点	6.4	6.0	11.1	白色	透明釉	底面・内面中位以下 無釉	19世紀		
198	染付	瓶	花瓶	花瓶	G 地点	—	—	—	灰白色	青磁釉	内面無釉	17世紀後半		
199	染付	瓶	花瓶	花瓶	G 地点	5.8	5.2	7.5	白色	青磁釉	内面・底面無釉	18世紀		
200	染付	わんぱく	萬葉錦	G 地点	—	—	—	白色	透明釉	—	19世紀後半			
201	染付	杯	ミニベイ	G 地点	—	—	—	白色	透明釉	—	19世紀	裏面にハサの目跡三か所見 る		
202	染付	瓶詰	水滴の?	在肥系 (平底)	G 地点	1.9	9.2	7.0	白色	透明釉	底面無釉	19世紀	「〇」か「乙」の文字	

陶器（第221～269図）

陶器については器種を大分類として分類したが、産地が明確なものについてはそれぞれの器種の中でまとめて掲載した。

碗（第221～224図）

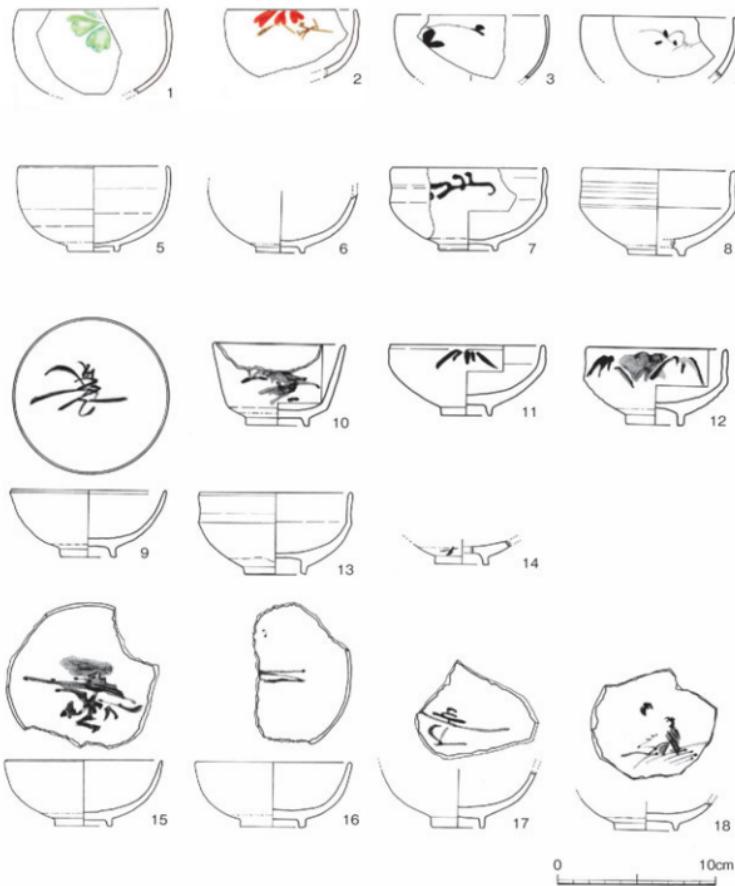
1～8は関西系の碗である。胎土は黄白色で、緻密である。透明釉が高台脇までかかり、高台と高台内面は露胎する。高台の削りはシャープで、四角形に削られる。1～6は体部が丸みを帯びるものである。1は外面口縁部下位に黄緑色の顔料で文様が描かれる。2は鉄絵と赤褐色の顔料で文様が描かれる。3・4は鉄絵である。7・8は煎じ碗形のものである。腰部で内側に屈曲するが口縁部はわずかに外反する。7は口縁外面に鉄絵が描かれる。

9～14は肥前系陶器で、京焼風陶器である。胎土は黄白色で、緻密である。透明釉が高台脇までかかり、高台と高台内面は露胎する。高台の削りはシャープで、四角形に削られる。9は半球形の碗で、見込みに鉄絵で「寿」の文字が記される。10は腰折の碗で、体部側面に鉄絵が描かれる。11～13は煎じ碗形のものである。11・12は外面口縁部に鉄絵の篆文が描かれる。14は高台脇に鉄絵が描かれる。15～18は9～14と同じ肥前系の京焼風陶器であるが、前述のものとやや削りの技法等が異なるものである。見込みには鉄絵が描かれる。

19～31は肥前系陶器の碗である。19は鉄絵が描かれる唐津焼である。20は唐津焼と思われるが、胎土が橙色を呈する点や、高台の削りなどの面でやや疑わしい。21は肥前の内野山系のものである。外面に銅緑釉が腰部までかかり、内面は透明釉がかかる。高台は露胎する。22は内外面にハケ目の施される碗である。23は小形の天目碗である。高台内面に胎土目の目跡が残る。24は打ちハケ目の碗である。大振りのものは珍しい。25は呂器手の碗である。26は、高台内面を削りだし角張らず、丸くつくられる。27は腰部でやや折れるもので、高台脇から高台内面は露胎する。28は内野山系のものである。高台は露胎し、見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。29は見込みに砂粒のついた高台痕が見られる。陶胎染付と同じ胎土である。30は肥前の青磁碗である。31は萩焼である。藁灰釉が厚手にかかり、鉄釉が内外面に一部かかる。腰部はシャープに削り出され、高台内面もシャープな凹状に削り出される。

32～40は薩摩焼の堅野系の碗である。一般的「白薩摩」と呼ばれるもので、白色陶胎に透明釉がかけられる。32～34は半球形のもので、高台脇に千鳥が描かれ、32のみが鉄絵で、他は呉須である。35は腰折れ形のものである。36は腰部の折れが2段階になるものである。37は小碗である。39は腰部から高台脇まで筋状の沈線が廻る。40は近代以降のものである。

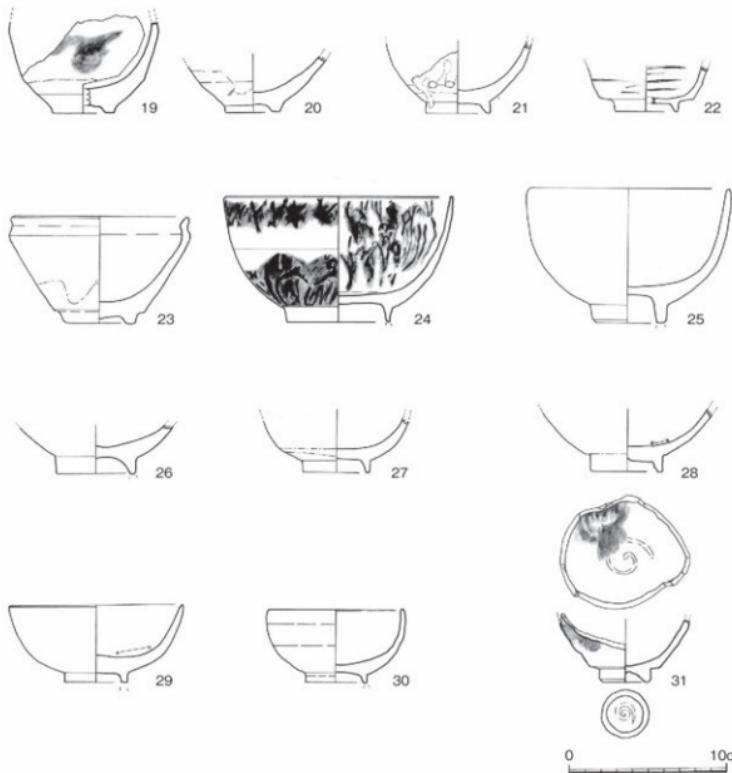
41～45は薩摩焼の苗代川系の碗である。豊付以外全面施釉され、41・42は高台内面が巴状に削られる。釉薬は甕・壺と同じものが使われている。



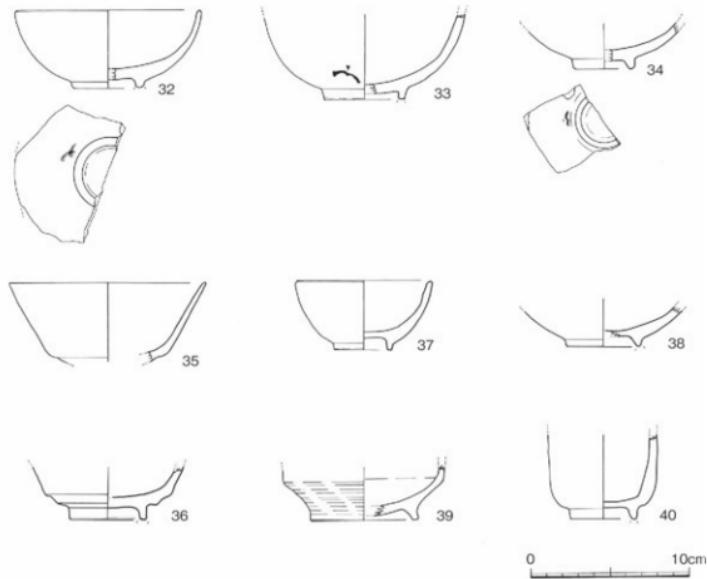
第221図 陶器 1 碗類

46～55は加治木・姶良系とも言われる、薩摩焼の龍門司系の碗である。胎土は茶褐色系で、苗代川系の碗と比べて緻密である。重ね焼きのため、見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。46～49は鉄釉がかかるものである。46・47は小形の碗である。50は黒釉の上から透明釉がかけられたものである。51～53は白化粧土の上に褐釉がかけられる二彩手である。53は褐釉が腰部までかかるもので、腰部から高台は露胎する。52・53は見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。54は白化粧土に透明釉がかかるもので、高台内は露胎する。55は褐釉のかけられた口縁部である。

56～64は小杯である。56は陶胎染付のものである。57は腰部と高台がシャープに削り出されるもので、透明釉が腰部までかかる。58は黄色の釉に透明釉がかけられたもので、内面は無釉である。小杯に分類したが、他の器種の可能性がある。59～63は薩摩焼の堅野系である。59～62は白色陶胎の白薩摩で、61には呉須で、62には鉄釉で千鳥が描かれる。64は宋胡録写しの文様が鉄釉で描かれる。



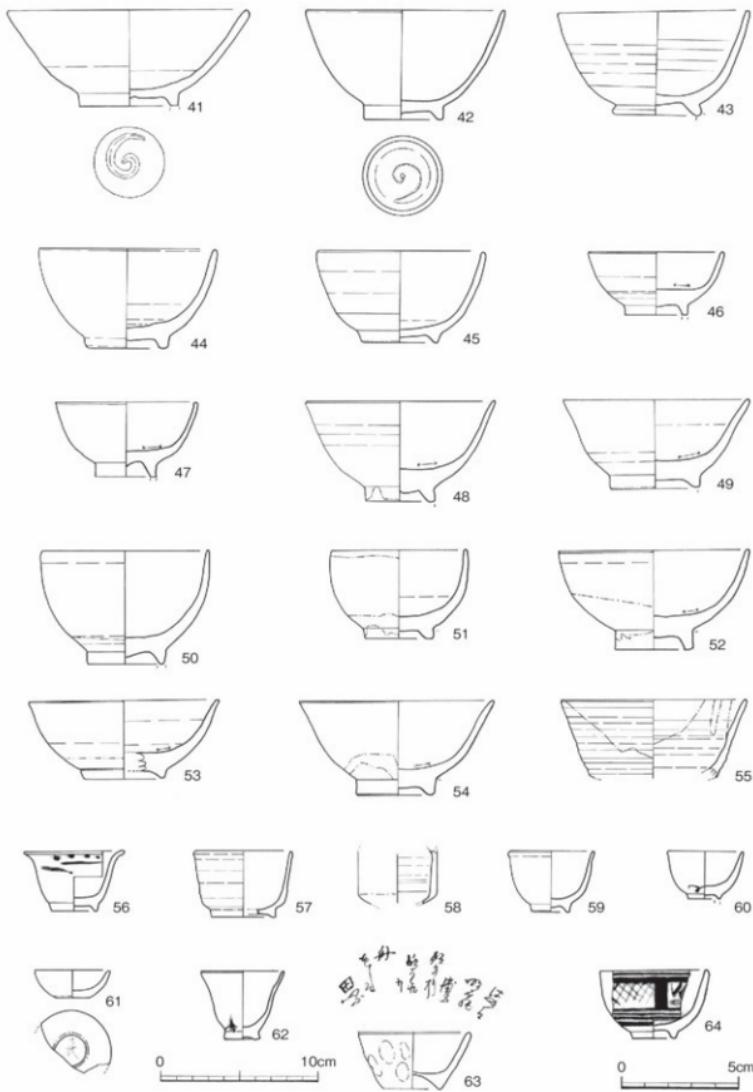
第222図 陶器2 碗類



第223図 陶器3 碗類

陶器觀察表1

器名 番号	種類 番号	種別	分類	器種	產地	出土区	測量 (cm)			施釉の 色調	施薬の 色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	高さ					
1. 陶器	碗	丸輪	圓西系	G地点	8.4	—	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	東洋の上級
2. 陶器	碗	丸輪	圓西系	G地点	8.2	—	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	東洋の上級
3. 陶器	碗	丸輪	圓西系	G地点	8.6	—	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	鉄船
4. 陶器	碗	丸輪	圓西系	G地点	8.6	—	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	鉄船
5. 陶器	碗	丸輪	圓西系	G地点	8.6	3.2	5.4	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	
6. 陶器	碗	丸輪	圓西系	G地点	—	3.0	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	
7. 陶器	碗	削じ縁	圓西系	G地点	9.8	3.6	5.2	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	鉄船
8. 陶器	碗	削じ縁	圓西系	G地点	9.6	3.6	5.4	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	
9. 陶器	碗	丸輪	肥前	G地点	10.0	3.6	4.3	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	見込みに鉄船「夷」か?
10. 陶器	碗	肥前	肥前	G地点	8.4	4.0	5.2	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	外國鉄船
11. 陶器	碗	削じ縁	肥前	G地点	9.8	3.2	4.5	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	晋文の鉄船
12. 陶器	碗	削じ縁	肥前	G地点	9.0	3.6	4.9	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	晋文の鉄船
13. 陶器	碗	削じ縁	肥前	G地点	9.8	3.8	5.2	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	
14. 陶器	碗	削じ縁	肥前	G地点	—	3.4	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	
15. 陶器	碗	丸輪	肥前	G地点	10.0	3.6	4.2	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	見込みに鉄船
16. 陶器	碗	丸輪	肥前	G地点	10.0	4.2	4.0	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	見込みに鉄船
17. 陶器	碗	丸輪	肥前	G地点	—	3.4	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	見込みに鉄船
18. 陶器	碗	削	肥前	G地点	—	4.0	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	10世紀前半	見込みに鉄船
19. 陶器	碗	肥前	肥前廣津	G地点	—	4.0	—	—	—	黃色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	1590~1610年代	鉄船
20. 陶器	碗	肥前	肥前廣津	G地点	—	3.5	—	—	—	黃白色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	1590~17世紀前半	
21. 陶器	碗	削	肥前内野山系	G地点	—	4.2	—	—	—	(黄) 黄褐色 (赤) 赤褐色	透明釉	外面部部—高台の内面は無釉	1590~1610年代	
22. 陶器	碗	削	肥前内野山系	G地点	—	4.0	—	—	—	透明釉	透明釉	蓋付口無釉	10世紀前半	ハナ田
23. 陶器	碗	大輪	肥前	G地点	12.4	4.6	6.5	—	—	黄褐色 茶褐色	透明・茶褐色 茶褐色	外面部部—高台の内面は無釉	1590~1630年代	
24. 陶器	碗	大輪	肥前	G地点	14.6	6.6	8.0	—	—	黄褐色 茶褐色	透明・茶褐色 茶褐色	蓋付口無釉	10世紀前半	打ちハケ田



第224図 陶器4 碗類

陶器観察表2

種別 番号	規範 番号	種類	分類	名前	产地	出土区	法量(cm)			施釉の種類	施釉の色 調	施釉部位	時期	備考	
							口縁	底径	高さ						
第22 回	25	陶器	瓶	肥前平瓶	肥前	G地点	12.9	4.3	9.8	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀前半		
	26	陶器	瓶	肥前	肥前	G地点	—	5.0	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	11世紀後半		
	27	陶器	瓶	肥前	肥前か?	G地点	—	4.3	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀前半		
	28	陶器	瓶	肥前内野山系	G地点	—	4.6	—	白質色	透明釉	高台から高台内面無釉	10世紀前半	見込みに材の目袖剥ぎ		
	29	陶器	瓶	肥前内野山系	G地点	11.0	4.0	4.9	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀前半	見込みに材の目袖剥ぎ		
	30	陶器	瓶	肥前	G地点	8.4	3.8	4.6	白質色	青緑釉	—	10世紀			
第23 回	31	陶器	瓶	肥前	G地点	—	3.0	—	白質色	鉄釉	当面剥離・高台内面無釉	10世紀代			
	32	白色陶胎	瓶	丸瓶	薩摩聖野系	G地点	11.8	4.4	4.9	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代	鉄釉の千鳥印有り	
	33	白色陶胎	瓶	丸瓶	薩摩聖野系	G地点	—	5.2	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代	直頭の千鳥印有り	
	34	白色陶胎	瓶	丸瓶	薩摩聖野系	G地点	—	3.8	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代	鉄釉の千鳥印有り	
	35	白色陶胎	瓶	腰折十角瓶	薩摩聖野系	G地点	15.0	—	—	白質色	透明釉	—	10世紀代		
	36	白色陶胎	瓶	腰折十角瓶	薩摩聖野系	G地点	—	4.8	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代		
	37	白色陶胎	瓶	小瓶	薩摩聖野系	G地点	8.4	3.6	4.4	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代		
	38	白色陶胎	瓶	小瓶	薩摩聖野系	G地点	—	4.6	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代		
	39	白色陶胎	瓶	高台	薩摩聖野系	G地点	—	6.6	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀代		
	40	白色陶胎	瓶	泥足小瓶	薩摩聖野系	G地点	—	4.2	—	白質色	透明釉	壹付口無釉	10世紀後半		
第24 回	41	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	15.4	6.3	6.1	—	—	鉄釉	高台口無釉	10世紀	高台内面	
	42	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	12.6	5.0	6.9	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀		
	43	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	12.2	5.6	6.6	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀		
	44	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	11.4	5.2	6.2	—	—	鉄釉	壹付・高台内面無釉	10世紀		
	45	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	10.8	4.8	5.8	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀		
	46	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	8.5	3.9	4.0	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	47	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	9.1	3.9	4.7	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	48	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	12.0	4.2	6.4	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	49	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	11.7	5.5	5.7	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	50	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	10.6	4.8	7.2	—	—	鉄釉・透明釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	51	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	8.6	4.2	5.6	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	52	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	12.0	4.6	6.5	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀後半		
	53	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	12.0	5.4	4.9	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀前半		
	54	陶器	瓶	薩摩代川系	G地点	12.4	4.8	6.0	—	—	白口相釉・透	明釉	10世紀後半		
	55	陶器	瓶	薩摩門司系	G地点	11.8	—	5.0	—	—	鉄釉	壹付口無釉	10世紀前半		
	56	陶胎手鏡	小坪	肥前	G地点	6.4	2.8	3.8	—	—	透明釉	壹付・輪縁無釉	10世紀代		
	57	陶器	瓶	小坪	肥西系?	G地点	6.2	4.0	4.2	—	—	透明釉	壹付・高台内面無釉	10世紀代	
第25 回	58	磁器	瓶	小坪?	肥前	G地点	—	—	—	—	—	白口	壹付・透明釉	11世紀後半	
	59	陶器	瓶	小坪	肥前	G地点	5.0	2.4	3.9	—	—	白口	壹付・輪縁無釉	10世紀代	平鷺印有り
	60	陶器	瓶	小坪	肥前	G地点	4.8	2.0	3.0	—	—	白口	壹付・輪縁無釉	10世紀代	平鷺印有り
	61	陶器	瓶	小坪	肥前か?	G地点	4.8	2.0	1.7	—	—	白口	壹付・輪縁無釉	10世紀代	
	62	陶器	瓶	小坪	肥前	G地点	—	2.2	4.3	—	—	白口	壹付・輪縁無釉	10世紀代	平鷺印有り
	63	陶器	瓶	小坪	肥前か?	G地点	2.2	—	2.6	—	—	白口	壹付・輪縁無釉	壹付口無釉	古山口跡
	64	陶器	瓶	小坪	肥前	G地点	4.4	1.8	2.9	—	—	三輪色	壹付口無釉	10世紀代	宋朝錦

皿(第225・226図)

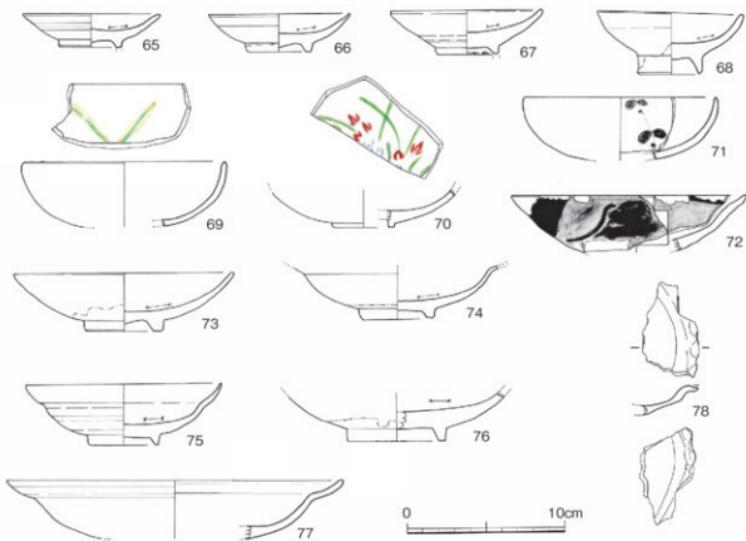
65~83は皿である。

65~68は小皿である。薩摩焼の龍門司系のものである。見込みは蛇の目袖剥ぎされ、65・66は高台内面まで施釉され、その他のは露胎する。67は豊付に砂が付着する。68は高台が高いもので、皿に分類したが、盃の可能性も考えられる。

69~78は中皿である。69・70は関西系の皿である。見込みに上絵付で花文が描かれる。71は京焼で、上絵付で花文が描かれる。72は肥前の陶器で唐津焼である。79は鉄釉で文様が描かれる。80は二彩手で、見込みに砂目が観察できる。81は三島手のものである。82は二彩手で見込みに輪状の砂目が観察される。83は薩摩焼の苗代川系の皿である。口縁部は輪花状につまれ、底面には足がつけられる。

79~83は大皿である。79~82は肥前の陶器で唐津焼である。79は鉄釉で文様が描かれる。80は二彩手で、見込みに砂目が観察できる。81は三島手のものである。82は二彩手で見込みに輪状の砂目が観察される。83は薩摩焼の苗代川系の皿である。口縁部は花びら状に装飾している。

79~83は大皿である。79~82は肥前の陶器で唐津焼である。79は鉄釉で文様が描かれる。80は二



第225図 陶器5 盆類

鉢（第227図）

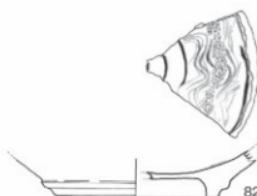
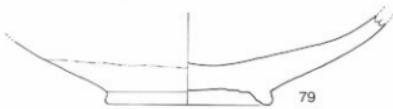
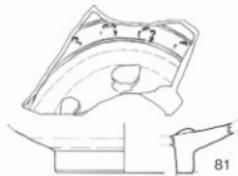
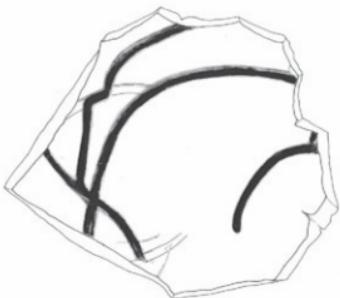
84～89は鉢である。84は大形のもので、内野山系のものである。内外面に銅緑釉がかかる。85・86は片口になると思われるものである。85は関西系のもので、見込みに目跡が観察される。87～89は薩摩焼の鉢である。87・88は龍門司系のもので、87は白化粧に透明釉の二彩手、88は二彩手に飛び鉋が施される。89は白色陶胎の白薩摩と思われる。底面に半球状の足が3足つけられている。

瓶類（第228・229図）

90～108は瓶類である。徳利・酒瓶等を瓶類として分類した。

90～99は薩摩焼の苗代川系の徳利である。90～93は17世紀代の初期薩摩焼である。器壁は非常に薄く、内面には同心円状のタキ目が残る。93は特に器壁が薄く、作りがシャープなものである。94は胴部である。外面に沈線が5条廻り、内面は横方向の筋状の工具痕が残る。95～99は底部である。95は外底面は無釉で、内面に横方向の筋状の工具痕が残る。96・97は薄手の作りのもので、初期薩摩焼と思われる。97は外底面に貝目が残る。98はやや厚手のものである。胴部下位に貝目が見られる。99は底面に穿孔が観察できるもので、全体の状況は不明である。瓶として分類したが他の器種の可能性も考えられる。100は薩摩焼苗代川焼の雲助徳利である。外面に継ぎ位の調整痕が観察できる。101は琉球荒焼の徳利である。胎土は赤褐色で焼き締めである。

107・108は琉球荒焼の泡盛用の徳利である。

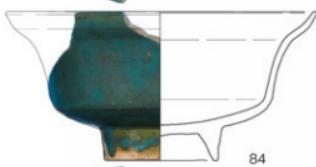


83

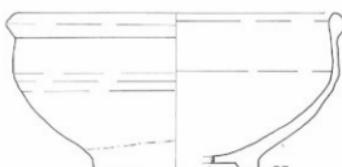


0 10cm

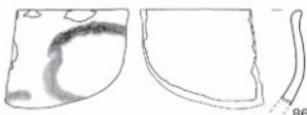
第226図 陶器6皿類



84



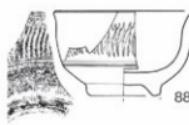
85



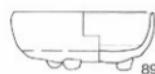
86



87



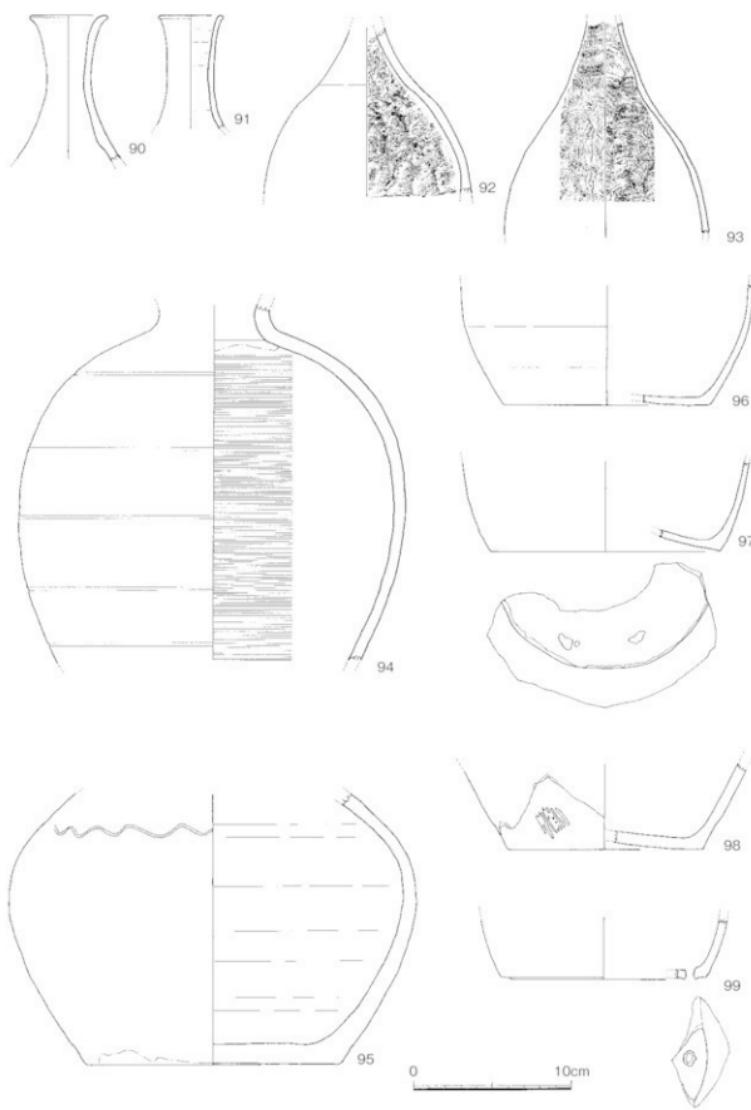
88



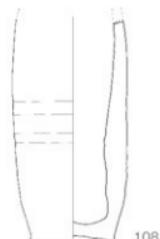
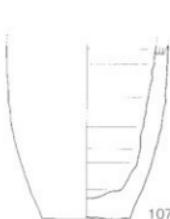
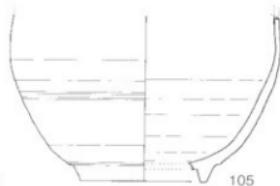
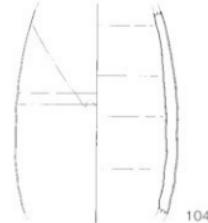
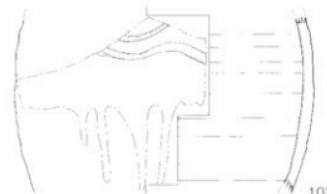
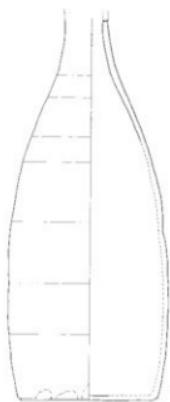
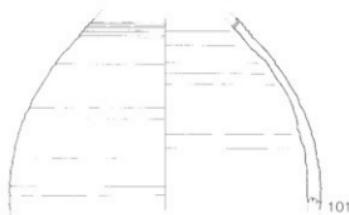
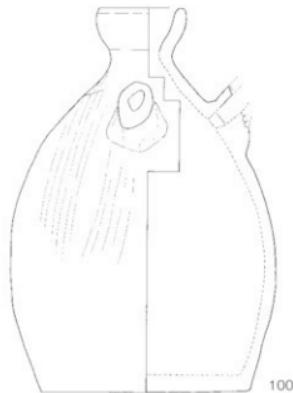
89



第227図 陶器7 鉢類



第228図 陶器8 瓶類



0 10cm

第229図 陶器9 瓶類

陶器觀察表3

種別 番号	規範 番号	種類	分類	器形	产地	出土区	法量(cm)			施土の 色	施葉の種類 色 調	施釉部位	時期	備考	
							口径	底径	高さ						
第 225 回	65	陶器	皿	小皿	薩摩鍋門田川系	G地点	8.6	3.5	2.1	淡褐色	施釉	蓋付口輪削	10世紀代	見込みに於く其の目輪削	
	66	陶器	皿	小皿	薩摩鍋門田川系	G地点	9.0	4.0	1.9	淡褐色	施釉	腹部-蓋台内面無釉	10世紀代	見込みに於く其の目輪削	
第 226 回	67	陶器	皿	小皿	薩摩鍋門田川系	G地点	9.5	3.8	2.8	淡褐色	白石粘土と透明 釉	蓋付は輪削ぎ	10世紀代	底面に砂利付 手平	
	68	陶器	皿	小皿	薩摩鍋門田川系	G地点	9.2	3.7	3.8	淡褐色	施釉	腰部-蓋台内面無釉	10世紀代	見込みに於く其の目輪削	
第 227 回	69	陶器	皿	中皿	関西系	G地点	12.8	-	-	反白色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	10世紀代	内面に上端	
	70	陶器	皿	中皿	官窯	G地点	-	4.0	-	淡白色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	10世紀代	内面に上端	
第 228 回	71	陶器	皿	中皿	関西系	G地点	12.2	-	-	淡白色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	10世紀代	内面に上端	
	72	陶器	皿	中皿	肥前	G地点	15.0	-	-	淡褐色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	1590~1610年代		
第 229 回	73	陶器	皿	中皿	肥前系	G地点	13.6	4.8	3.7	淡色	(淡) 透明釉 (淡) 透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀半~18世紀 初期	見込みに於く其の目輪削	
	74	陶器	皿	中皿	肥前系	G地点	14.0	5.0	4.0	淡色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀半~18世紀 中期	見込みに於く其の目輪削	
第 230 回	75	陶器	皿	中皿	肥前系	G地点	12.5	4.8	3.9	淡褐色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀末~18世紀初 期	見込みに於く其の目輪削	
	76	陶器	皿	中皿	肥前系	G地点	6.2	-	-	淡褐色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀末~18世紀初 期	見込みに於く其の目輪削	
第 231 回	77	陶器	皿	中皿	在来?	G地点	21.3	-	-	淡白色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	18世紀代		
	78	陶器	皿	中皿	肥前・美濃	G地点	-	-	-	淡白色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀~18世紀代		
第 232 回	79	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	-	10.4	-	淡褐色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	1590~1610年代	腰部	
	80	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	-	10.4	-	淡褐色	透明釉・白化 透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀後半 中期	東北地方 三洋手・兼毫	
第 233 回	81	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	-	9.0	-	淡褐色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀後半	見込みに肥前	
	82	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	-	10.2	-	淡褐色	透明釉	腰部-蓋台内面無釉	18世紀第二・三半葉~ 第三・四半葉	見込みにハケ手・野口	
第 234 回	83	陶器	皿	大皿	薩摩鍋門田川系	G地点	-	-	-	淡褐色	铁釉	全面施釉	19世紀代	三星 横目	
	84	陶器	鉢	鉢	肥前	G地点	19.7	7.3	9.5	淡褐色	銅斑釉	腰台削-蓋台内面は無釉	17世紀半~18世紀初 期		
第 235 回	85	陶器	鉢	鉢	肥前	G地点	20.4	10.0	10.0	淡褐色	銅斑釉	腰部-蓋台内面無釉	17世紀半~18世紀初 期	見込みに目輪削	
	86	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	10.0	5.0	8.2	淡褐色	銅斑釉	腰台削-蓋台内面は無釉	1590~1610年代	
第 236 回	87	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	10.0	5.0	8.2	淡褐色	銅斑釉	腰台削-蓋台内面は無釉	18世紀後半 中期	二手手
	88	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	8.6	4.6	5.4	淡褐色	銅斑釉	腰部-蓋台内面は無釉	19世紀代	舟形
第 237 回	89	陶器	鉢	鉢	肥前?	G地点	10.8	-	3.8	淡褐色	透明釉	三足のみ施釉	19世紀代?	三足	
	90	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	3.2	-	-	淡褐色	铁釉	腰台削-蓋台内面は無釉	17世紀後半	
第 238 回	91	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	3.2	-	-	淡褐色	铁釉	腰台削-蓋台内面は無釉	17世紀後半	
	92	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	4.0	-	-	淡褐色	铁釉	腰台削-蓋台内面は無釉	17世紀後半	内面に圓形のタコ目
第 239 回	93	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	-	-	淡褐色	铁釉	腰台削-蓋台内面は無釉	17世紀後半	内面に圓形のタコ目
	94	陶器	鉢	鉢	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	-	-	淡褐色	铁釉	外周沿縁	外周沿縁	
第 240 回	95	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	5.5	13.1	24.4	淡褐色	铁釉	全面無釉	19世紀代	外周沿縁の ヘラス具輪削あり
	96	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	-	-	淡褐色	铁釉	全面無釉	19世紀代	外周沿縁、目口
第 241 回	97	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	14.6	-	淡褐色	铁釉	全面無釉	17世紀後半	外周沿縫、目口
	98	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	12.4	-	淡褐色	铁釉	全面無釉	18世紀代	外周沿縫、目口
第 242 回	99	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	13.2	-	淡褐色	铁釉	全面無釉	17世紀後半~18世紀代	外周沿縫、目口
	100	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	5.5	13.1	24.4	淡褐色	铁釉	外周沿縫	19世紀代	
第 243 回	101	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	-	-	淡褐色	铁釉	全面無釉	19世紀代	球體突起
	102	陶器	瓶	瓶	肥前	関西系	G地点	8.5	-	-	淡褐色	透明釉	全面無釉	19世紀代	
第 244 回	103	陶器	瓶	瓶	肥前?	肥前	G地点	-	-	-	淡褐色	白石粘土	内面・腰部	10世紀後半	内面にハサク日
	104	陶器	瓶	瓶	肥前?	肥前野山系	G地点	-	-	-	淡褐色	白石粘土	内面無釉	10世紀後半	腰付に目口
第 245 回	105	陶器	瓶	瓶	肥前	肥前・美濃	G地点	-	8.0	-	淡褐色	铁釉	内面無釉	10世紀	
	106	陶器	瓶	瓶	肥前	薩摩鍋門田川系	G地点	-	6.8	-	淡褐色	白石粘土	内面・腰部-蓋台内面は無釉	10世紀後半	
第 246 回	107	陶器	瓶	瓶	肥前	東屋	G地点	-	5.6	-	淡褐色	白石粘土	内面・腰部	10世紀後半~10世紀代	腰付に目口
	108	陶器	瓶	瓶	肥前	東屋	G地点	-	5.3	-	淡褐色	白石粘土	内面無釉	10世紀後半~10世紀代	腰付無口

土瓶(第230~235図)

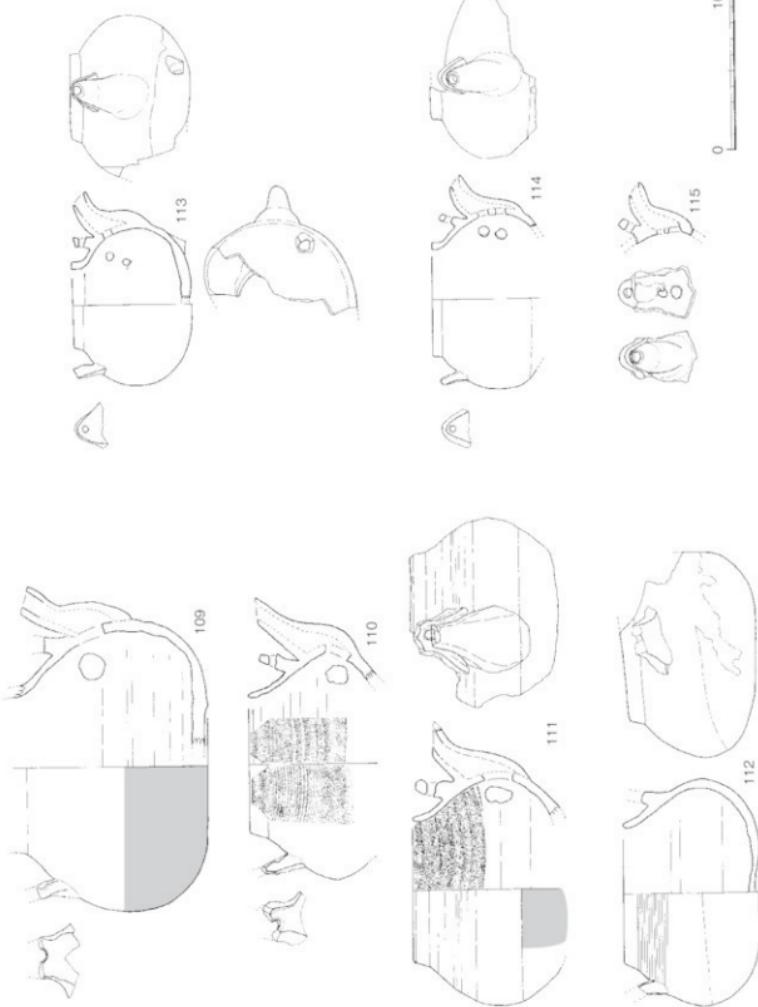
109~1314は土瓶である。

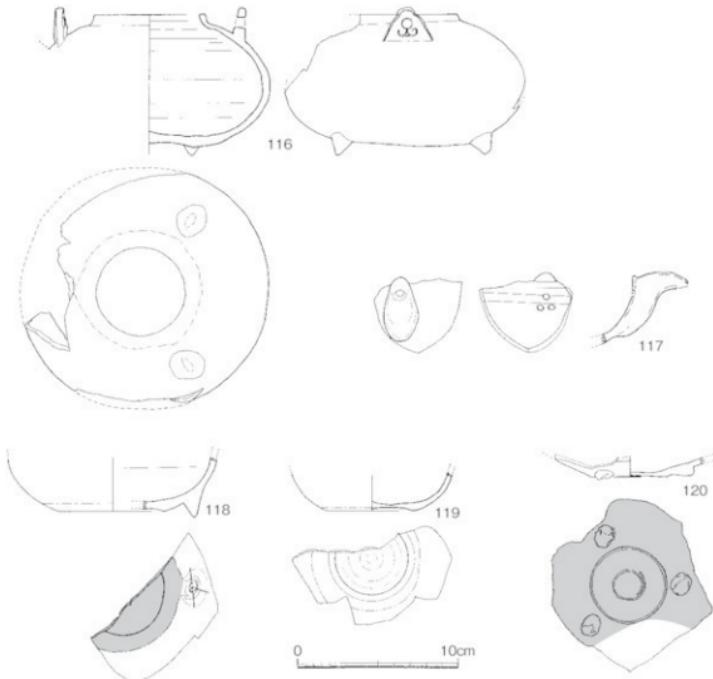
109~112は胴部が下垂した形状で、肩部に筋状の工具痕が残るものである。胴部と口縁部の境は明確ではなく、なだらかに窄まる。注口は溜め口であるが、先端は受け口ではなくまっすぐに作られる。胎土は粗く、微細な砂粒を多く含む。底面に足はなく、茶止め穴もない。産地は、熊本の八代焼と思われる。

113~131は苗代川系の土瓶である。茶褐色系の胎土に鉄釉が、胴部下位までかかる。底部は削り出しされ、筋状の工具痕が残るものが多い。また、3足の足がつけられる。113~115は茶止め穴がある。116~119は薩摩燒堅野系の土瓶である。釉葉は、底面中央の削り部脇までかかり、足部にも先端を除きかかる。116は掲釉のもので、内面にもかかる。器形は平形で、胴部は尖らない。117は注口部である。118は底部である。白色陶胎のもので、底面には煤が付着する。120は関西系のものである。小さい足がつく。121・122は、底部中央の削りが浅く、ほとんど平坦に近いもので、器形は胴部がやや下垂した丸形である。足は底面で注口のやや左もしくはほぼ真下

第230図 陶器10 土瓶

10cm



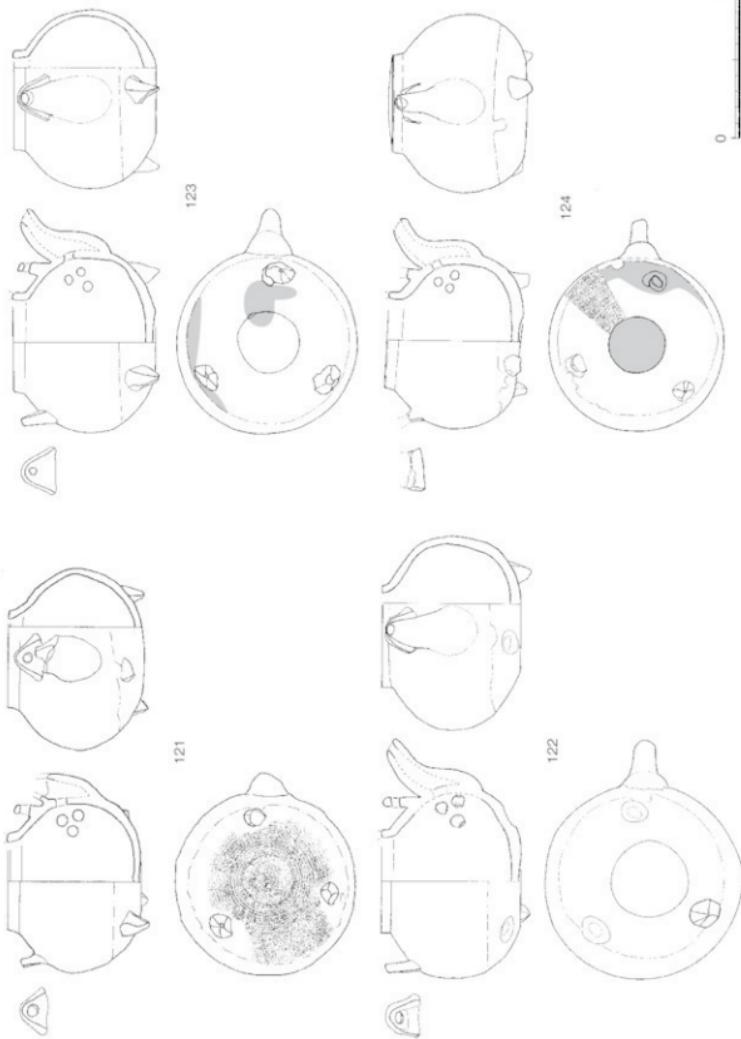


第231図 陶器11 土瓶

陶器観察表4

種別 番号	所蔵 番号	種別	分類	器形	產地	出土年	法面 (cm)		胎土の 性質	被塗の 性質	被塗の 色	施釉部位	時期	備考
							口徑	底径						
第 230 回	109	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	8.4	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代		
	110	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	8.6	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	外側口縁部下位に楕形
	111	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	M地点	9.0	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	外側口縁部下位に楕形
	112	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	8.8	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	外側口縁部下位に楕形
	113	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	裏止め穴 二穴
	114	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	7.2	—	—	褐色	鉄焰か?	表面無釉	19世紀代	裏止め穴 二穴
	115	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	裏止め穴 二穴
	116	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	—	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	117	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	
	118	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	18世紀後半	表面にスコット
第 231 回	119	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	5.4	—	褐色	鉄焰	表面無釉	19世紀代	
	120	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	—	褐色	鉄焰 (内) 鉄焰	表面無釉	19世紀代か?	三星 表面にスコット
	121	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	6.1	9.0	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半		
	122	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	6.5	—	—	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	123	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	5.7	9.3	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半		
第 232 回	124	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	6.1	—	—	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	125	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	5.4	7.9	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半		
	126	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	7.2	10.5	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半		
	127	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	6.2	7.8	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半		
	128	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	6.4	—	—	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半	表面に重ね焼きの跡あり
第 233 回	129	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	7.0	8.5	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	19世紀代		
	130	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	7.0	7.5	褐色	鉄焰	口唇部・底面無釉	18世紀後半～19世紀 前半	表面にスコット	
	131	陶器	水注	土瓶	龍崎時代	G地点	—	—	褐色	鉄焰	表面無釉	18世紀後半～19世紀 前半	表面に貝貝	

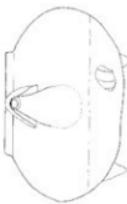
第232図 陶器12 土瓶



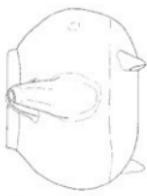
第233図 陶器13 土瓶

0 10cm

128



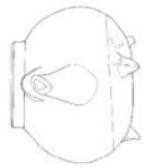
127



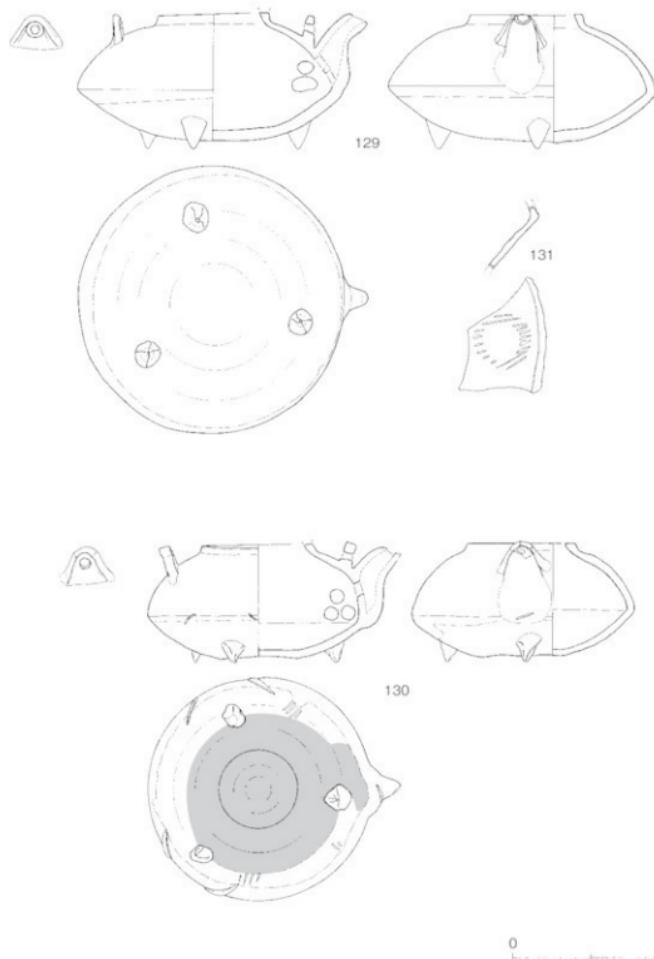
126



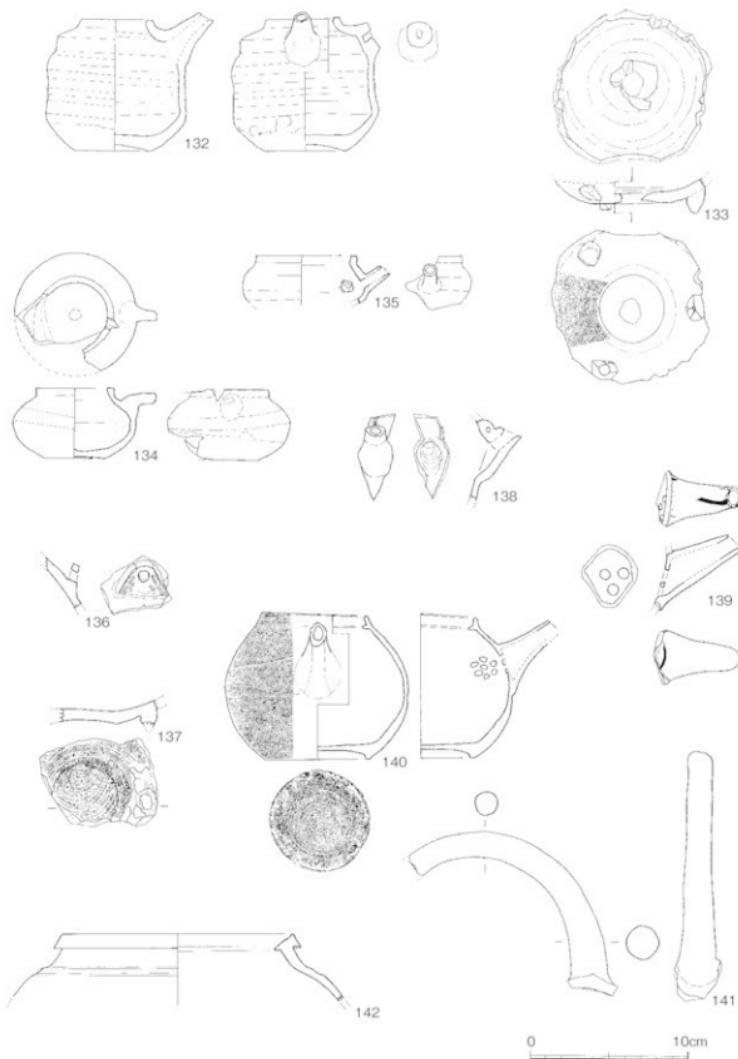
125



から三角形状に均等に3足つけられる。123～127は丸形のもので、底面中央の削りがやや深いものである。足は底面で注口のやや右側に均等に3足つけられる。128～131は器形が平形のものである。128は胴部中位が尖らず、丸みを帯びる。129～131は、胴部中位に稜を持つものである。130は注口の真下から3足がつく。底面に貝目が観察される。131にも貝目が観察される。



第234図 陶器14 土瓶



第235図 陶器15 水注類 土瓶・急須他

132～136は薩摩焼の苗代川系のものである。132は急須である。133は土瓶の底部に穿孔があけられたものである。134・135は楽飲みのような用途に使用されたと思われるものである。136は装飾の施された土瓶の耳部である。137は外底面に糸切りが観察されるもので、産地は不明である。138・139は関西系の水注類の注口部である。139には鉄絵が描かれる。140は薩摩焼の龍門司系の急須である。鮫肌で、外底面に「芳右」の銘が入る。141は陶製の水注の把手部である。142は17世紀代の薩摩焼で、苗代川系のものである。蓋受け部があることから、水注に分類した。

陶器観察表5

件名 番号	種類 器名	種別	分類	器種	产地	出土区	寸法(cm)		胎土の 色	釉薬の種類 色	施釉部位	時期	備考
							口径	高さ					
132	陶器	水注	急須	薩摩苗代川系	G 地点	3.9	4.8	8.3	暗赤褐色	鐵絵	腰部-底面無釉 口唇部無釉	19世紀代	
133	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G 地点	—	—	—	青褐色	鐵絵	底面無釉	19世紀代	底面に穿孔有り
134	陶器	水注	樂飲み	薩摩苗代川系	G 地点	5.0	3.8	4.5	暗赤褐色	鐵絵	腰部-底面無釉	19世紀代	
135	陶器	水注	急須	薩摩苗代川系	G 地点	7.4	—	—	褐色	鐵絵	腰部-底面無釉	19世紀代	
136	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G 地点	—	—	—	褐色	鐵絵	—	19世紀代	底面に鉄絵有り
137	陶器	水注	急須	吉田	G 地点	—	—	—	青褐色	—	—	19世紀代	底面中央糸切り
138	陶器	水注	急須	吉田	G 地点	—	—	—	青褐色	—	—	19世紀代	
139	陶器	水注	土瓶	吉田	G 地点	—	—	—	青白色	透明釉	内面無釉	19世紀代	口唇部-鉄絵
140	陶器	水注	急須	薩摩苗代川系	G 地点	6.0	9.3	—	三彩色	透明釉	底面無釉	19世紀後半	底面に「芳右」の銘有り
141	陶器	水注	把手	薩摩苗代川系	G 地点	—	—	—	黄褐色	鐵絵	—	17世紀後半-18世紀代	水注の把手
142	陶器	水注	水注か?	薩摩苗代川系	G 地点	14.4	—	—	青褐色	鐵絵	口唇部無釉	17世紀後半-18世紀代	

蓋（第236・237図）

土瓶蓋、土鍋蓋、雪平鍋等の蓋を掲載した。

143～152は薩摩焼の苗代川系のものである。148は上面2か所に重ね焼きの痕跡が見られる。149～151は上面に重ね焼きの痕跡が輪状に残る。152は上面端部に3条の沈線が巡る。153・155は薩摩焼の龍門司系のものである。153は、上面に黒釉と青流しの文様が施される。154は肥前のものと思われ、胎土は黄白色で、上面に鉄絵が描かれる。

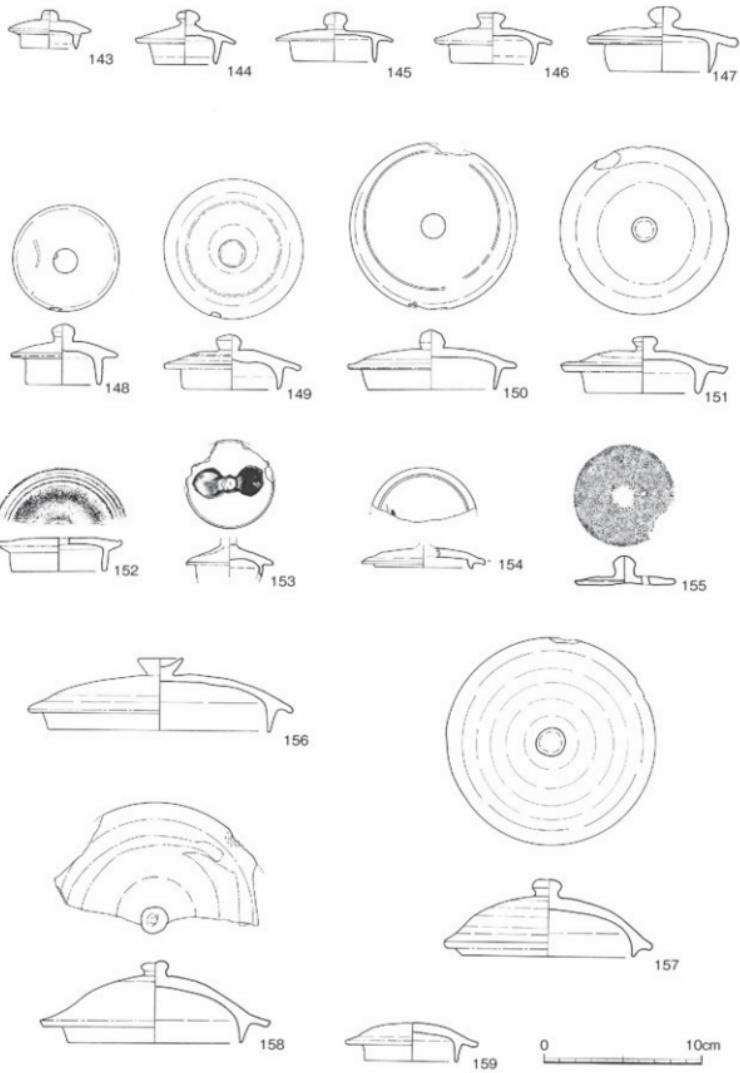
156～158は大形の蓋で、土鍋用のものである。159は小壺用で、つまみはない。160・161は大形のつまみのない蓋である。161は関西系のもので、上面に鉄絵が描かれる。162～164は鍋の蓋である。162・163は飛び鉢が施される。164は内面天井部は円状の軸がかからない部分が見られる。

鍋類（第237・238図）

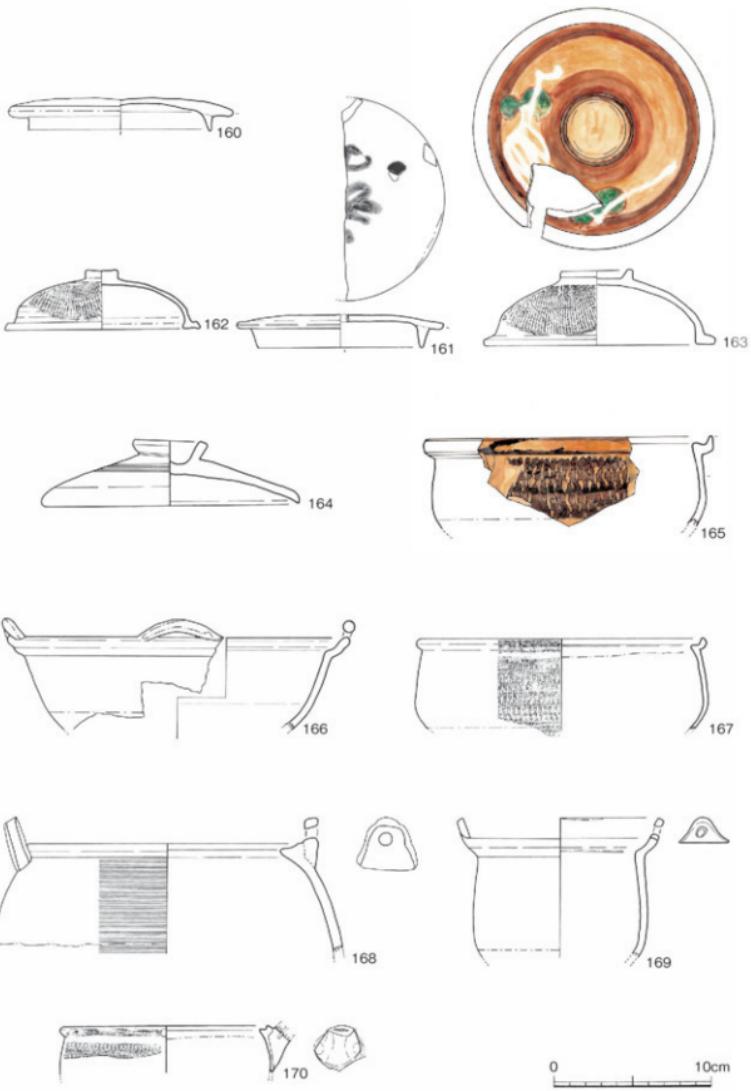
165～180は鍋である。火にかけるため、底面は露胎する。165・167・170の3点は関西系のもので、外面に飛び鉢が施される。172・178は欠損しているが、把手がつくと思われる。他はすべて薩摩焼で苗代川系のものである。羽釜形のものや片口がつくもの等、様様な形状のものがある。

片口（第239図）

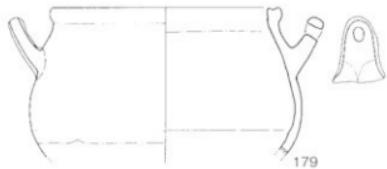
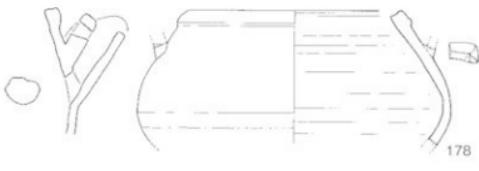
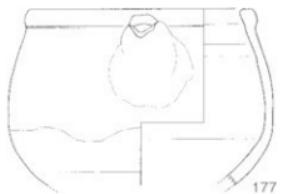
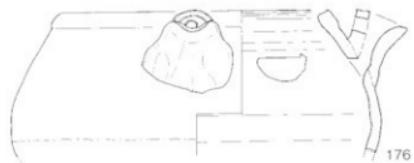
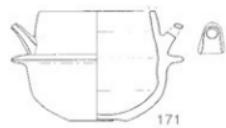
181～189は片口である。すべて薩摩焼の苗代川系のものである。181～183は器壁が厚でのものである。内外面がヘラ状工具による横筋が観察される。181は外底面に貝目が観察される。184～189は器壁が薄手のもので、17世紀代のものと考えられる。185・189は内面に同心円状のタタキ目が残る。187～189は片口部である。



第236図 陶器16 蓋類

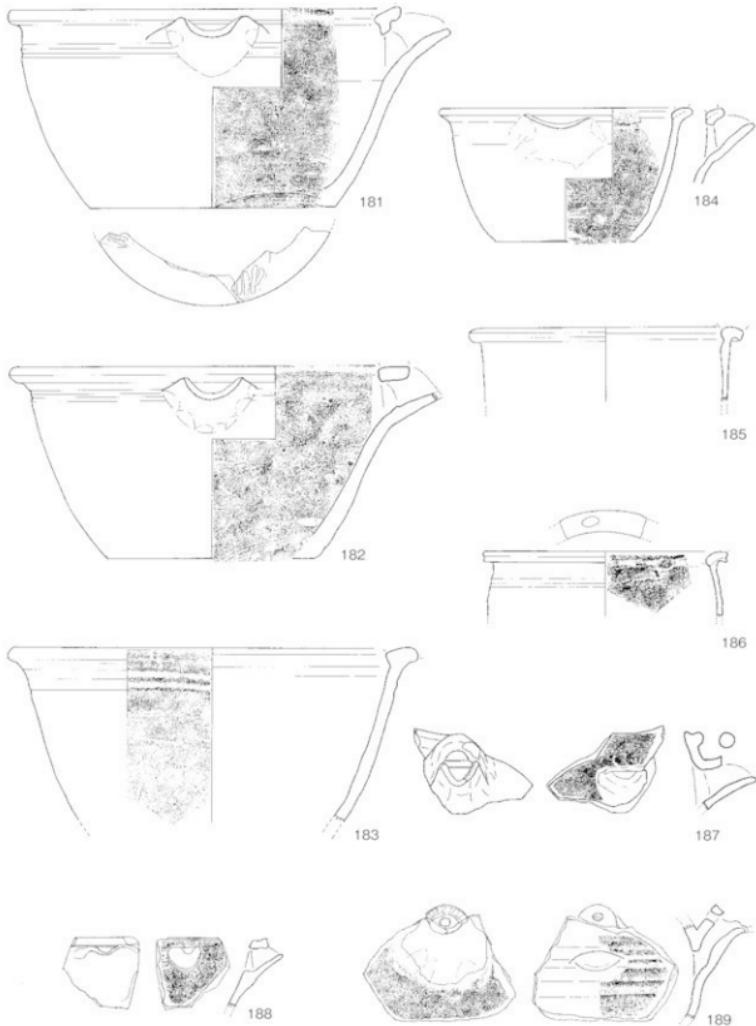


第237図 陶器17 蓋・鍋類

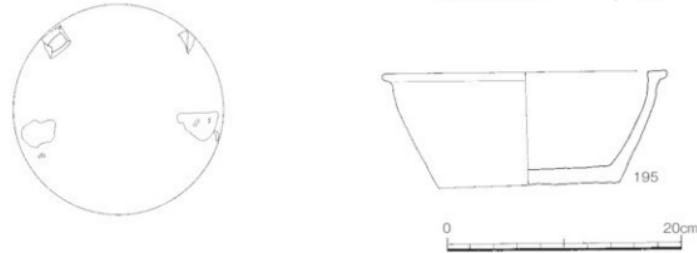
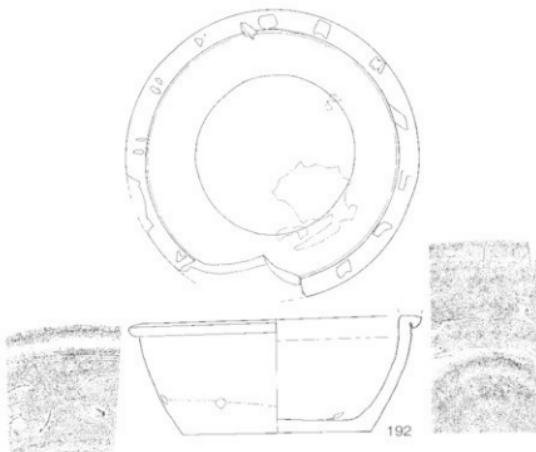
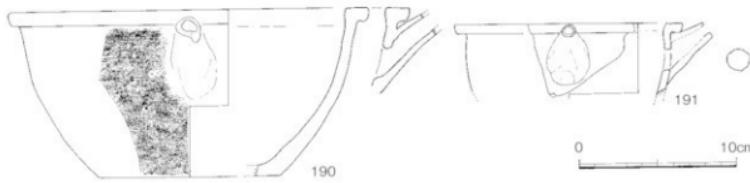


0 10cm

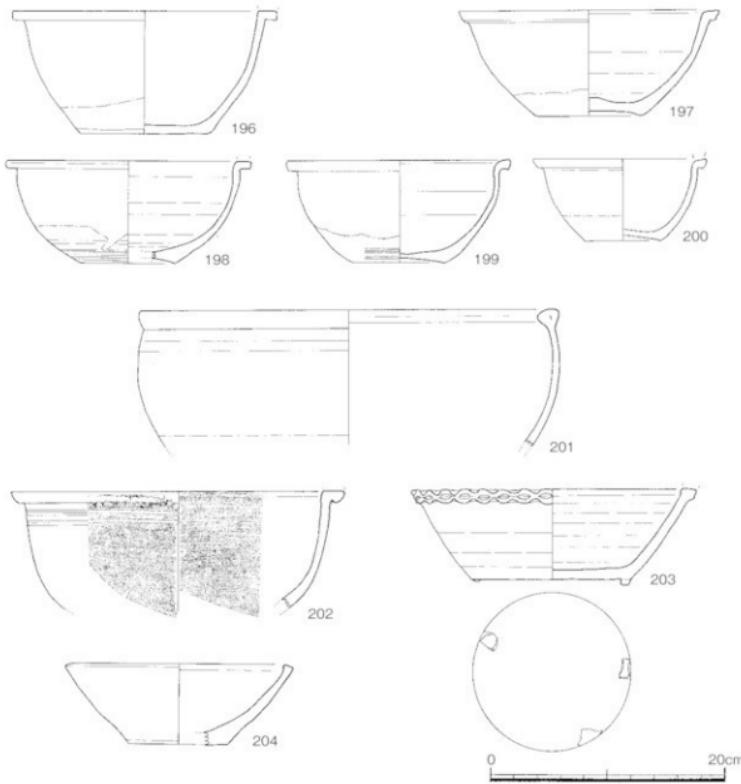
第238図 陶器18 鍋・釜類



第239図 陶器19 片口



第240図 陶器20 鉢



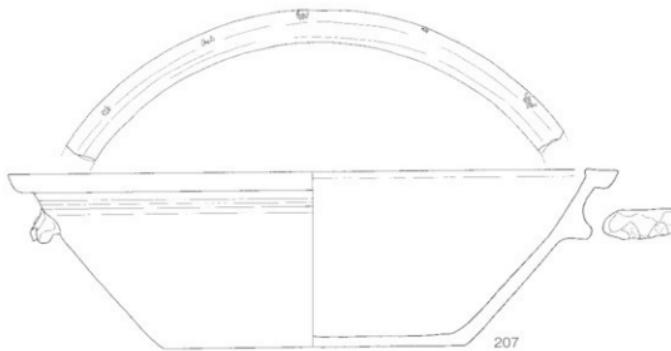
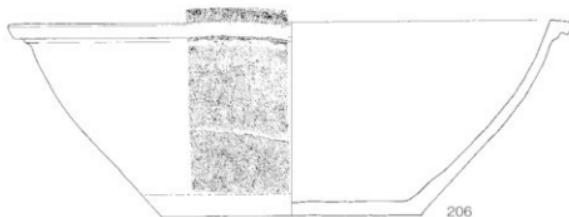
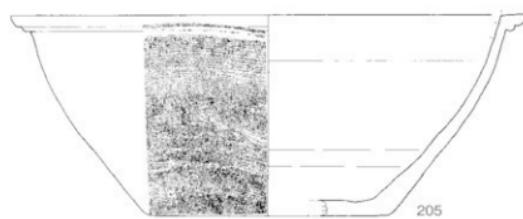
第241図 陶器21 鉢

鉢 (第240~242図)

190~207は鉢である。こね鉢としての用途が考えられる。産地は薩摩焼の苗代川系である。190・191は胴部に注口がつくものである。192~195は口径と底径の差が小さいものである。口縁部は断面が「L」字状もしくは三角形を呈し、コマ目が残るもののが見られる。内外面はヘラ状工具による横筋が入る。口唇部と底面は釉が拭き取られて無釉となっている。

196~202は胴部がやや丸みを帯びるもので、釉は内面と外面胴部下位までかかる。器面調整はヘラ状工具によるもので、横筋が観察される。203は、口縁部端部をつまんで装飾している。外底面には、焼成時製品同士の熔着を防ぐために挟まれた平コマが残っている。204は鉢に分類したが、用途は不明である。外面にのみ雜に鉄釉がかかる。

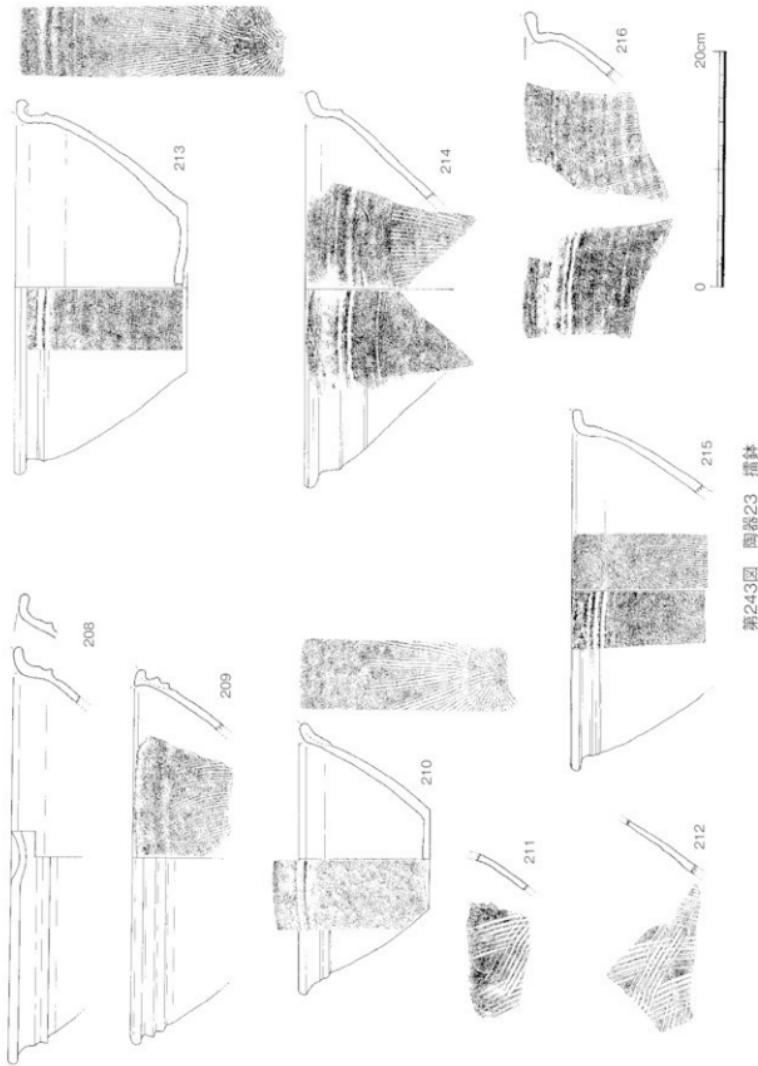
205~207は大形の鉢である。207は把手状の突起が2か所つくものである。口唇部に貝目が残る。



第242図 陶器22 鉢

陶器觀察表6

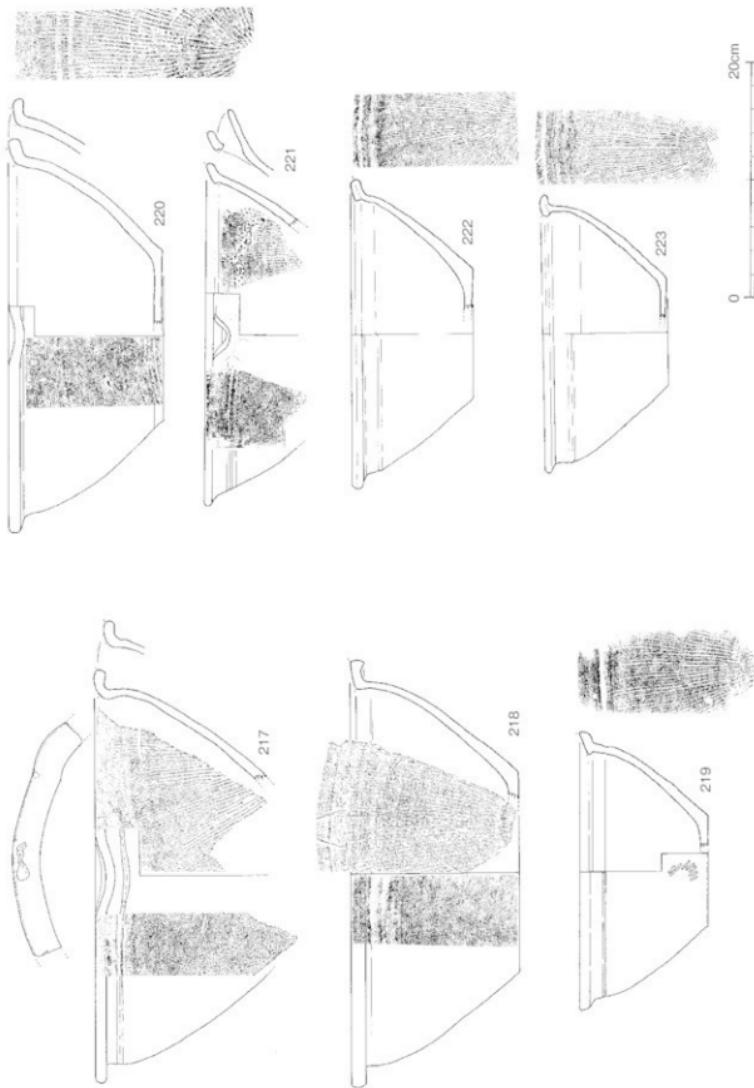
種類 番号	開拓 番号	種別	器種	分類	產地	出土区	法量(cm)			胎土の 色	釉業の種類 色	施釉部	時期	備 考
							口径	底径	高さ					
143	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	3.6	5.2	2.4	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
144	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	4.0	6.4	3.4	こぶち	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
145	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	5.2	7.4	3.1	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
146	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	5.1	7.5	3.2	こぶち	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
147	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	5.3	9.5	4.1	こぶち	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
148	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	4.7	6.7	3.8	こぶち	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
149	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	6.1	8.7	3.5	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代		
150	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	6.2	10.7	3.8	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代	上面に重ね焼きの跡有り	
151	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	7.2	10.6	3.6	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代	上面に重ね焼きの跡有り	
152	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	6.0	8.0	—	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半~19世紀代	上面に重ね焼き、三条の文様有り	
153	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	4.0	5.6	—	赤褐色	铁釉・墨渋	上部施釉	10世紀後半~19世紀代	上面に墨渋の文様有り	
154	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩原代川系	G 地点	6.7	—	—	黄白色	透明白	上部施釉	10世紀後半~19世紀代	上面に透明白	
155	陶器	蓋	急須	薩摩門田式	G 地点	6.4	—	1.8	暗褐色	铁釉	上部施釉	10世紀後半		
156	陶器	蓋	急須	薩摩原代川系	G 地点	14.2	16.9	4.6	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀代	口部にスス付属	
157	陶器	蓋	急須	薩摩原代川系	G 地点	11.0	17.2	4.9	赤褐色	铁釉	上部施釉	10世紀代		
158	陶器	蓋	急須	薩摩原代川系	G 地点	11.2	14.6	5.2	暗褐色	铁釉	上部施釉	10世紀代		
159	陶器	蓋	急須	薩摩原代川系	G 地点	4.8	8.8	2.4	こぶち	铁釉	上部施釉	10世紀代		
種類 番号	開拓 番号	種別	分類	器種	產地	出土区	法量(cm)			胎土の 色	釉業の種類 色	施釉部	時期	備 考
							口径	底径	高さ					
160	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	11.0	14.4	2.0	浅白色	透明釉	上部施釉	10世紀代	直徑は上位	
161	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	10.4	13.0	2.0	浅白色	透明釉	上部施釉	10世紀代	直徑は上位	
162	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	12.4	2.0	3.7	黄白色	透明白	内面のみ施釉	10世紀代	直徑は上位	
163	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	14.0	4.6	4.8	黄白色	(内) 透明釉	内面のみ施釉	10世紀代	直徑は上位	
164	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	16.2	4.1	4.2	黄白色	透明釉	つまみ部・口縁・内面 中央は無	10世紀代	直徑はつまみ径	
165	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	18.0	—	—	こぶち	透明釉	口部透明釉	10世紀代	飛び跡	
166	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	20.6	—	—	こぶち	透明釉	腰部・底部無釉	10世紀代		
167	陶器	蓋	網蓋	関西系	G 地点	—	—	—	赤褐色	透明釉	腰部・底部無釉	10世紀代	飛び跡	
168	陶器	蓋	網蓋	薩摩原代川系	G 地点	14.0	—	—	赤褐色	透明釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代		
169	陶器	蓋	網蓋	薩摩原代川系	G 地点	13.0	—	—	赤褐色	透明釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代		
170	陶器	蓋	網蓋	薩摩原代川系	G 地点	12.8	—	—	浅白色	透明釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	飛び跡	
171	陶器	蓋	羽口	薩摩原代川系	G 地点	2.3	3.6	7.0	赤褐色	铁釉	羽口部・底部無釉	10世紀代		
172	陶器	蓋	羽口	薩摩原代川系	G 地点	15.4	—	—	赤褐色	铁釉	羽口部・底部無釉	10世紀代	画面にスス付属	
173	陶器	蓋	羽口	薩摩原代川系	G 地点	9.6	6.0	7.7	褐色	铁釉	羽口部・底部・腰部無釉	10世紀代		
174	陶器	蓋	羽口	?	G 地点	—	—	—	褐色	铁釉	羽口部・底部・腰部無釉	10世紀代	羽口部下からスス付属	
175	陶器	蓋	羽口	薩摩原代川系	G 地点	—	—	—	褐色	铁釉	羽口部・底部・腰部無釉	10世紀代	三足	
176	陶器	蓋	羽口	山茶窓	薩摩原代川系	G 地点	16.0	—	—	灰色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	片口有り
177	陶器	蓋	羽口	山茶窓	薩摩原代川系	G 地点	14.0	—	—	こぶち	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	片口有り
178	陶器	蓋	羽口	山茶窓	薩摩原代川系	G 地点	13.6	—	—	赤褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	
179	陶器	蓋	羽口	山茶窓	薩摩原代川系	G 地点	14.6	—	—	赤褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	
180	陶器	蓋	羽口	山茶窓	薩摩原代川系	G 地点	18.0	—	—	褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	
181	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	24.9	15.1	12.6	赤褐色	铁釉	口部無釉	10世紀代	外表面に目印	
182	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	24.9	13.0	12.1	赤褐色	铁釉	外表面無釉・口片	10世紀代		
183	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	25.2	—	—	三瓣形	铁釉	腰部無釉	10世紀代		
184	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	16.2	8.0	8.5	某褐色	铁釉	口部無釉	10世紀代	外表面に目印	
185	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	19.2	—	—	某褐色	铁釉	口部無釉	10世紀代	内面に同心円状のタタキ目	
186	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	15.4	—	—	反瓣形	铁釉	口部無釉	10世紀代		
187	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	—	—	—	某褐色	铁釉	口部無釉	10世紀代		
188	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	—	—	—	こぶち	铁釉	口部無釉	10世紀代		
189	陶器	鉢	口片	薩摩原代川系	G 地点	—	—	—	明褐色	铁釉	口部無釉	10世紀代		
190	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	23.0	—	—	赤褐色	铁釉	口部・外表面無釉	10世紀代	口口有り		
191	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	14.4	—	—	赤褐色	铁釉	口部・外表面無釉	10世紀代	口口有り		
192	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	24.9	16.1	9.7	赤褐色	铁釉	腰部・底部・外表面無釉	10世紀代	口部底・コマ目 側面に黒点有り		
193	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	23.8	17.9	10.4	赤褐色	铁釉	口部・外表面無釉	10世紀代			
194	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	21.3	14.8	9.8	赤褐色	铁釉	口部・外表面無釉	10世紀代	外表面にコマ目		
195	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	24.1	15.5	9.5	赤褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	内面に3ホールの質物付属		
196	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	22.6	10.8	10.5	赤褐色	铁釉	腰部・底部無釉	10世紀代			
197	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	22.2	9.2	9.0	某褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
198	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	21.0	8.0	8.6	こぶち	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
199	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	19.2	7.9	8.6	明赤褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
200	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	14.6	6.4	6.9	某褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
201	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	31.6	—	—	三瓣形	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代	調整不直		
202	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	29.2	—	—	某褐色	铁釉	口部無釉	10世紀代			
203	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	24.3	13.6	8.2	こぶち	铁釉	口部・外表面無釉	10世紀代	口部部装飾 外表面コマ目		
204	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	14.6	6.4	5.1	赤褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
205	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	44.0	19.9	16.1	褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
206	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	45.0	22.0	16.5	褐色	铁釉	口部・腰部・底部無釉	10世紀代			
207	陶器	鉢	薩摩原代川系	G 地点	52.0	25.4	15.0	赤褐色	铁釉	腰部無釉	10世紀代	形状不直 口部底・コマ目		



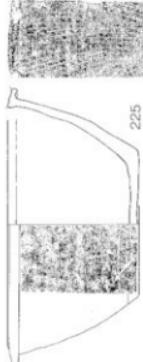
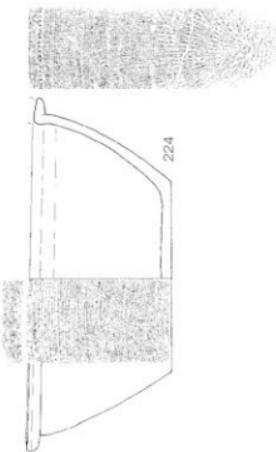
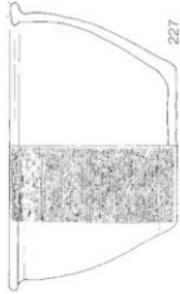
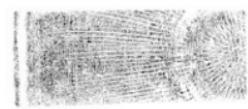
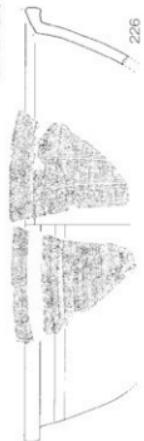
第243図 陶器23 指鉢

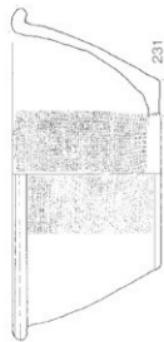
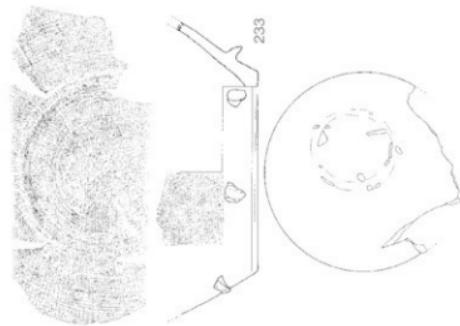
20cm
0

第244図 陶器24 滅鉢

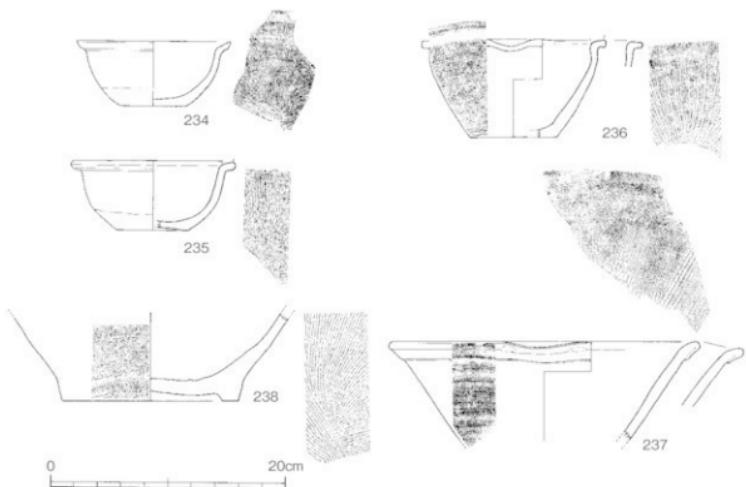


第245圖 陶器25 磚鉢





第246図 陶器26 滝林



第247図 陶器27 擂鉢

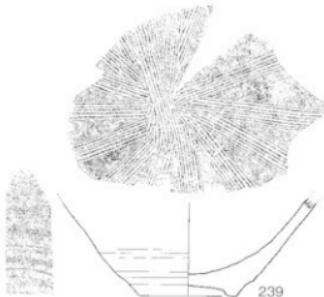
擂鉢 (第243~247図)

208~239は擂鉢である。208~236は薩摩焼の苗代川系で、208~216は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、2条の低い帯を巡らせるものである。擂り目は、211・212を除き細くシャープで、単位ごとの間隔があく。擂り目の上端は余白を残す。釉は口唇部を除き、全面に施釉される。211・212は17世紀代の初期薩摩焼である。胎土が層状を呈し、器壁は非常に薄く、釉も黄緑色の灰釉が薄くかかる。17世紀初めの串本野窯の製品である可能性の考えられる資料である。

217~219は口縁部を折り返して肥厚させるもので、帯が退化して浅い沈線となる。221~223は口縁部を外側に折り返したあと、さらに内側に折り返して丸くおさめるものである。両タイプとも擂り目は細くシャープで密に入り、上端は口縁部まで達する。釉は口唇部を除き全面に施釉される。219は胴部下位に具目が残る。

224~231は、口縁部が「L」字状を呈する。擂り目は細くシャープで目も粗いが、単位間は詰まっている。上端は口縁部まで延び、擂り目の下に横筋が入る。釉は口唇部と外底面は拭き取られる。232・233は外面胴部下位に円錐状の突起がつく。

234~236は小形の擂鉢である。237~239は肥前系の擂鉢である。237はタタキ成形でつくられるもので、口縁部先端を外側に折り返し丸くおさめる。幅広い単位のシャープで、粗い擂り目が、口縁部下位に余白をあけて入る。238は高台付の擂鉢である。置付から高台内底は露胎する。239は底部である。太く粗い擂り目が、余白を残して入る。胎土は緻密である。



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239



239

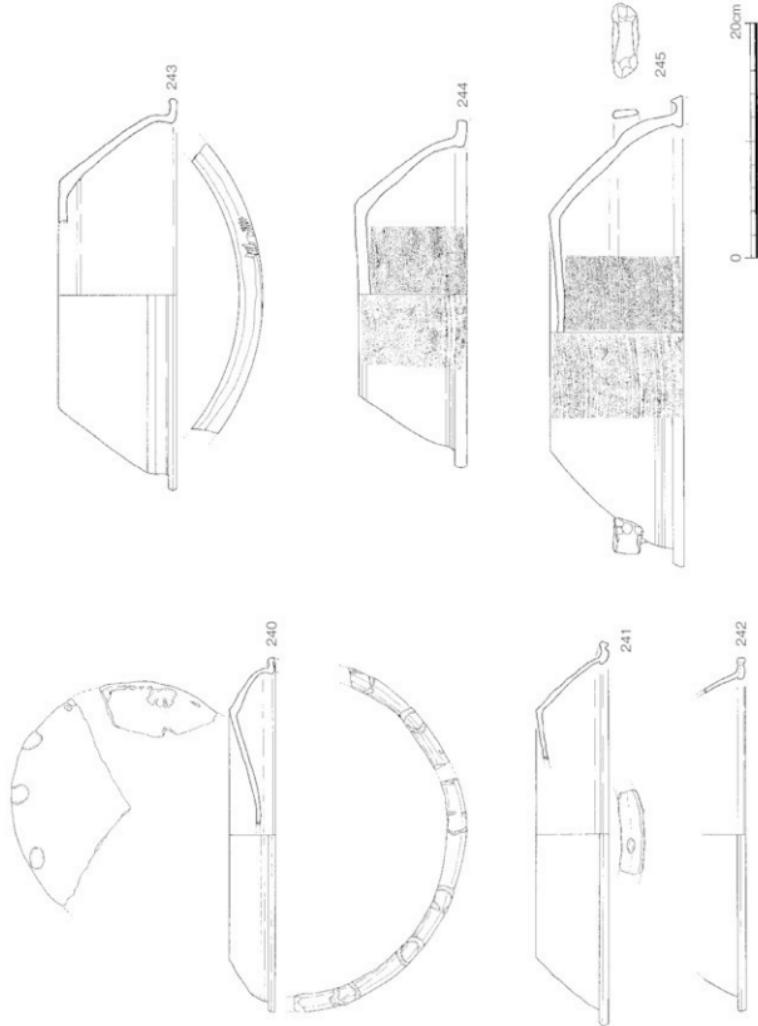


239

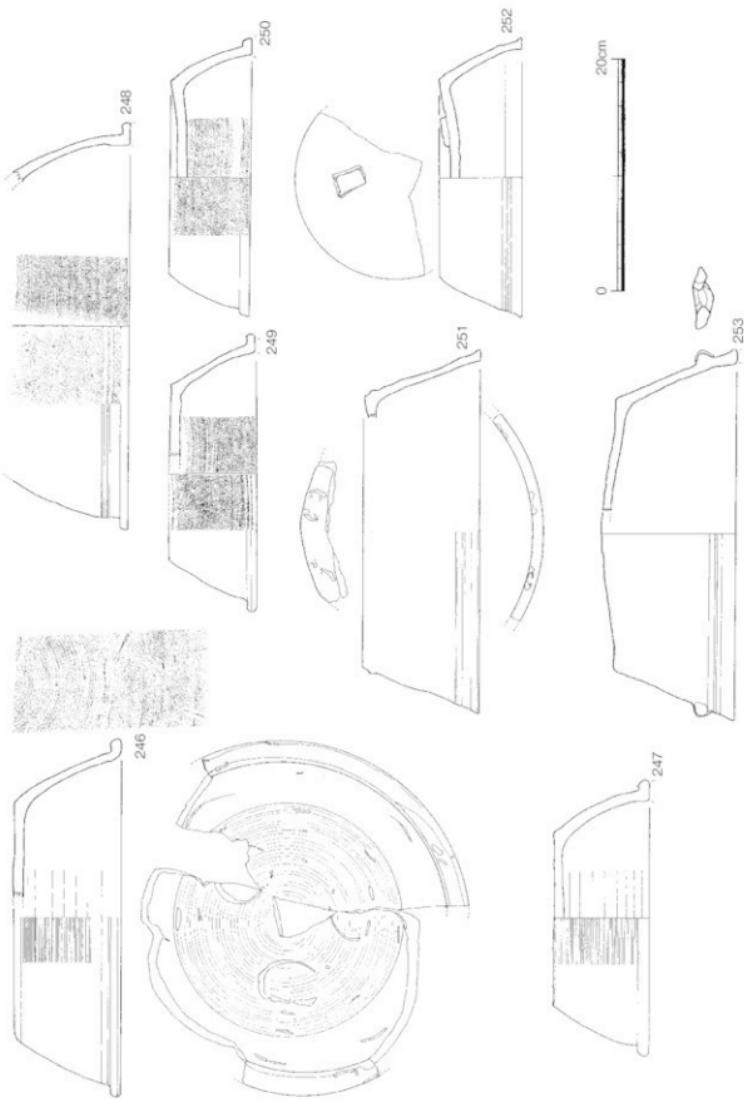


239

第248図 陶器28 蓋類



第249図 陶器²⁹ 蓋類



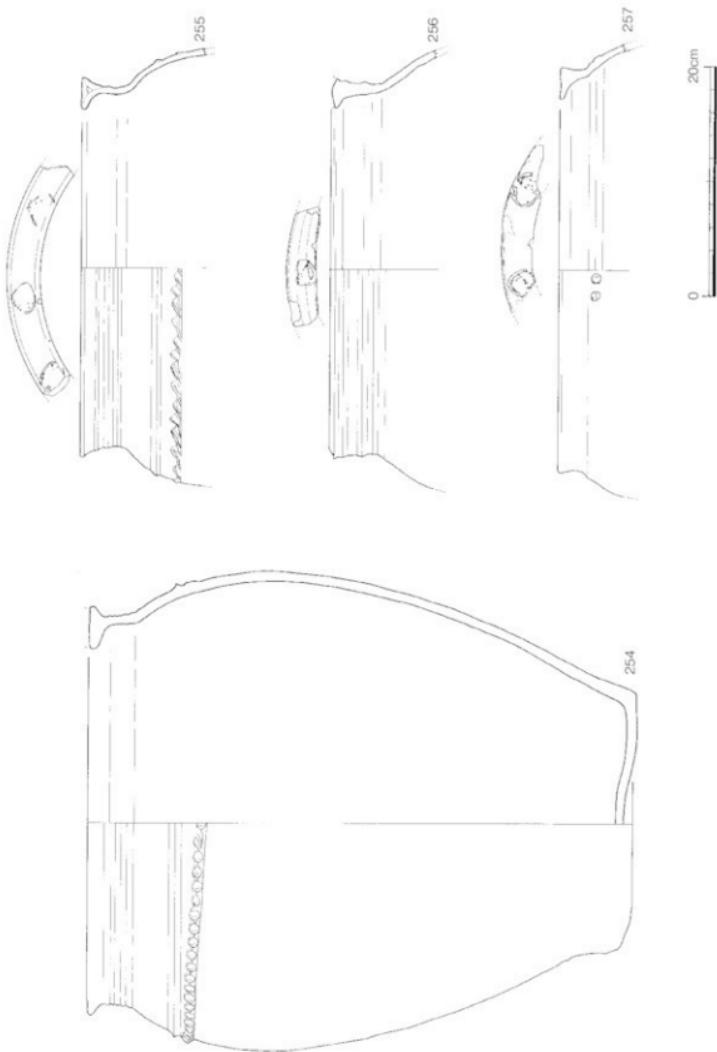
蓋（第248・249図）

240~253は甕・壺に被せて用いる蓋である。薩摩焼苗代川系のものである。240~242は口唇部の外側が構縁状を呈するものである。器壁は非常に薄く、胎土は層状となっている。釉は薄い鉄釉がかかり、口唇部は釉剥ぎされる。また、口唇部及び底部には貝目が残る。243~245は口縁部が「L」字状を呈するもので、釉は鉄釉が口唇部を除きかけられる。内外面はヘラ状工具による横筋が残る。245は把手が2か所つく。246~250は口径と底径の差が小さく、口縁部が「L」字状を呈するものである。器面調整はヘラ状工具で行われ、内外面とも横筋が観察される。釉は鉄釉がかかり、口唇部と外底面は拭き取られる。246は内底面に貝目が残る。251~253は口縁部は屈曲せず、まっすぐにならびるもので、外面口縁部下位には2条の浅い沈線が廻る。釉は鉄釉が口唇部と外底面以外にかかる。251は口縁部と上面に貝目が残る。252は上面にコマ目が熔着する。253は把手状のものが2か所観察される。

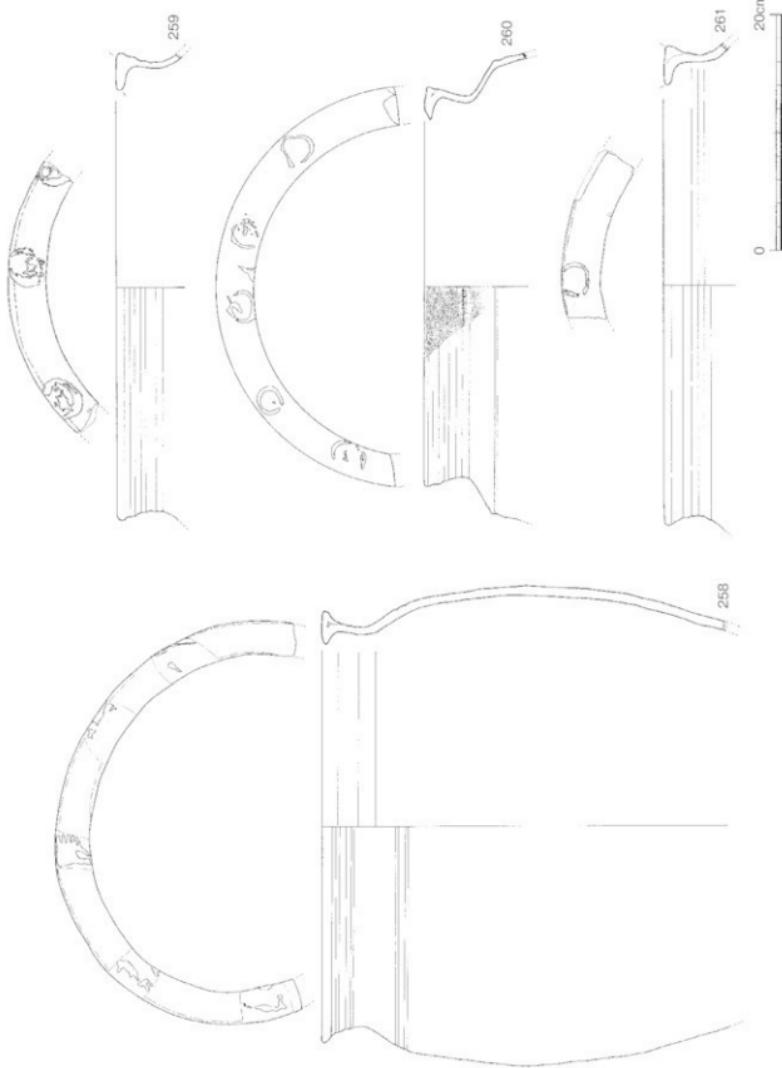
陶器観察表7

番号	種類	種類	分類	特徴	場所	出土品	直徑 (cm)				地質	胎土の 性質	釉薬の種類	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	高さ	色						
第243回	208	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	36.2	—	—	褐色	—	—	—	—	鉄釉か?	口縁部無釉	10世紀代	
	209	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	36.2	—	—	褐色	—	—	—	—	鉄釉か?	口縁部無釉	10世紀代	口縁部に貝目
	210	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	23.1	8.9	15.1	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉か?	口縁部無釉	12世紀代	
	211	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	—	—	—	三重釉	—	—	—	—	反釉	—	17世紀前半	
	212	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	—	—	—	三重釉	—	—	—	—	反釉	—	17世紀前半	
	213	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	31.4	14.0	14.7	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	214	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	33.8	—	—	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	215	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	30.6	—	—	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	216	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	—	—	—	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	217	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	35.0	—	—	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	口縁部に貝目
第244回	218	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	36.2	17.0	14.3	こい	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	219	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	23.6	9.4	10.9	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	腹部に貝目
	220	陶器	鉢	下リ鉢 薩摩苗代川系 G地点	33.6	14.4	13.0	明赤褐	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	221	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	39.2	—	—	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	222	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	25.6	11.0	10.3	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	223	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	23.6	9.2	10.6	こい	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	224	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	29.8	16.1	12.4	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	225	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	23.4	12.4	11.2	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・腹部無釉	10世紀代	
	226	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	36.8	—	—	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	227	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	24.6	13.4	14.3	明赤褐	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
第245回	228	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	23.8	13.2	12.3	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	腹面に突出有り
	229	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	27.4	—	—	こい	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	230	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	31.2	15.6	13.6	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・腹面無釉	10世紀代	
	231	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	26.6	12.0	12.7	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・腹面無釉	10世紀代	
	232	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	—	17.0	—	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	233	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	—	17.0	—	こい	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	腹面に突出有り
	234	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	13.1	5.6	5.5	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	腹面・正面無釉	10世紀代	
	235	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	13.6	6.0	5.9	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・腹面無釉	10世紀代	
	236	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	15.6	7.4	8.4	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	237	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	26.6	—	—	こい	—	—	—	—	鉄釉	裏付・正面無釉	10世紀代	タタキ成形
第246回	238	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	—	15.0	—	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	裏付・正面無釉	10世紀代	
	239	陶器	鉢	下リ鉒 薩摩苗代川系 G地点	—	8.2	—	こい	—	—	—	—	鉄釉	背面無釉	—	1500~1600年代
	240	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	30.2	21.5	3.9	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	17世紀前半	上面に貝目	
	241	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	32.4	21.0	6.2	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	17世紀前半	口縁部に貝目
	242	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	30.0	—	—	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	17世紀前半	
	243	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	33.2	19.0	10.1	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	17世紀前半	口縁部に貝目
	244	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	29.2	16.2	9.2	こい	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・正面無釉	10世紀代	
	245	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	40.0	20.2	11.4	三重釉	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・正面無釉	10世紀代	把手2か所有り
	246	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	19.8	31.0	9.1	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・正面無釉	10世紀代	見込みに貝目
	247	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	25.8	15.0	8.2	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
第248回	248	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	17.5	—	—	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	
	249	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	24.0	15.0	7.5	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・正面無釉	10世紀代	
	250	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	24.0	16.0	6.9	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・正面無釉	10世紀代	
	251	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	31.9	17.0	10.7	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	17世紀後半~18世紀代	上面に貝目
	252	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	24.0	17.0	7.2	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部無釉	10世紀代	上面にコマ目
第249回	253	陶器	蓋	薩摩苗代川系 G地点	31.8	16.0	11.5	赤褐色	—	—	—	—	鉄釉	口縁部・正面無釉	10世紀代	

第250図 陶器30 瓢類



第251図 陶器31 橢類



陶器観察表8

検証番号	規範番号	種別	分類	器種	埋地	出土区	法量(cm)			胎土の種類	施業の種類	施業色	施業回数	時期	備考
							口縁	底径	高さ						
第250 254 255 256 257	254	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	G 地点	33.4	22.2	48.1	—	鉄輪	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
	255	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	23.0	—	—	—	鉄輪	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
	256	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	33.4	—	—	—	明赤褐色	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
第251 258 259 260 261	257	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	35.2	—	—	—	明赤褐色	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
	258	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	36.6	—	—	—	明赤褐色	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
	259	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	36.8	—	—	—	明赤褐色	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
	260	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	34.0	—	—	—	明赤褐色	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	
	261	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G 地点	40.4	—	—	—	明赤褐色	□普通無輪	17世紀後半～18世紀代	□縁部に貝目	

発掘 (第250~256図)

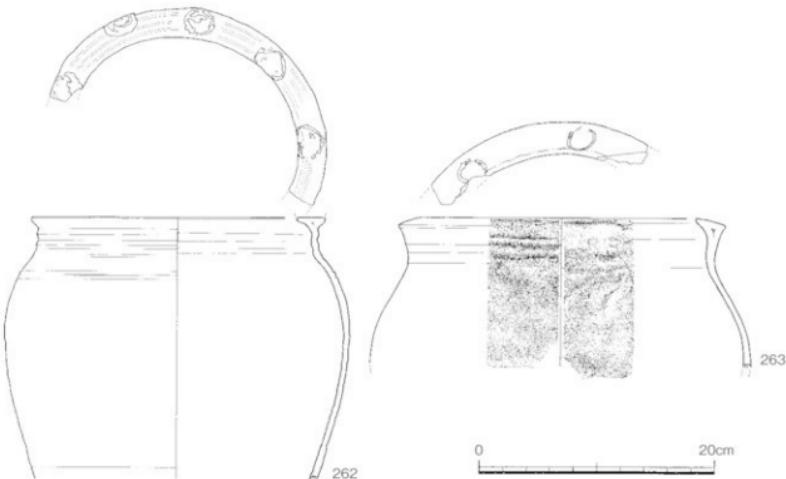
254~277は壺である。277以外は薩摩焼苗代川系のものである。254~261は口縁部が断面三角形を呈するものである。肩部に縄目突帯が付くものと付かないものがある。また254を除き、口唇部には貝目が残る。器壁は薄く、器壁調整は釉が厚くかかるため判別不能であるが、ヘラ状工具による強い横筋痕は見られる。

264~266は口縁部が「T」字状を呈するものである。内外面に、ヘラ状工具による横筋が観察される。

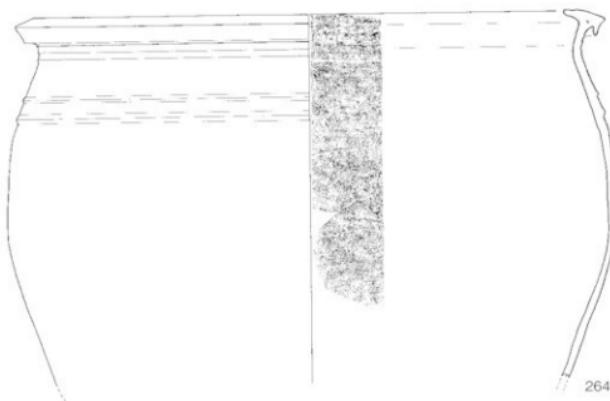
267~272は厚い器壁に、緑褐色の釉が厚くかかるものである。口唇部にはヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。

273・274は外面に筆の書き落とし文が描かれたものである。

275・276は把手付壺である。277は器壁が厚手で、光沢の強い褐釉が内外面にかかるもので、外底面には、貝目と砂粒が観察される。



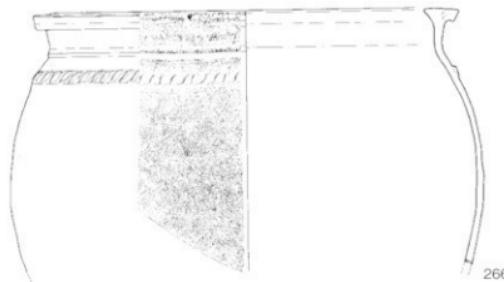
第252図 陶器32 壺類



264



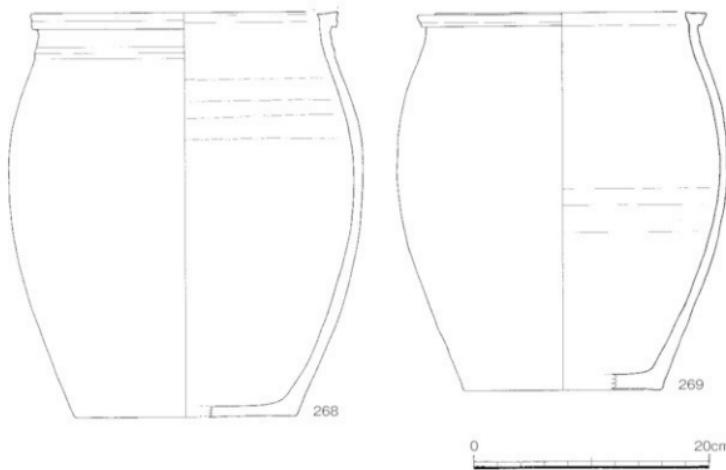
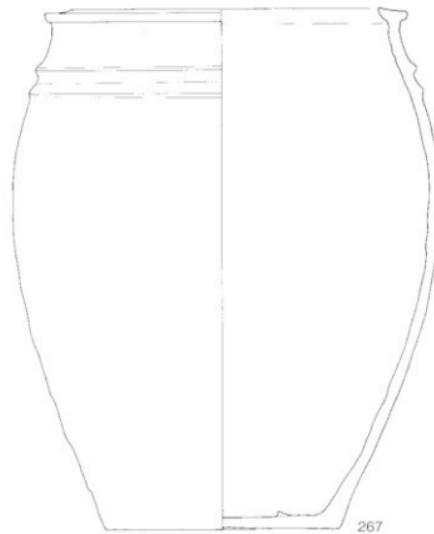
265



266

0 20cm

第253図 陶器33 豆類



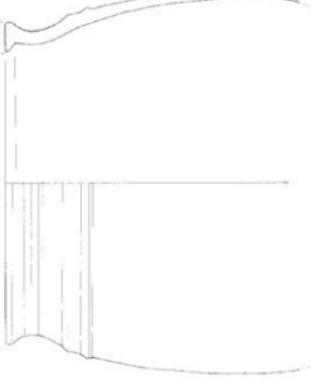
0 20cm

第254図 陶器34 豐類

20cm
0

第255図 陶器35種類

272



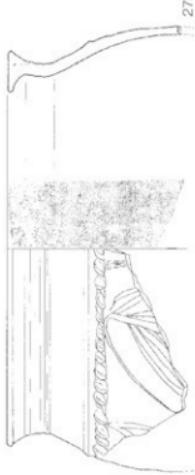
271



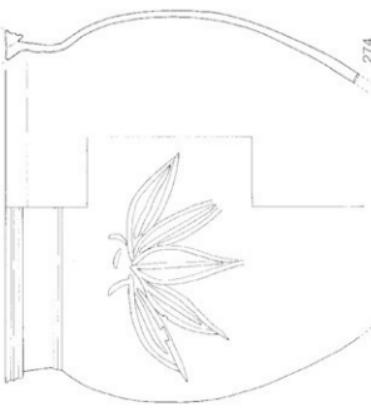
270

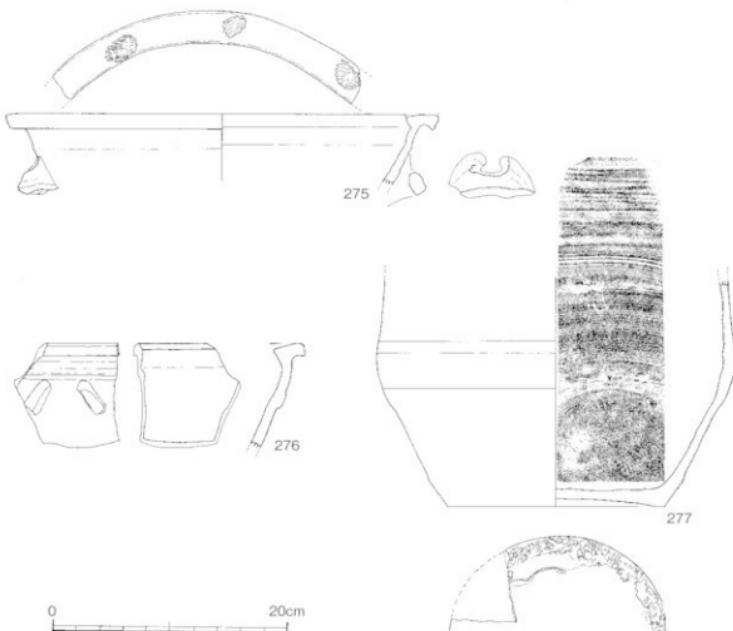


273



274





第256図 陶器36 瓢類



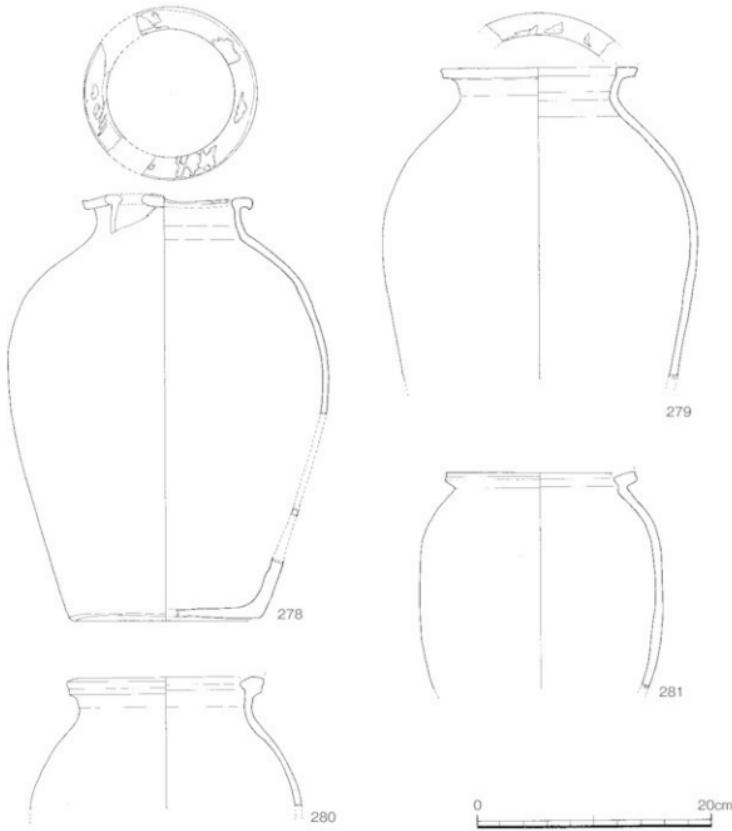
陶器観察表9

件名	規範	種類	分類	器種	產地	出土区	法量 (cm)		胎土の 種類	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考	
							口径	底径						
262	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	25.0	—	—	黑褐色	鉄輪	口部延無釉	17世紀後半～18世紀代	口部に貝口
263	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	23.0	—	—	灰褐色	鉄輪	口部延無釉	17世紀後半～18世紀代	口部に貝口
264	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	46.8	—	—	黑褐色	鉄輪	口部延無釉	18世紀代	
265	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	43.0	—	—	黑褐色	鉄輪	口部延無釉	18世紀代	
266	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	36.0	—	—	赤褐色	鉄輪	口部延無釉	18世紀代	
267	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	30.6	19.6	44.4	赤褐色	鉄輪	口部・外底面無釉	18世紀後半～19世紀代	
268	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	26.2	18.8	34.3	こいひ 赤褐色	鉄輪	口部・外底面無釉	18世紀後半～19世紀代	
269	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	24.6	17.0	32.1	灰褐色	鉄輪	口部・外底面無釉	18世紀後半～19世紀代	
270	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	29.0	—	—	黑褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	
271	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	29.0	—	—	黑褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	
272	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	27.0	—	—	黑褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	
273	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	33.0	—	—	こいひ 赤褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	外面に焼き落とし文
274	陶器	甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	29.6	—	—	こいひ 赤褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	外面に焼き落とし文
275	陶器	手付甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	37.0	—	—	黒褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	口部に貝口
276	陶器	手付甕	甕	甕	薩摩造川系	G 地点	—	—	—	灰褐色	鉄輪	口部延無釉	19世紀代	口部に貝口
277	陶器	甕	甕	甕	石州	G 地点	—	18.6	—	こいひ 褐色	鉄輪	—	19世紀代	黒褐色 外底面に貝口・貝口

壺（第257～260図）

278～302は壺である。

278は17世紀後半の薩摩焼苗代川系の壺である。器壁は薄く、内面には同心円状のタタキ目が残り、口唇部にも貝目が残る。緑褐色の薄い釉が口唇部を除きかかる。280・281は口縁部が外側から内側に折り返されて丸くおさめられるものである。器壁は厚く、器面調整はヘラ状工具による横ナデである。282は大形の四耳壺である。器壁は厚い。タタキ成形の後、内外面をヘラ状工具でナデしており、横筋が観察される。283は内面口縁部下位に幅2cmほどの釉剥ぎが見られる。284・285も大形の壺である。286・287は長胴の壺である。内外面とも褐釉が厚くかかるが、ヘラ状工具による



第257図 陶器37 壺類

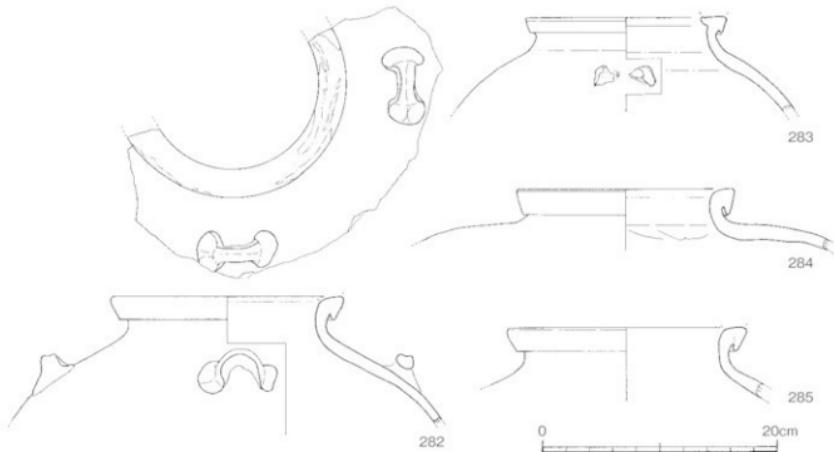
ナデ調整の横筋が、わずかに観察できる。288は貝目の残る底部である。289・290は小形で長胴の壺である。内面はヘラ状工具による横筋が強く残る。291・292は小形の壺である。291は口唇部にも底部にも釉がかかる。293は肥前の壺である。口唇部が丸くつくられ、光沢の強い褐釉が口唇部も含めかけられる。内面には横方向の調整痕が観察される。

294~297はやや小形の壺で、口縁部先端が丸くつくられるものである。294・295は、器壁が非常に薄く、内面にはタタキ成形でつくられた際の痕跡が同心円状に残る。縦耳が2か所付く。

298・299は備前焼の壺である。焼き締めて、外面に横方向の工具痕が残る。300は肥前もしくは丹波かと思われる壺である。301・302は琉球の荒焼である。

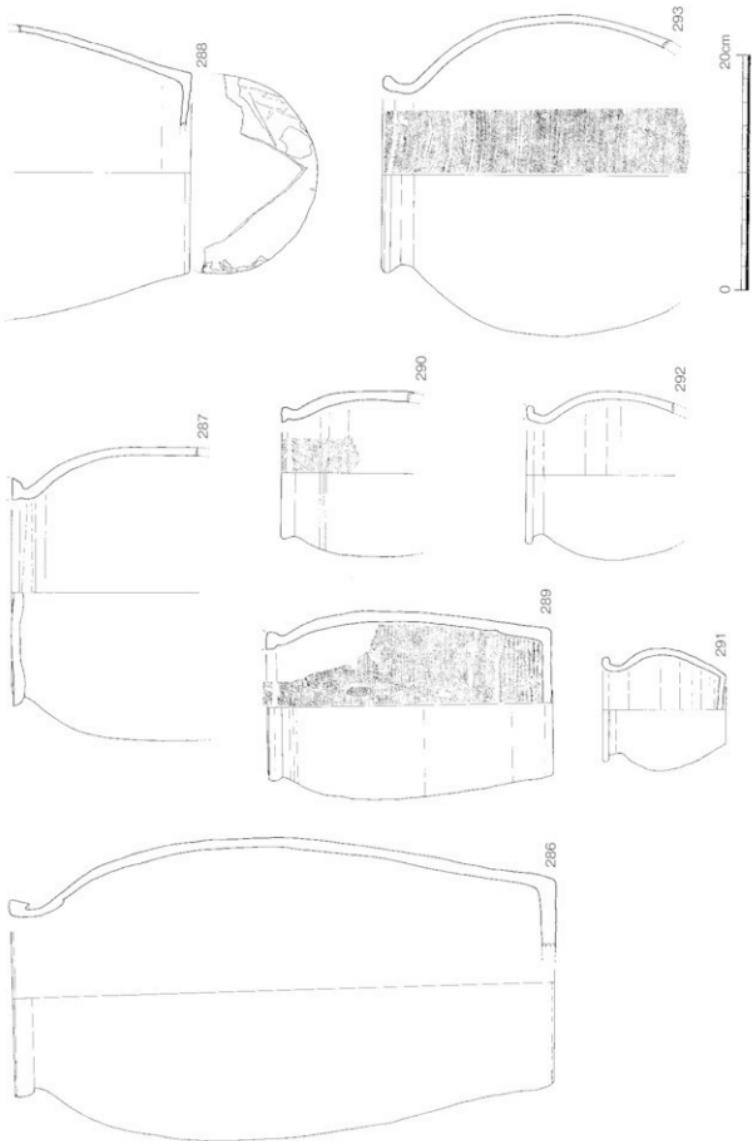
仏具（第261図）

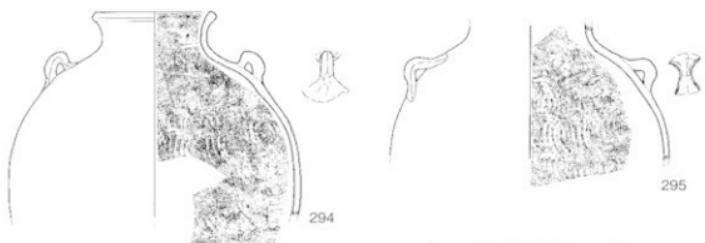
303~317は仏具である。303は薩摩焼龍門司系のものである。見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。304~309は香炉である。304~306は内野山系のものである。304・305は外面には腰部まで胴線釉が、306は褐釉がかかる。307・308は肥前の陶胎染付である。307は胎土が褐釉で外面にも施釉されるが、308は胎土が灰色で疊付を除き施釉される。309は龍門司焼である。白化粧土に透明釉がかかる二彩手で、内面は無釉で、外面腰部まで施釉される。312・314~317は仏花器である。311・312・314・315は薩摩焼堅野系の白色陶胎である。311は獅子頭の耳が、312は象をかたどった耳が2か所つけられる。316・317は薩摩焼元立院系のものである。316は底部が非常に厚く、黒釉が厚くかかる。317も小形のものであるが、底部が厚い。



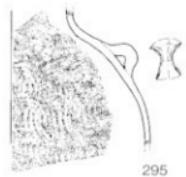
第258図 陶器38 壺類

第259図 商器39 蓋類

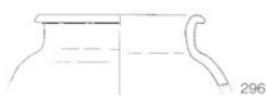




294



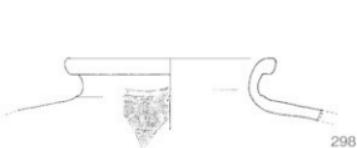
295



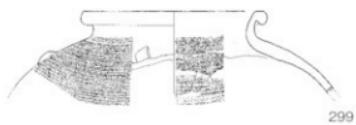
296



297



298



299

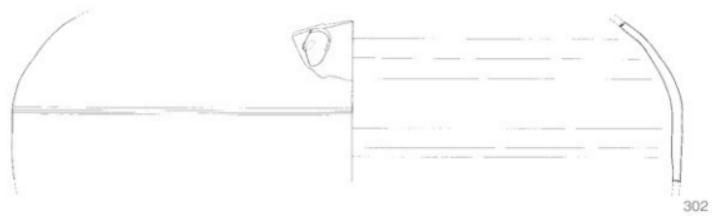


300



301

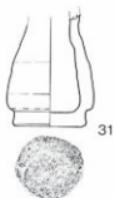
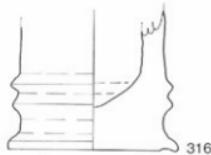
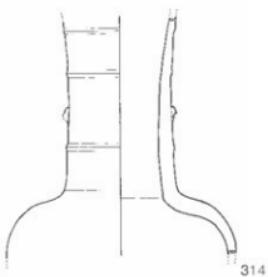
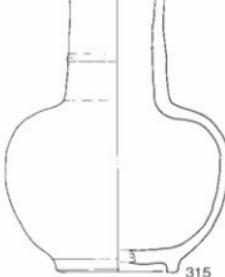
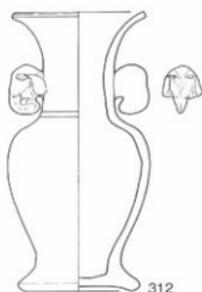
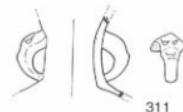
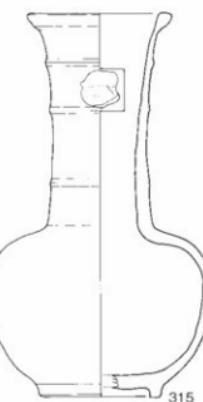
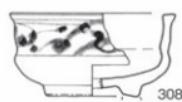
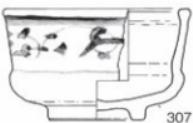
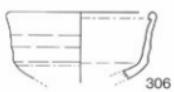
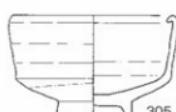
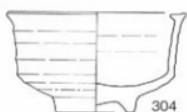
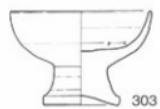
0 10cm



302

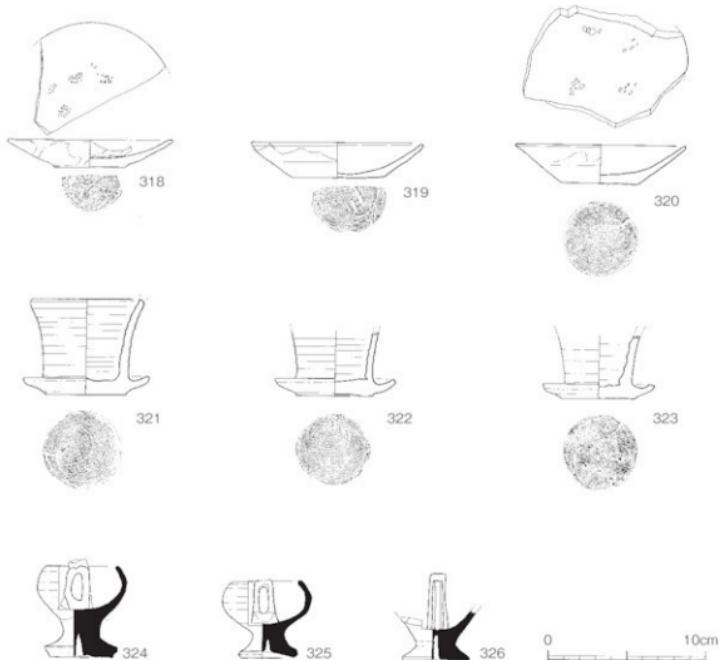
0 20cm

第260図 陶器40 壺類



0 10cm

第261図 陶器41 仏具



第262図 陶器42 灯明具

灯明具（第262図）

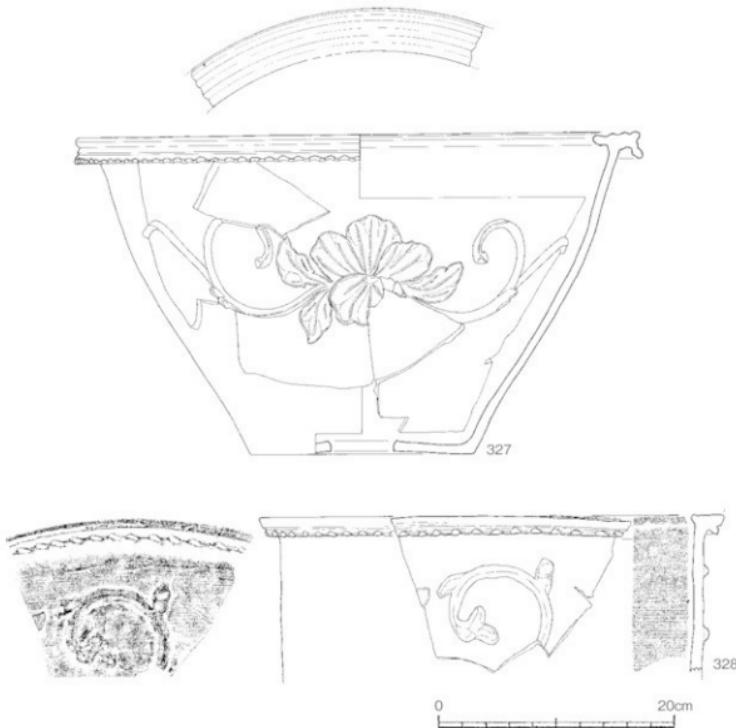
318～326は灯明具である。すべて薩摩焼である。318～320は灯明皿である。底部は糸切りで、318・320の見込みにはゴマ目が観察される。321～323は灯明皿受け台である。皿部外面から外底面を除き、掲軸がかけられる。324～326は内面の中央に芯を立てるたんころ形の秉燭である。脚台の中心には軸孔を有する。324・325は褐色の胎土に掲軸がかけられるもので、326は白色陶胎の白薩摩である。

陶器觀察表10

検証 番号	規範 番号	種類	分類	器形	產地	出土区	法量 (cm)			施主の種類 色 艶	施業の種類 色 艶	施釉部位	時期	備考		
							口径	底径	高さ							
第 257 回	278	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	14.3	15.7	36.2	反褐色	鉄輪	口部延無輪	17世紀後半	口部延・外底面に目印			
	279	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	17.2	—	—	褐色	鉄輪	口部延無輪	17世紀後半	口部延・目印			
	280	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	16.0	—	—	褐色	鉄輪	口部延無輪	18世紀代				
	281	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	15.0	—	—	赤褐色	鉄輪	口部延無輪	19世紀代				
	282	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	20.0	—	—	にじい 褐色	鉄輪	口部延無輪	18世紀代				
第 258 回	283	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	17.0	—	—	褐色	鉄輪	口部延・内側口縁部 下位無輪	18世紀代				
	284	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	18.6	—	—	黒褐色	鉄輪	—	18世紀代				
	285	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	20.0	—	—	にじい 赤褐色	鉄輪	口部延無輪	18世紀代				
	286	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	16.0	17.0	46.3	反褐色	鉄輪	口部延無輪 外底面試き取り	19世紀代				
	287	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	19.3	—	—	にじい 褐色	鉄輪	—	19世紀代				
第 259 回	288	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	—	17.0	—	黒褐色	鉄輪	—	19世紀代	外底面に目印			
	289	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	12.5	12.0	24.3	にじい 赤褐色	鉄輪	口部延無輪 外底面試き取り	19世紀代				
	290	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	11.0	—	—	黒褐色	鉄輪	口部延無輪	19世紀代				
	291	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	8.6	—	—	黒褐色	鉄輪	外底面試き取り	18世紀代	口部延・目印			
	292	陶器	東	縦摩崖式川系	G 地点	11.3	—	—	黒褐色	鉄輪	口部延無輪	18世紀代				
第 260 回	293	陶器	東	煎茶	G 地点	16.4	—	—	反褐色	鉄輪	—	18世紀代				
	294	陶器	東	小塩	縦摩崖式川系	8.0	—	—	反褐色	反輪	—	17世紀後半	内面に同心円状のタテ穴 縦耳一二透			
	295	陶器	東	小塩	縦摩崖式川系	G 地点	—	—	反褐色	反輪	—	17世紀後半	内面に同心円状のタテ穴 縦耳二透			
	296	陶器	東	小塩	縦摩崖式川系	G 地点	10.2	—	—	黒褐色	反輪	—	17世紀後半			
	297	陶器	東	小塩	縦摩崖式川系	G 地点	12.4	—	—	黒褐色	鉄輪か?	—	17世紀後半			
第 261 回	298	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	13.4	—	—	にじい 赤褐色	—	—	17世紀~18世紀代	四耳壺		
	299	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	11.4	—	—	にじい 赤褐色	—	—	17世紀~18世紀代	四耳壺		
	300	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	17.0	—	—	赤褐色	—	—	18世紀代か?	円底形の可能性有り		
	301	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	12.0	—	—	にじい 赤褐色	—	—	18世紀代か?	三耳壺 破残の危険性		
	302	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	—	—	—	にじい 赤褐色	—	—	18世紀代か?	三耳壺 破残の危険性		
第 262 回	303	陶器	仏具	仏教系	縦摩崖式川系	G 地点	9.0	4.8	6.1	にじい 褐色	鉄輪	脚部以下無輪	18世紀後半	見込みの骨の骨輪剥下		
	304	陶器	仏具	香炉	煎茶	G 地点	11.2	4.8	6.5	反褐色	銅鋸輪	口部延~腰部まで輪 輪	17世紀後半~18世紀前半			
	305	陶器	仏具	香炉	煎茶	G 地点	10.1	4.7	6.3	反褐色	銅鋸輪	口部延~腰部まで輪 輪	17世紀後半~18世紀前半			
	306	陶器	仏具	香炉	煎茶	G 地点	9.6	—	—	にじい 褐色	鉄輪	口部延~腰部まで輪 輪	17世紀後半~18世紀前半			
	307	陶器	仏具	香炉	香炉	G 地点	12.0	6.0	7.1	褐色	反輪	口部延~腰部まで輪 輪	18世紀前半	唐草文		
第 263 回	308	陶器	仏具	香炉	香炉	G 地点	10.6	6.0	5.3	褐色	反輪	口部延~腰部まで輪 輪	18世紀前半	唐草文		
	309	陶器	仏具	香炉	香炉	縦摩崖式川系	G 地点	—	5.2	—	反褐色	白化粘土に透 明釉	内面と腰部~高台内 部無輪	18世紀後半	二重手	
	310	陶器	仏具	香炉	香炉	縦摩崖式川系	G 地点	—	—	—	黃白色	透明白	—	18世紀代	豪物の把手	
	311	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	—	—	—	黃白色	透明白	—	18世紀代	豪物の把手		
	312	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	8.1	7.8	16.2	青白色	鉄輪	—	18世紀代	豪物の把手		
第 264 回	313	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	—	—	—	青白色	透明白	—	18世紀代	豪物の把手		
	314	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	—	—	—	青白色	透明白	—	18世紀代	豪物の把手		
	315	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	—	7.2	—	青白色	透明白	晩付口付鉄輪	18世紀代	豪物の把手		
	316	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	—	10.6	—	反褐色	鉄輪	外底面は無輪	18世紀代			
	317	陶器	仏具	心花路	縦摩崖式川系	G 地点	—	4.4	—	反褐色	鉄輪	外底面は無輪	18世紀代			
第 265 回	318	陶器	灯明具	灯明具	縦摩崖式川系	G 地点	10.4	4.3	1.8	赤褐色	鉄輪	内面のみ施輪	18世紀代	見込みにコマ目 外底面無り		
	319	陶器	灯明具	灯明具	縦摩崖式川系	G 地点	10.8	5.7	2.2	赤褐色	鉄輪	内面のみ施輪	18世紀代	外底面無り		
	320	陶器	灯明具	灯明具	縦摩崖式川系	G 地点	10.7	4.8	2.4	褐色	鉄輪	内面のみ施輪	18世紀代	見込みにコマ目 外底面無り		
	321	陶器	灯明具	灯明具	縦摩崖式川系	G 地点	7.2	5.0	6.1	にじい 褐色	鉄輪	腰付外縁と外底面 無輪	18世紀代	腰付外縁		
	322	陶器	灯明具	灯明具	縦摩崖式川系	G 地点	—	4.8	—	赤褐色	鉄輪	腰付外縁と外底面 無輪	18世紀代	腰付外縁		
第 266 回	323	陶器	灯明具	灯明具	縦摩崖式川系	G 地点	—	4.8	—	にじい 褐色	鉄輪	腰付外縁と外底面 無輪	18世紀代	腰付外縁		
	324	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	4.5	4.0	6.1	にじい 褐色	鉄輪	脚部以下無輪	18世紀代			
	325	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	4.0	4.6	4.9	にじい 褐色	鉄輪	脚部以下無輪	18世紀代			
	326	陶器	東	東	縦摩崖式川系	G 地点	4.2	—	—	黄白色	透明白	外底面無輪	18世紀代			

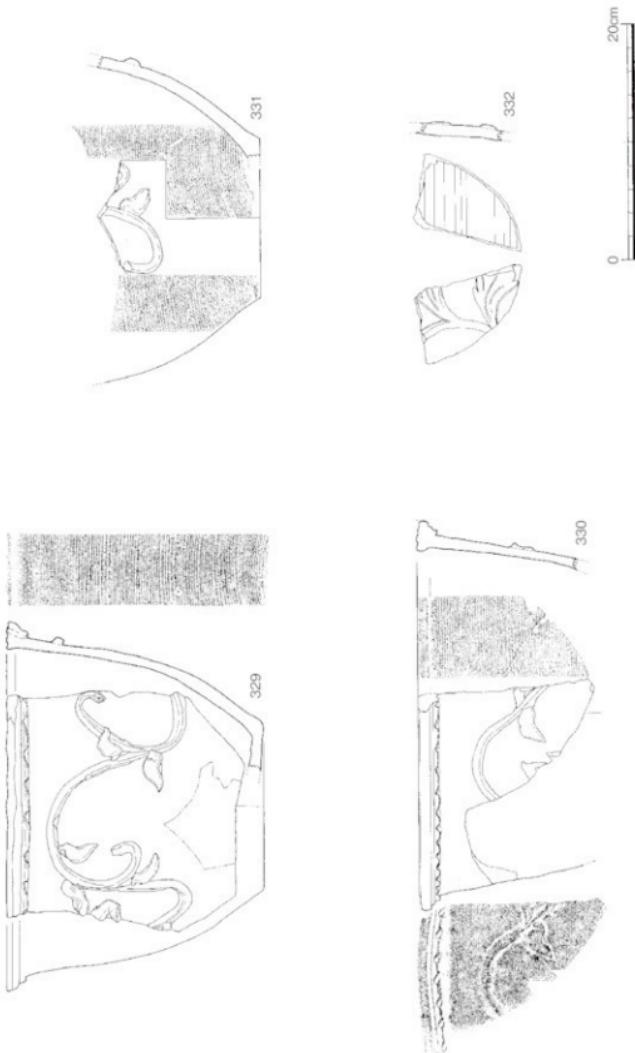
植木鉢（第263～269図）

327～350は植木鉢である。327～332は外面に貼り付け文の装飾が施されるものである。332を除き薩摩焼苗代川系のものである。327は焼き締めで、口縁部にも装飾が施される。外面には器面調整の痕跡である横筋が残る。328～331は内外面ともに褐釉がかかるもので、内外面の統制はヘラ状工具による横方向のナデである。口縁部下端は装飾が施される。332は琉球の荒焼である。胎土は赤褐色を呈し、焼き締めである。外面にヘラ工具による横筋は観察されない。333～335は口縁端部をつまんで装飾を施し、胴部中位に網目状の突帯を有するものである。内外面はヘラ状工具による横筋が観察される。336・338は底部が欠損しており、植木鉢かの判断は難しいが、口縁部に装飾が施される点や、内外面の器面調整等から植木鉢とした。337は内底面に輪状の痕跡が観察されるもので、植木鉢に転用できるように入れられたものと思われる。339～341はバケツ状の器形を呈する

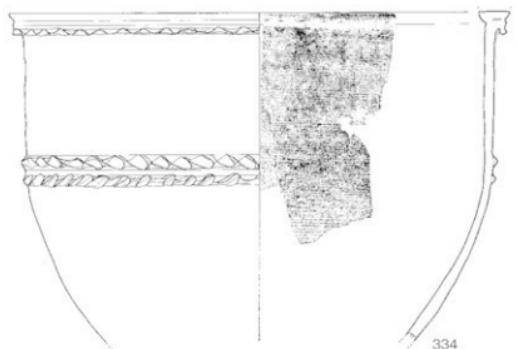
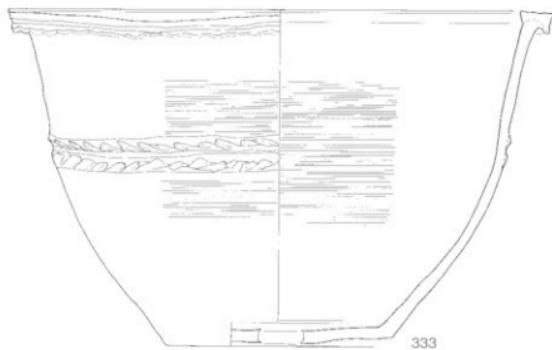


第263図 陶器43 植木鉢

第264図 陶器44 植木鉢

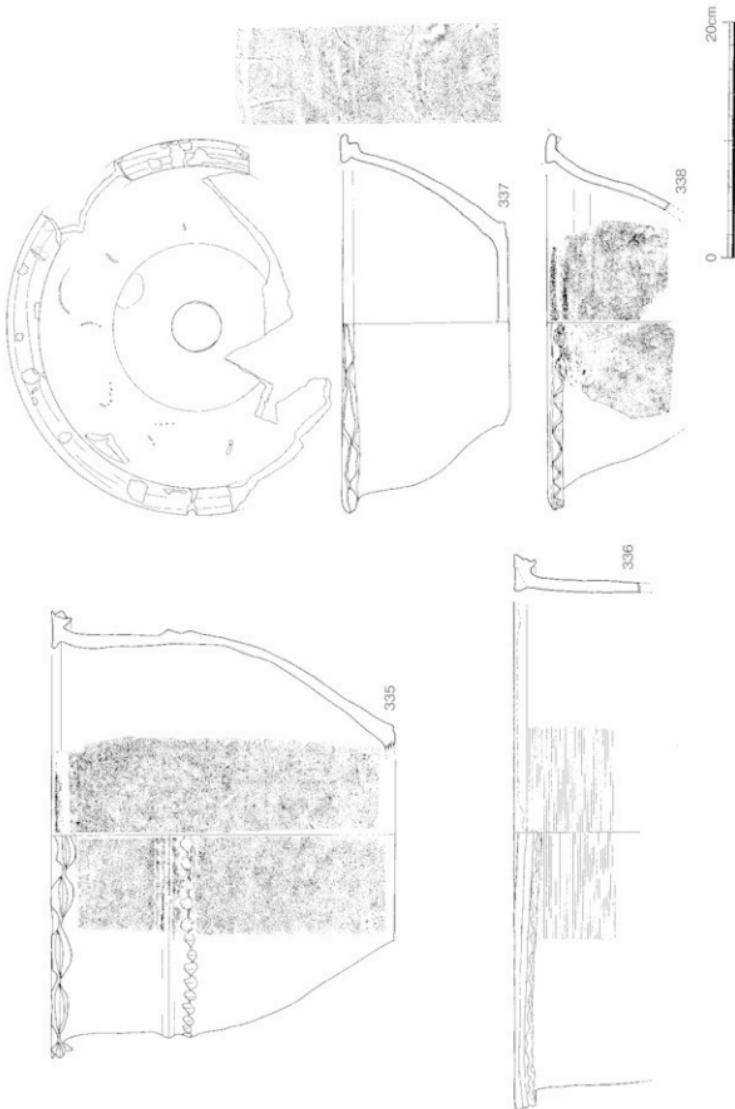


ものである。基本的に外面にのみ鉄釉が施釉され、内外面にはヘラ状工具による横筋が観察される。339・340は口縁端部をつまんで装飾を施すものである。341は底部が欠損しており、植木鉢の判断はつかないが、339・340との違いが口縁部の装飾の有無だけであるため植木鉢とした。342～344は一般的に「ラン鉢」と呼ばれるものである。底部は平底で、釉は基本的に外面にもかかる。345・346は底部に3足の脚部がつくと思われる植木鉢である。345は獅子頭の獸足である。347～349は福岡近辺の窯場のものと思われるものである。釉は口唇部から外面にかけて施釉される。347・348は高台を有するもので、3か所抉りが入れられる。348は掲釉の上から黒釉が流しきけられるものである。349は白化粧土の上から黒釉が流しきけられるものである。350は在地産のものと思われ、灰釉の上から絵付けが施される。高台の3か所に二連続した抉りが入れられる。



第265図 陶器45 植木鉢

第266図 陶器46 植木鉢



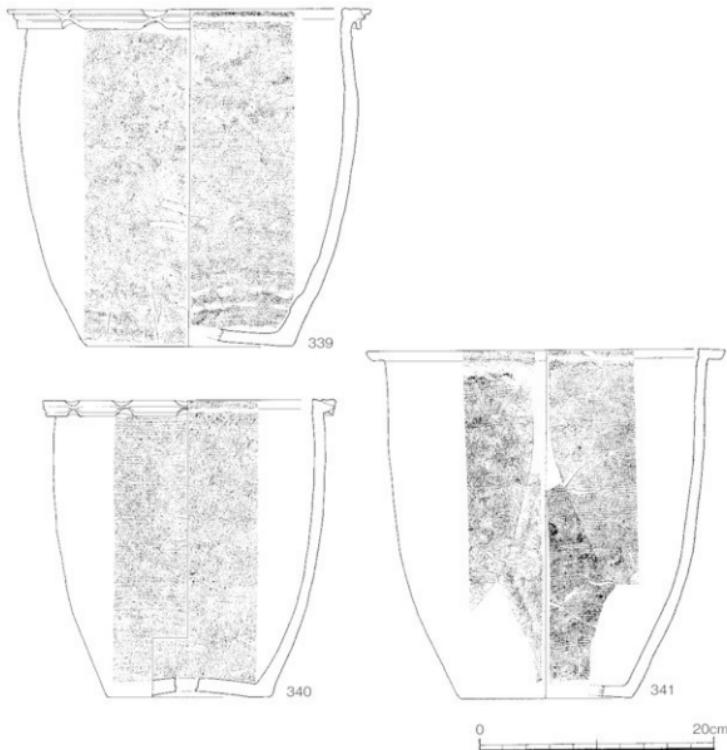
瓦質土器（第270・271図）

火鉢（第270図）

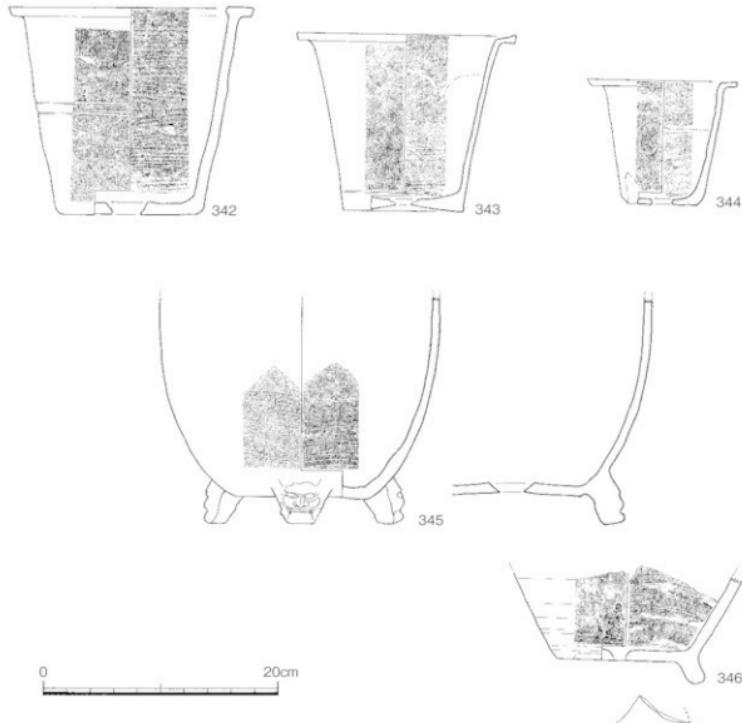
351～357は外面に型押しで文様が施されたものである。351・355・357は胎土に金雲母が入る。351は木目状の文様である。352は高台外面に「宇」の銘が押される。356は底面中央に内側から穿孔が施されており、植木鉢に転用したものと思われる。357は高台部分で、 $1/4$ 程度の残存率であるため全体は不明であるが、1か所穿孔が観察される。少なくとも1か所はあけられたと確認される。

七厘（第271図）

358～361は七厘の部品と思われるものである。361は五徳と同様の用途のものであると思われるが、突起は3か所である。



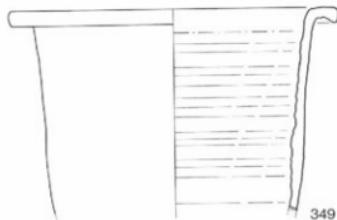
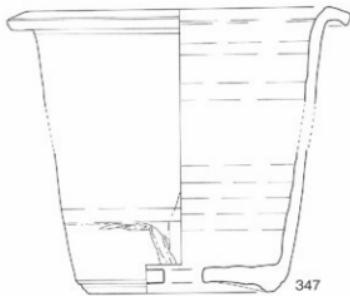
第267図 陶器47 植木鉢



第268図 陶器48 植木鉢

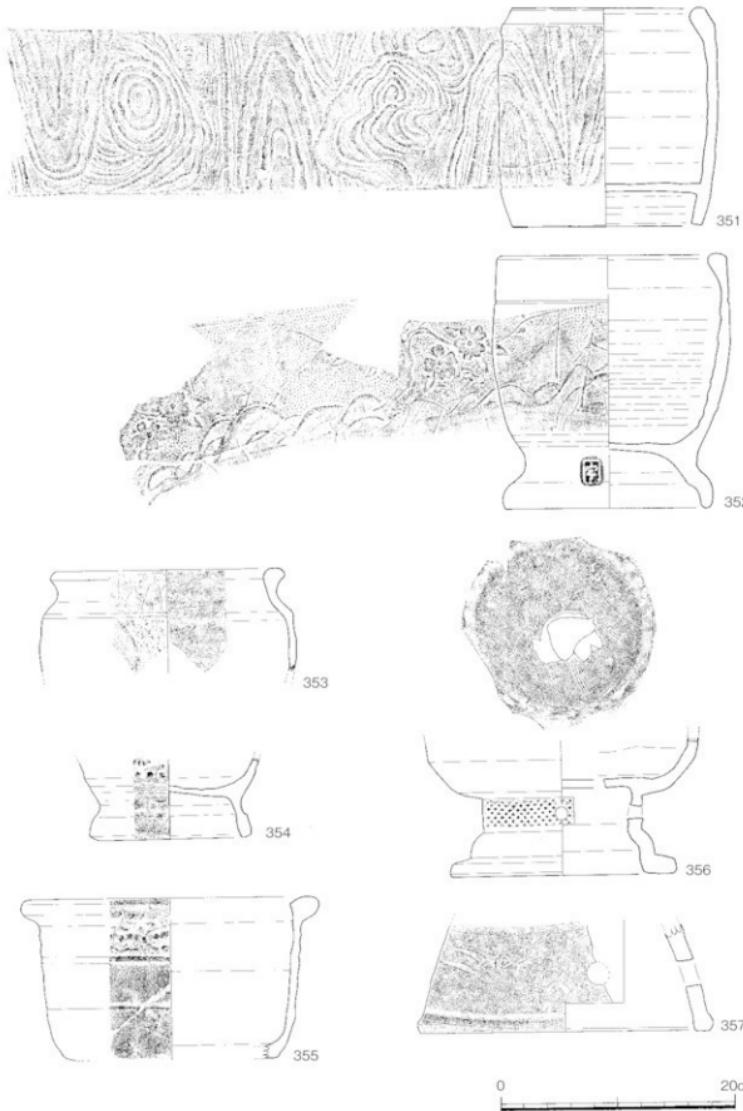
陶器観察表11

件目 番号	所蔵 番号	種別	分類	呂名	產地	出土区	法量 (cm)		胎土の種類 色・質	施釉の種類 色・質	施釉部位	時期	備考
							口徑	底径					
第 263 回	327	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	47.7	19.0	27.4	朱褐色	—	—	10世紀代
	328	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	40.0	—	—	暗褐色	鉢身	内面に口縁部施釉 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代
第 264 回	329	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	31.2	14.4	21.9	栗褐色	鉢身	内面施釉・口唇部施釉 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代
	330	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	33.0	—	—	栗褐色	鉢身	内面施釉・口唇部施 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代
第 265 回	331	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	—	13.4	—	栗褐色	鉢身	内面・外底面無釉 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代
	332	陶器	鉢	植木鉢	春屋	G 地点	—	—	—	こぶし 栗褐色	—	—	10世紀代
第 266 回	333	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	46.4	19.4	28.7	栗褐色	鉢身	口唇部以外無釉 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代
	334	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	42.4	—	—	栗褐色	鉢身	内面・口唇部・外底 面無釉	10世紀代
第 267 回	335	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	38.0	18.2	29.2	赤褐色	口唇部・外底面無釉 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代 安南一系 鉢口付け文	10世紀後半～10世紀代 安南一系 鉢口付け文
	336	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	47.2	—	—	栗褐色	鉢身	口唇部無釉 鉢口付け文	10世紀代
第 268 回	337	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	32.0	17.2	14.2	栗褐色	鉢身	口唇部・外底面無釉 鉢口付け文	10世紀代
	338	陶器	鉢	植木鉢	薩摩當代川系	G 地点	32.0	—	—	栗褐色	鉢身	口唇部無釉 鉢口付け文	10世紀代



0 20cm

第269図 陶器49 植木鉢



第270図 瓦質土器1 火鉢

土製品（第272～275図）

362～376は土製品である。

362～371は人形土製品である。絵付けがされていた可能性が考えられるが、残っていない。362は馬に侍が乗ったもので、侍の頭部や胴部、馬等がそれぞれ別々につくられ、組み合わされるようである。馬の頭部には、鬣をつけるための穴があけられている。363・364は日本髪を結った人形の頭部である。365・366は着物を着た人形の胴部である。367～369も人形の頭部である。370は軍服姿の人形の胴部である。371は手に小槌を持った大黒様である。

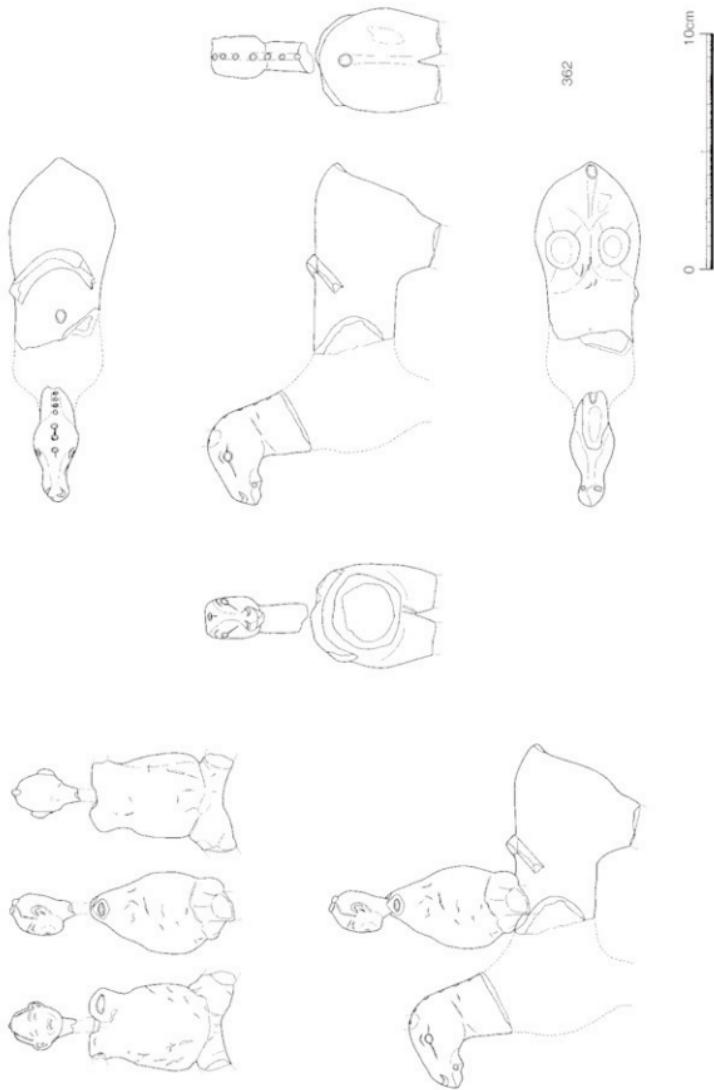
372・373は動物形土製品である。372は犬、373は鳥である。

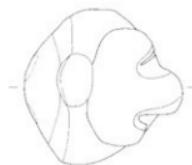
374は獅子頭の獣足である。375が「一等」の文字の入った土製のメダルで、中心にあけられた穴に銷が付着しており、針金等を通して使用したと思われる。376は土鉢である。上部に紐通しの穴が開けられている。



第271図 瓦質土器2 七厘他

第272図 土器品1





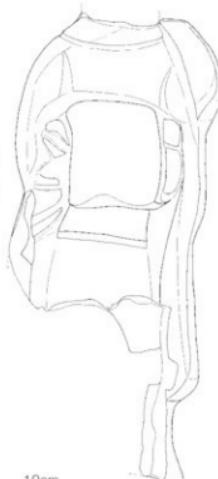
363



364



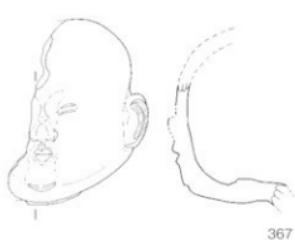
365



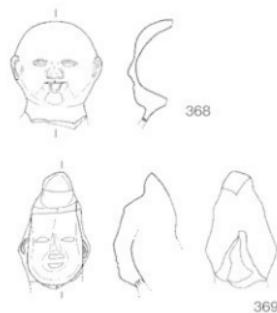
366



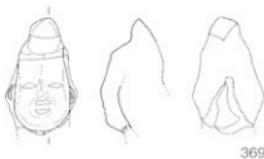
第273図 土製品2



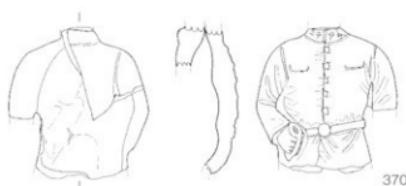
367



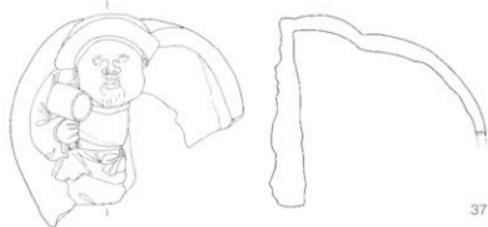
368



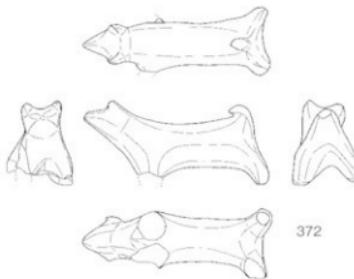
369



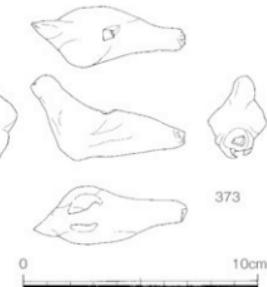
370



371



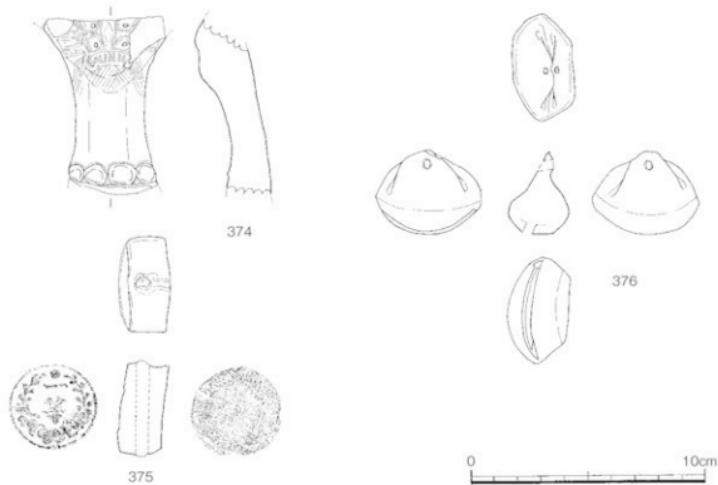
372



373

0 10cm

第274図 土製品3



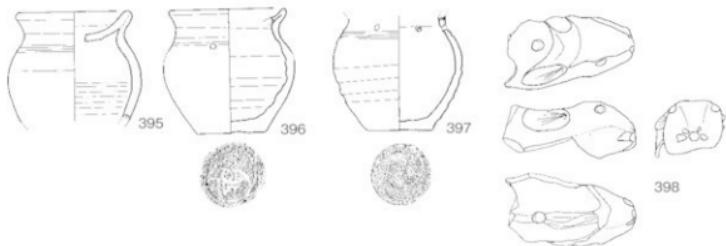
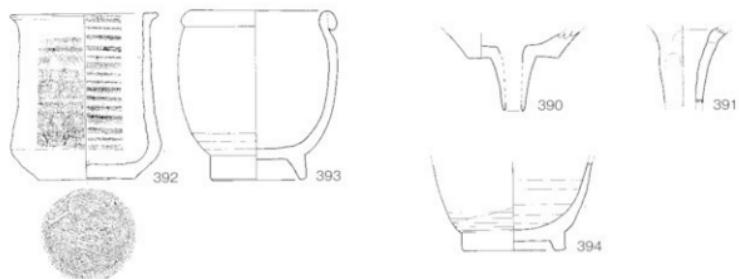
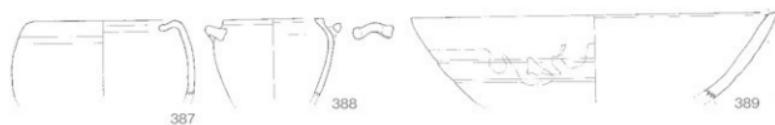
第275図 土製品4

その他（第276～279図）

377は外表面口縁部から胴部中位まで鉄軸がかけられるもので、器種用途は不明である。底部は糸切りである。378・379は土師質のものである。380は小鳥の餌入れである餅猪口である。381は鉄絵唐津の茶入れである。生産年代は1580年代～1610年代に相当するものである。382・383は小形の瓶で、油壺と思われる。383は胴部に白化粧がかかり、上から透明釉がかけられる二彩手である。384は内外面に褐軸がかかるものである。急須の把手部であろうか。385・386は、胎土が黄白色で、外面に轆轤目が強く残るもので、内面のみ透明釉がかけられる。底部は糸切りである。387は、胎土は緻密で内外面に薄い灰釉がかかるもので、17世紀代の初期の薩摩焼であると思われるが、器種不明である。388は土師質の小壺で、関西系のものと思われる。耳は2か所付く。389～391は陶製の漏斗である。389は内面と外表面の口縁部に褐釉が施釉される。390・391は基本的に内面が施釉される。

陶器・瓦質土器観察表12

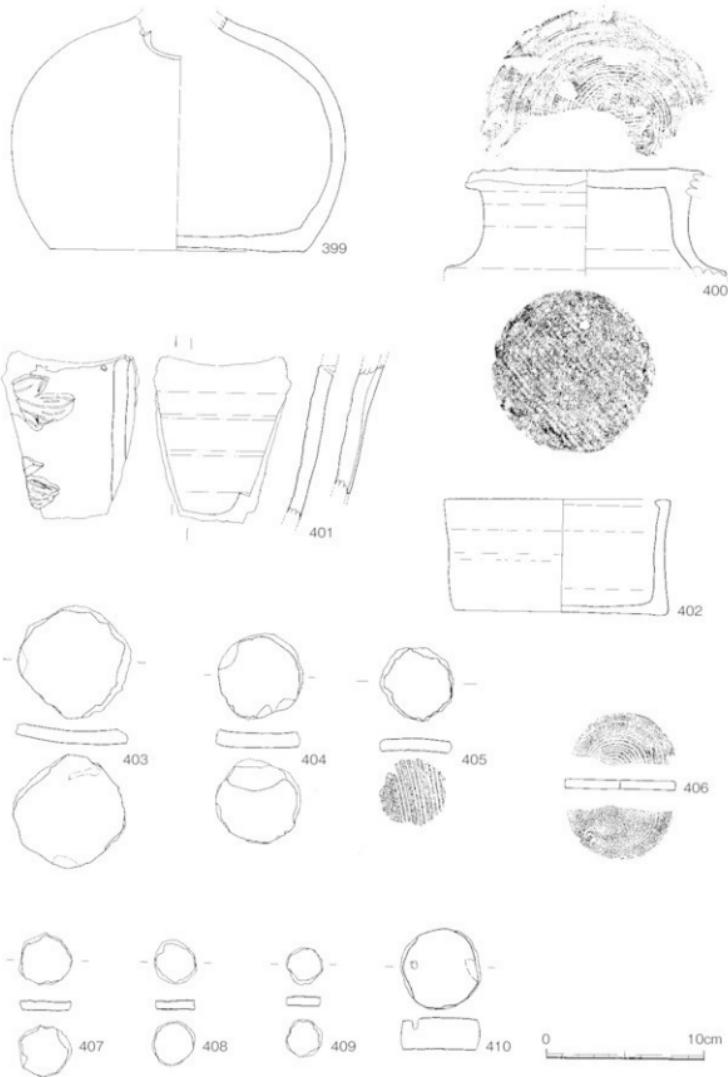
件目 番号	所蔵 番号	種類	分類	西暦	产地	出土場	法量 (cm)		胎土の 性質	施釉の 種類 色、圖	施釉部位	時期	備 考	
							口徑	底径						
377	海舟	鉢	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	31.0	17.3	25.6	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	口縫先端鉄輪
378	340	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	24.8	14.0	25.0	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	口縫先端鉄輪
379	341	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	30.5	14.4	19.6	泥質無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	19世紀代	
380	342	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	20.8	11.5	17.5	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	
381	343	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	19.0	10.2	15.0	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	
382	344	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	12.6	—	10.5	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	
383	345	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	—	11.0	—	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	獅子頭の脚三ヶ所付
384	346	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	—	13.8	—	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	三星
385	347	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	29.2	16.0	24.0	泥質無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	19世紀代	
386	348	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	24.8	17.0	20.4	泥質無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	19世紀代	
387	349	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	—	—	—	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	
388	350	海舟	桶木鉢	薩摩當代山田	G地点	—	—	—	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	
389	351	瓦質土器	鉢	火鉢	—	19.0	—	—	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	
390	352	瓦質土器	鉢	火鉢	—	16.0	10.6	15.6	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	外表面無釉
391	353	瓦質土器	鉢	火鉢	—	16.0	11.0	15.6	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	外表面無釉
392	354	瓦質土器	鉢	火鉢	—	16.0	11.0	15.6	泥質	内面・口縁部・外表面無釉	鉄輪	内面・口縁部・外表面無釉	19世紀代	外表面無釉
393	355	瓦質土器	鉢	火鉢	—	19.6	17.1	21.3	泥質無釉	—	—	—	近代以前	外表面無釉
394	356	瓦質土器	鉢	火鉢	—	20.0	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
395	357	瓦質土器	鉢	火鉢	—	12.2	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
396	358	瓦質土器	鉢	火鉢	—	25.4	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
397	359	瓦質土器	鉢	火鉢	—	18.8	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
398	360	瓦質土器	鉢	火鉢	—	24.6	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
399	361	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
400	362	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
401	363	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
402	364	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
403	365	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
404	366	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
405	367	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
406	368	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
407	369	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
408	370	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
409	371	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
410	372	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
411	373	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
412	374	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
413	375	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
414	376	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
415	377	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
416	378	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
417	379	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
418	380	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
419	381	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
420	382	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
421	383	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
422	384	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
423	385	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
424	386	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
425	387	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
426	388	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
427	389	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
428	390	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
429	391	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
430	392	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
431	393	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
432	394	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
433	395	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
434	396	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
435	397	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
436	398	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
437	399	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
438	400	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
439	401	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
440	402	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
441	403	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
442	404	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
443	405	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
444	406	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
445	407	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
446	408	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
447	409	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
448	410	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
449	411	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
450	412	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
451	413	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
452	414	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
453	415	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
454	416	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
455	417	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
456	418	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
457	419	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
458	420	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
459	421	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
460	422	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
461	423	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
462	424	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
463	425	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
464	426	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
465	427	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
466	428	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
467	429	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
468	430	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
469	431	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
470	432	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—	近代以前	外表面無釉
471	433	瓦質土器	鉢	火鉢	—	—	—	—	泥質	—	—	—		



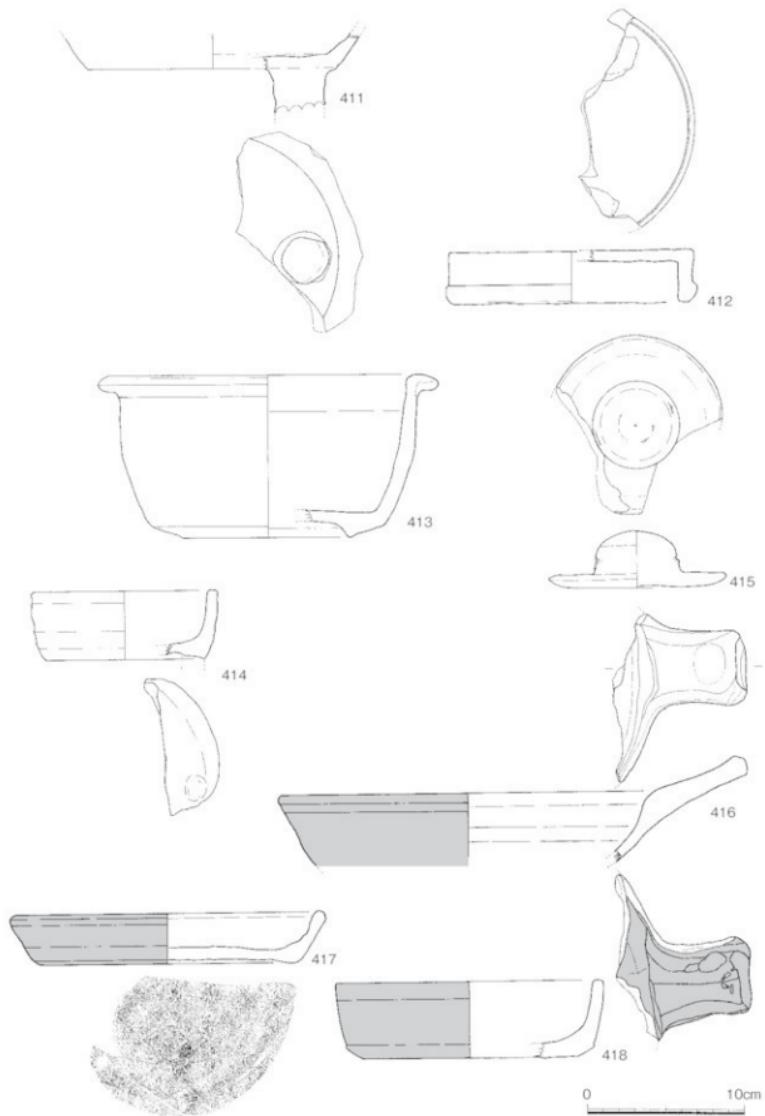
0 10cm

0 5cm

第276図 その他1

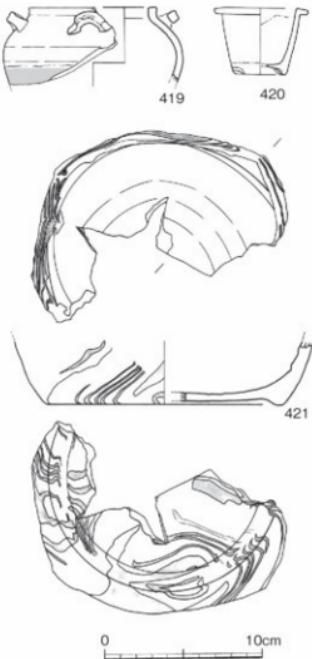


第277図 その他2



第278図 その他3

392は薩摩焼苗代川系のものであるが、器種は不明である。褐釉が外面腰部までかかり、内面は口縁部上位までで、以下無釉である。393・394は瀬戸・美濃のものである。内面と外面腰部まで褐釉が施釉される。395～397は土師質の貯金壺である。上部は閉じられ、中央にスリットが入るものと思われる。中身を出す際、上部を割って取り出すため残存していない。398は白色陶胎の白薩摩の水滴である。ウサギを型取っている。399は漫瓶である。肩部に注口が見られる。400は瓦質の器台である。胎土に金雲母が観察される。401は琉球産の荒焼である。外面に貼り付け文が施されるもので、器形は角形になると思われる。盆栽鉢等の用途が考えられるが、器種は不明である。402はサヤ鉢である。403～410は薩摩焼苗代川系の鉢や擂鉢・甕・壺を転用したメンコである。406は両面に糸切りが見られる円盤状のもので、メンコとしたが詳細は不明である。410は瓦を転用したものである。411～418は、土師質のものである。411・412は器種不明のもので、411の突起部は3か所つき、その部分が412の上面に接合するものと思われる。413は鉢形のものである。414は底部に足が3か所付く。香炉と思われるが、口唇部に煤が付着しており、灯明具として使用した可能性が窺える。415は火消し壺の蓋である。416～418は焙烙である。外面には煤が付着する。419・420は土師質の胎土に柿色の釉がかかるもので、関西系の軟質施釉陶器である。419は耳が2か所付く小形の土鍋と思われ、底部には煤が付着する。420は植木鉢のミニチュアである。421は土師質の胎土に白土がマーブル状に混じったものである。



第279図 その他4

轆の羽口（第280図）

422～427は轆の羽口である。422～424・427の先端には鉄滓が熔着している。

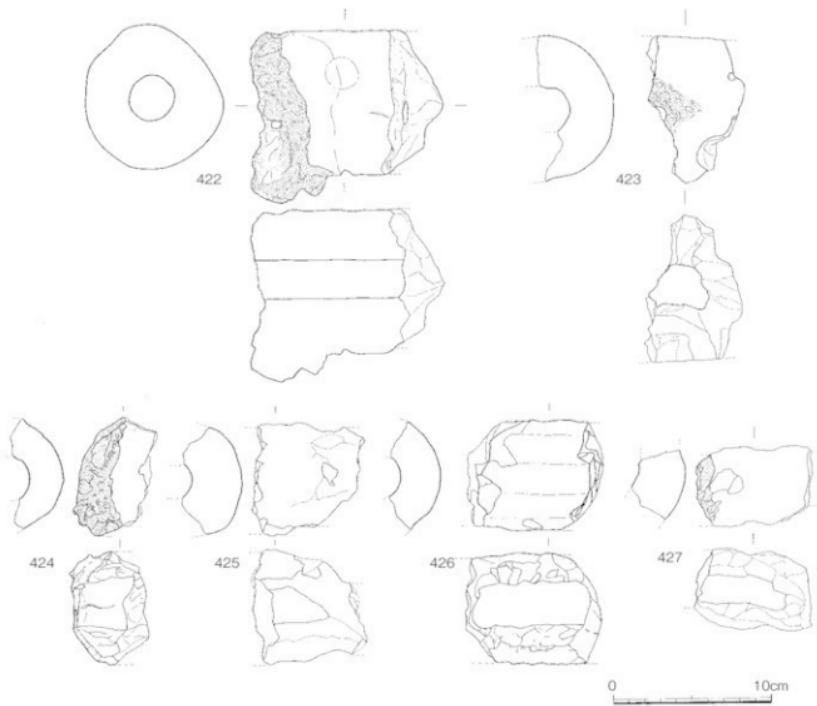
土管・錫製品・石臼・木製品（第281図・写真図版108図）

428～431は土管である。428の口縁内部と、429の口縁先端には、土管同士を合わせるときに使用した漆喰のようなものが付着している。

432は石臼である。

433は錫製の鶴首徳利である。外底面に「寸」のマークが入っている。

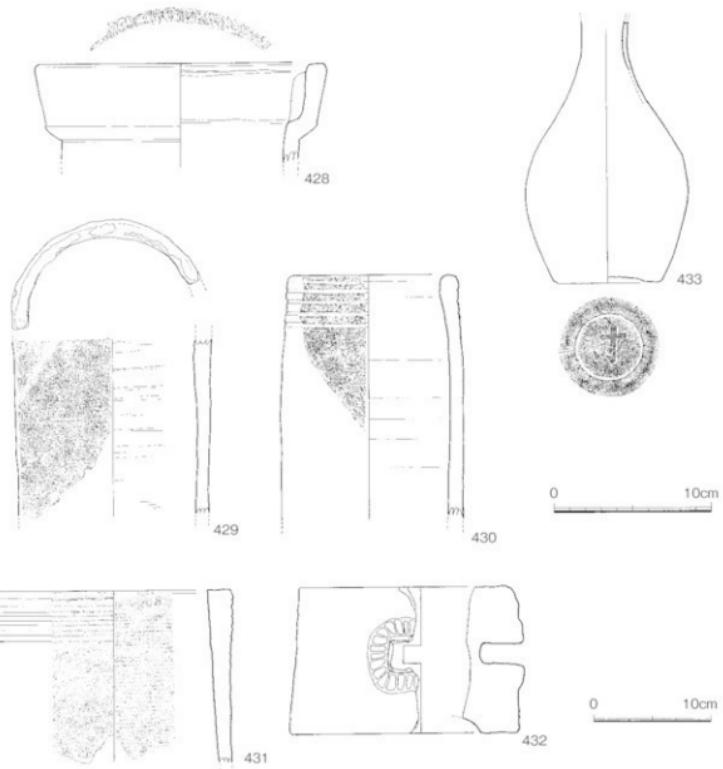
434・435は木製品の櫛で、材質はつけである。残存状況が非常に悪く、実測に耐えなかったため写真のみ掲載した。



第280図 鞍の羽口

土師質土器・土製品観察表

検出 番号	種類 番号	器種	分類	産地	出土区	重量(g)		胎土の 色	胎葉の種類 色	施釉部位	時期	備考
						口径	上径					
第 271 回	358	土師質土 器	火鉢	七輪形	不明	G 地点	—	—	じぶい 褐色	—	—	近代以降
	359	土師質土 器	火鉢	七輪形	不明	G 地点	—	—	淡青褐 色	—	—	近代以降
	360	土師質土 器	火鉢	七輪形	不明	G 地点	22.0	5.1	淡青褐 色	—	—	近代以降
	361	土師質土 器	火鉢	七輪形	不明	G 地点	19.8	—	じぶい 褐色	—	—	近代以降 三ヶ所スズ有り
第 272 回	362	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	褐色	—	—	19世紀以降 馬上持
第 273 回	363	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降
	364	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降
	365	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	褐色	—	—	19世紀以降
	366	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	褐色	—	—	19世紀以降
第 274 回	367	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	青黄	—	—	19世紀以降
	368	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降
	369	土製品	土人形	人形	在焼か?	G13	—	—	褐色	—	—	19世紀以降
	370	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降
	371	土製品	土人形	人形	在焼か?	G 地点	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降
	372	土製品	土人形	動物形	在焼か?	G14	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降 大
	373	土製品	土人形	動物形	在焼か?	G14	—	—	じぶい 褐色	—	—	19世紀以降 鳥



第281図 土管・錫製品・石臼

土製品・土師質土器・陶器観察表

登記 番号	参考 番号	種類	器種	分類	産地	出土区	法量 (kg)			土器の 種類	施釉の 種類	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	高さ					
274	374	土製品	筒形	—	在地?	G地点	—	—	—	—	—	—	19世紀後期	獣子頭の鋸目
275	375	土製品	ダルム	—	在地?	G地点	—	—	—	—	—	—	19世紀後期	
276	376	土製品	筒形	—	在地?	G地点	—	—	—	—	—	—	19世紀後期	
277	377	陶器	鉢	鉢	在地?	G地点	4.6	2.6	3.2	青釉色	鉢輪	外面上縁部のみ施釉	19世紀後半	
278	378	19世紀土器	鉢	鉢	在地?	G地点	5.6	3.7	3.5	青釉色	—	—	近代以前	
279	379	19世紀土器	皿	小皿	在地?	G地点	7.8	5.4	3.1	淡青色	—	—	近代以前	
280	380	陶器	鉢	鉢	在地?	G地点	5.2	3.2	2.3	淡青色	灰釉	外底面は無釉	19世紀後半	
281	381	陶器	茶入	茶入	在地?	G地点	3.0	—	—	青釉裡	灰釉・鉢輪	全底面釉	1500~1610年代	外目に鉢輪の鋸文
282	382	陶器	瓶	油壺?	御園門 近江	G地点	2.2	—	—	淡青色	鉢輪	内底無釉	18世紀後半	
283	383	陶器	瓶	油壺?	御園門 近江	G地点	2.6	—	—	淡青色	通心輪	内底無釉	18世紀後半	二和手
284	384	陶器	木注	急須把手	御園門 近江	G地点	3.0	—	—	青釉裡	鉢輪	全底面釉	19世紀後半	
285	385	陶器	不明	不明	不明	G地点	7.3	3.2	6.1	淡青色	—	内面のみ施釉	19世紀後半	裏面手切り
286	386	陶器	不明	不明	不明	G地点	10.2	4.3	5.5	淡青色	—	内面のみ施釉	19世紀後半	裏面手切り
287	387	陶器	甕?	小甕?	関西系	G地点	11.2	—	—	青色	灰釉	全底面釉	17世紀代	
288	388	陶器	甕?	小甕?	関西系	G地点	6.4	—	—	淡青裡	—	—	19世紀代	
289	389	陶器	—	漏斗	御園門 近江	G地点	23.2	—	—	淡青裡	鉢輪	内面と外底口縁部は 無釉	19世紀代	

件号	所蔵 番号	種類	分類	石器	花崗岩	出土区	法量 (cm)		施土の 色	施業の種類	施設部位	時間	備 考
							口径	底径					
第 276 回	390	陶器	—	蓋	薩摩代 川系	G 地点	—	1.4	—	褐色褐色	鉄輪	外側口部は無輪	19世紀代
	391	陶器	—	蓋	薩摩代 川系	G 地点	—	—	褐色褐色	鉄輪	内面は無輪	19世紀代	
	392	陶器	鉢	灰褐色と 褐色	薩摩代 川系	G 地点	9.2	6.0	10.5	褐色	輪	内面と底盤から外側 輪無	19世紀代
	393	陶器	巻?	灰褐色と 褐色	薩摩代 川系	G 地点	8.7	5.7	10.6	褐色	鉄輪	外側腰部から高台内 部無輪	17~18世紀代
	394	陶器	巻?	灰褐色と 褐色	薩摩代 川系	G 地点	—	6.6	—	褐色	鉄輪	外側腰部から高台内 部無輪	17~18世紀代
	395	土師質土器	壺	灰褐色	不明	G 地点	6.6	—	—	浅黃褐色	—	—	近代
	396	土師質土器	壺	灰褐色	不明	G 地点	7.4	4.4	7.9	灰白色	—	—	近代
	397	土師質土器	壺	灰褐色	不明	G 地点	—	4.0	—	浅黃褐色	—	—	近代
	398	陶器	水滴	水滴	薩摩代 川系	G 地点	—	—	—	灰白色	透明輪	内面無輪	19世紀代 白羅摩 ウサギ形
	399	陶器	瓶	深窓	薩摩代 川系	G 地点	—	16.0	—	褐色褐色	鉄輪	内面無輪、外底面輪 無	19世紀代
第 277 回	400	瓦質土器	貯貝	貯貝	不明	G 地点	—	—	—	—	—	—	19世紀代? 胎土に金銀得含む
	401	陶器	鉢	三脚?	變型	G 地点	—	—	—	褐色	—	—	19世紀代 鐵球兜輪、貼り付け又
	402	土師漆器	圓筒具	サヤ鉢	不明	G 地点	13.4	14.5	7.2	褐色褐色	—	—	?
	403	陶器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	7.2	—	0.9	褐色褐色	鉄輪	圓面施輪	19世紀代 口径はメンコ径 傷の軋用
	404	陶器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	4.9	—	0.9	黃褐色	反輪	上面施輪	19世紀代 口径はメンコ径 土堀底部 の軋用
	405	陶器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	4.2	—	0.8	褐色褐色	反輪	圓面施輪	19世紀代 口径はメンコ径 踏跡の軋 用
	406	陶器	メンコ?	メンコ?	薩摩代 川系	G 地点	6.8	—	0.6	灰色	—	—	19世紀代 口径はメンコ径 植物印記 有り
	407	陶器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	3.2	—	0.5	褐色	反輪	圓面施輪	19世紀代 口径はメンコ径
	408	陶器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	2.5	—	0.5	褐色	反輪	圓面施輪	19世紀代 口径はメンコ径
	409	陶器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	2.1	—	0.6	褐色	反輪	圓面施輪	19世紀代 口径はメンコ径
第 278 回	410	瓦質土器	メンコ	メンコ	薩摩代 川系	G 地点	4.7	—	2.0	灰白色	—	—	19世紀代 口径はメンコ径 瓦の軋用
	411	土師質土器	不明	不明	不明	G 地点	—	15.8	—	にじいろ 褐色	—	—	19世紀以降 胎土に金銀得含む 4.12 第一回で有り
	412	土師質土器	不明	不明	不明	G 地点	—	15.2	—	にじいろ 褐色	—	—	19世紀以降 胎土に金銀得含む 4.11 送り一回体か
	413	土師質土器	鉢	三脚?	不明	G 地点	20.2	10.6	10.4	にじいろ 褐色	—	—	19世紀以降 胎土に金銀得含む
	414	土師質土器	盆	盆	不明	G 地点	11.8	10.0	4.4	褐色	—	—	19世紀以降 打模具として使用か? 口縁に縫合痕
	415	土師質土器	裏	裏	不明	G 地点	—	11.2	3.1	褐色	—	—	19世紀以降 火消し漆の裏
	416	土師質土器	鍋	結節	不明	G 地点	22.0	—	—	灰白色	—	—	18~19世紀代 外間に縫合痕
	417	土師質土器	鍋	結節	不明	G 地点	19.3	16.0	3.2	灰白色	—	—	18~19世紀代 外間に縫合痕
	418	土師質土器	鍋	結節	不明	G 地点	17.0	13.5	4.9	にじいろ 褐色	—	—	18~19世紀代 外間に縫合痕
	419	新開西和 陶器	鍋?	土鍋?	西和系	G 地点	8.0	—	—	にじいろ 褐色	黄輪	—	19世紀代 外底面に縫合痕
第 279 回	420	新開西和 陶器	鉢	楕木鉢	西和系	G 地点	6.0	3.2	4.2	にじいろ 褐色	黄輪	—	19世紀代 ミニチュア
	421	土師質土器	鉢?	鉢?	肥前	G 地点	—	15.0	—	にじいろ 褐色	—	—	19世紀代 外間に縫合痕
	422	土師質土器	鍋の引口	—	在庫	G 地点	—	—	—	浅黄色	—	—	先端に鉄洋留痕
	423	土師質土器	鍋の引口	—	在庫	G 地点	—	—	—	にじいろ 褐色	—	—	先端に鉄洋留痕
	424	土師質土器	鍋の引口	—	在庫	G 地点	—	—	—	褐色	—	—	先端に鉄洋留痕
	425	土師質土器	鍋の引口	—	在庫	G 地点	—	—	—	にじいろ 褐色	—	—	—
	426	土師質土器	鍋の引口	—	在庫	G 地点	—	—	—	明赤褐色	—	—	—
	427	土師質土器	鍋の引口	—	在庫	G 地点	—	—	—	浅黃褐色	—	—	先端に鉄洋留痕
	428	陶器	土管	薩摩代 川系	G 地点	18.6	—	—	赤褐色	—	外側施輪	近代	
	429	陶器	土管	薩摩代 川系	G 地点	—	—	—	赤褐色	—	外側施輪	近代	
第 280 回	430	陶器	土管	薩摩代 川系	G 地点	11.4	—	—	明赤褐色	—	外側施輪	近代	
	431	陶器	土管	薩摩代 川系	G 地点	20.0	—	—	赤褐色	—	外側施輪	近代	
	432	石製品	石臼	—	G 地点	—	19.0	12.5	—	—	—	—	近代
	433	金属製品	匙	鍔利	G 地点	—	6.5	—	灰色	—	鍔製	近代	
	434	木製品	柾	柾	—	G 地点	—	—	—	—	—	19世紀以降	つけ
	435	木製品	柾	柾	—	G 地点	—	—	—	—	—	19世紀以降	つけ